

## レズビアン，ゲイ，バイセクシュアルの当事者支援 活動と強みに着目したナラティブ研究

田中，将司

<https://hdl.handle.net/2324/6787386>

---

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（心理学），課程博士  
バージョン：  
権利関係：

レズビアン, ゲイ, バイセクシュアルの  
当事者支援活動と強みに着目したナラティブ研究

田中 将司

|  |    |
|--|----|
| 第1章 レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル (LGB) を対象にした<br>心理学研究の概観 | 1  |
| 第1節 はじめに                                       | 2  |
| 第2節 LGB である経験に関する心理学研究                         | 4  |
| 1. LGB アイデンティティ発達に関する研究                        |    |
| 2. 内在化された同性愛嫌悪に関する研究                           |    |
| 3. LGB Identity Scale の開発に至る研究                 |    |
| 第3節 LGB であることの強みに関する研究と展望                      | 9  |
| 1. 強みに関する研究                                    |    |
| 2. 「LGB であることの強み」に関する研究                        |    |
| 3. 研究の展望-文化・歴史的背景と社会構成主義の研究-                   |    |
| 第4節 本研究における主題と構成                               | 23 |
| 第2章 本邦のLGBの性指向に基づく経験-モデル生成の試み-                 | 25 |
| 第1節 問題と目的                                      | 26 |
| 第2節 方法   | 28 |
| 第3節 結果   | 31 |
| 1. LGB への評価と態度に関する語りのグループ編成                    |    |
| 2. LGB の性指向に基づく経験と影響を与える要因-図解化, 叙述化の結果-        |    |
| 第4節 考察   | 37 |
| 1. LGB への評価と態度に関する語りのグループに関する考察                |    |
| 2. LGB の性指向に基づく経験と影響を与える要因 (図解化, 叙述化) に関する考察   |    |
| 3. 研究の展望                                       |    |
| 第3章 一人のバイセクシュアルのナラティブ<br>-自分も支えられるための当事者支援活動-  | 42 |
| 第1節 問題と目的                                      | 43 |
| 第2節 方法   | 45 |
| 第3節 一人のバイセクシュアル (B) のナラティブ                     | 50 |
| 1. B の年表                                       |    |
| 2. B のナラティブ                                    |    |
| 第4節 Bのナラティブのまとめ-自分も支えられるための当事者支援活動-            | 61 |

|                                       |     |
|---------------------------------------|-----|
| 第4章 一人のゲイのナラティブ                       |     |
| -他者も自分も支えられなかった当事者支援活動-               | 63  |
| 第1節 問題と目的                             | 64  |
| 第2節 方法                                | 66  |
| 第3節 一人のゲイ (C) のナラティブ                  | 68  |
| 1. Cの年表                               |     |
| 2. Cのナラティブ                            |     |
| 第4節 Cのナラティブのまとめ                       | 82  |
| -他者も自分も支えられなかった当事者支援活動-               |     |
| 第5章 一人のレズビアンのナラティブ                    |     |
| -『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動-           | 84  |
| 第1節 問題と目的                             | 85  |
| 第2節 方法                                | 87  |
| 第3節 一人のレズビアン (H) のナラティブ               | 89  |
| 1. Hの年表                               |     |
| 2. Hのナラティブ                            |     |
| 第4節 Hのナラティブのまとめ                       |     |
| -『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動-           | 102 |
| 第6章 LGBの当事者支援活動と強みに着目したナラティブに関する考察    |     |
| -自分も支えられることについて-                      | 105 |
| 第1節 3人のLGBのナラティブ                      | 106 |
| 1. Bのナラティブ-自分も支えられるための当事者支援活動-        |     |
| 2. Cのナラティブ-他者も自分も支えられなかった当事者支援活動-     |     |
| 3. Hのナラティブ-『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動- |     |
| 第2節 自分も支えられるための当事者支援活動                | 110 |
| 1. 自分も支えられていることの実感                    |     |
| 2. その者の人生を支持し、発展に貢献できる者と話し合える場        |     |
| 第3節 研究の展望                             | 116 |

|               |     |
|---------------|-----|
| 第7章 総合考察      | 119 |
| 第1節 各章の要約     | 120 |
| 1. 本研究の目的の整理  |     |
| 2. 各章の要約      |     |
| 第2節 本研究の意義    | 130 |
| 1. 学術的意義      |     |
| 2. 社会的意義      |     |
| 3. 臨床的意義      |     |
| 第3節 本研究の課題と展望 | 135 |
| 文献            | 137 |
| 資料            | 149 |

## 第1章

# レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルを対象にした 心理学研究の概観

## 第1節 はじめに

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル（以下、LGB と略記）への理解がさまざまな場面で求められるようになった。周囲の無理解、差別偏見、社会に根付く同性愛嫌悪 (Herek, 2003; 平田, 2014a) によって、マジョリティと比較した場合の不登校経験率の高さ、精神的健康度の低さ (日高, 2019)、うつ病罹患率の高さ (Kaung, 2005) など、当事者が心理的課題を抱えている可能性が高いことがこれまでに数多く指摘されている。しかし、当事者への差別反対の動きが高まっても性的偏見が存在する米国の例 (Herek, 2003) から、日本でも性差別や性的偏見は社会的な問題として残存することが推測される。本邦でも当事者理解を深めていくことが引き続き求められるだろう。

心理師・心理士の活躍する現場も LGB の支援的役割を担うようになったが、現状本邦では適切な支援が行われていると言い切れず、未だ課題は多い。近年は、スクールカウンセリング (井出・玉井・鎌塚・山元・松尾・細川, 2019) や学生相談 (河野, 2020) などの教育領域を中心に LGB を支援した実績が増えている。それに伴い、American Psychological Association (2009) が LGB への心理的支援を行うためのガイドラインを提示し、いくつかの支援方法やカウンセラー養成プログラムが提唱され (葛西・岡橋, 2011; Matthews, 2007; Zubernis, Snyder, & McCoy, 2011)、支援に関する言及、研究も蓄積され始めた。一方で、本邦での LGB に関する心理学的立場からの言及は依然として多いと言えない。当事者の経験への深い理解を支援者が持つことができないために、学校や学生相談の場が役に立っているとはいえない状況にあることが、当事者や専門家によって指摘されている (日高, 2019; 柘植, 2014)。学生相談を例に挙げると、LGBTQ+の相談を受けたことは半数以上の大学であるものの、LGBTQ+の学生支援のガイドラインの未作成率は 90%台、学生相談室のリーフレットに LGBTQ+に関する記述をしていない大学は 70~80%であることが複数の研究で示されている (羽田野・多久島・永末・大坪, 2020; 風間・北仲・釜野・林・藤原, 2021)。カミングアウトを受けた友人が、LGB 本人の許可なく性指向を第三者に伝えてしまい、自殺に追い込まれた大学院生の事例も、近年の出来事としてあげられる (朝日新聞, 2016)。ニーズの高さに反して LGB の十分な理解がなされず、対応が追いついていないことが窺える。そのため本邦では、心理的支援を展開するための方法と同等かそれ以上に、基本的な LGB の経験に関する理解を深めていくことが必要である。

LGB を対象にした当事者の経験に関する心理学研究は国外には多くみられ、国内でも少ないながらもいくつかある。そこで本章では、国内外の心理学分野での LGB の経験に関する研究を概観し、整理することから始める。本邦の当事者を理解するための研究の展望を見出し、本研究の主題と構成について述べることとする。

本論で頻出する性に関する用語を先に整理しておく。まず「LGB」は、本論の研究対象者

となる“レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル”を示す。当事者間での経験の差異も後述の通り指摘されているが、LGB は性指向で共通した経験をしていることも多く、共に研究対象者となってきた (D’Augelli, 1994 ; Mohr & Fassinger, 2000 ; Mohr & Kendra, 2011 ; Riggie, Mohr, Restosky, & Fingerhut, 2014; Rostati, Pistella, Giovanardi, & Baiocco, 2021)。これらの先行研究に則り、本論も研究対象者をLGBとし、研究対象者を示す用語として、「LGB」を用いることにする。

また、「LGBT」、「LGBTQ」、「LGBTQ+」、「セクシュアルマイノリティ」、「SOGIE」は、いずれも、“LGBを含めた、異性愛者やシスジェンダーでないと自認する、もしくは、それらの自認に違和感を覚える、全ての当事者”を指すこととする。これらの用語は全て、ほとんど同義として一つの用語に統一されずに使用されており、本論にて示す先行研究や研究対象者によっても、使用する用語は異なっていた。語られた内容の通りに結果を示すと、これらの用語は全て用いられることになるだろう。

ただし、本論では基本的に「LGBTQ+」を使用する。葛西(2019)は、以下の点から、「LGBTQ+」以外の用語を使用するデメリットについて言及した。

**LGBT, LGBTQ** : レズビアン (lesbian), ゲイ (gay), バイセクシュアル (bisexual), トランスジェンダー (transgender), クエスチョニング (questioning), クィア (queer) の頭文字をとった用語であり、他にもある様々なセクシュアリティ, ジェンダーを包括していない。男女以外には“LGBT”しかいない, “LGBT”は男女以外のセクシュアリティ, ジェンダーの代表である, などの偏った認識を生み出すリスクがある。

**セクシュアルマイノリティ** : 少数派という認識が強調され, 多数派が少数派の人を救う, 助ける, などという偏った構図, 価値観を生み出すリスクがある。

**SOGIE** : 性指向 (sexual orientation), 性自認 (gender identity), 性表現 (gender expression) の頭文字をとった用語であり, あらゆるセクシュアリティ, ジェンダーをトピックとするときに使用されるが, 本邦での使用頻度は低く, セクシュアリティ, ジェンダーをテーマにしていることを認識してもらえない可能性がある。

このような用語の意味や本邦の理解度を踏まえると, あらゆるセクシュアリティ, ジェンダーを包括し, 本邦での使用頻度が比較的高い, 「LGBTQ+」を使用することが現状適切であろう。さらに適切な用語が生まれる可能性はあるが, 葛西(2019)の理解に則り, 本論の時点では「LGBTQ+」が複数ある類似の用語の中で適切と判断し, 先行研究の引用や当事者の語りを示す場合以外には, 基本的に使用することとする。

その他, 本文中やLGBの語りの中であらわれる重要な用語も整理しておく。「性指向」と「性的指向」, 「セクシュアリティ」は, 全て“恋愛や性愛などがどの対象に向かうか”を示す用語とする。「ジェンダー」は, “自分自身の性別をどう理解し, ふるまい, 他者からどのように見られたいか”を示す用語とする。「性自認」, 「ジェンダーアイデンティティ」は, 共に“自分自身の性別への理解”を示す用語とする。



## 第2節 LGB である経験に関する心理学研究

LGB である経験に関する研究は国内外で数多く見られるが、代表的な研究として、1) LGB アイデンティティ発達に関する研究と、2) 内在化された同性愛嫌悪に関する研究があげられる。また、3) LGB Identity Scale の開発に至る研究がある。まずはその3領域の研究を概観する。

### 1. LGB アイデンティティ発達に関する研究

まず、当事者がどのように自身のセクシュアリティを認識し、受け入れていくかのプロセスを示す、LGB アイデンティティ発達研究を取りあげる。これまでに LGB アイデンティティ発達に関する研究は、国内外問わず行われてきた (Cass, 1979 ; D' Augelli, 1994 ; 堀田, 1998 ; McCarn & Fassinger, 1996 ; 宮腰, 2013 ; 高藤・岡本, 2017 ; Troiden, 1989)。中でも Cass (1979) は、そのプロセスを6段階に分けたモデルを示し、その他の研究の基礎となっている点で、この研究領域を代表すると言って良いだろう。それぞれを、「段階1: アイデンティティの混乱 (自分自身やその自分の振る舞いに同性愛的傾向があることを認識し、今まで築いてきた異性愛者である自己像との差に混乱する段階)」、「段階2: アイデンティティの比較 (ヘテロセクシュアルと自分の振る舞いを比較することで、異性愛者である自己像から離れ同性愛者である可能性を受け入れようになっていく段階)」、「段階3: アイデンティティの寛容 (孤独感、疎外感を感じる一方で自己像が同性愛に近づき、他の同性愛者に接触し始める段階)」、「段階4: アイデンティティの受容 (継続的な他の同性愛者との出会いによって、同性愛者である自己像を受け入れる段階)」、「段階5: アイデンティティへの誇り (社会的差別、異性愛者の圧力と対抗するために、さらに同性愛コミュニティにコミットし、同性愛アイデンティティを強調する段階)」、「段階6: アイデンティティの統合 (異性愛者の圧力にこだわらなくなり、同性愛者であるアイデンティティを、自分自身の一側面として統合する段階)」としている。このモデルは当事者の声に基づいており、理解のしやすさもあって、現在に至るまで心理的支援に参照されている (枝川, 2019 ; 葛西, 2014 ; Zubernis, Snyder, & McCoy, 2011)。

Cass (1979) モデルを基盤とし、LGB アイデンティティ発達モデルはこれまでに研究の蓄積が行われてきた。例えば Troiden (1989) は社会学の立場から研究レビューを行い、LGB のセクシュアリティは個人内の問題ではなく、社会的文脈に基づいて形成されていくことを指摘し、Cass (1979) のモデルの以前に「鋭敏化」という段階があることを提唱した。「鋭敏化」の段階では、LGB は自身をまだ異性愛者と認識しており、男女二元論的な経験を豊富にすることで、同性愛感情に敏感にならざるを得ない準備をされるとされる (Troiden, 1989)。McCarn & Fassinger (1996) は、他のマイノリティアイデンティティの

研究のレビューから、LGB も直線的な発達はなく、状態の変化や揺れがありながら LGB アイデンティティを内在化していく可能性があることを指摘し、Cass (1979) や Troiden (1989) のように、一つのプロセスを「段階 (stage)」という言葉で説明するのではなく、状態の変化や揺れを認める「時期 (phase)」という言葉を使用することを推奨した。また、McCarn & Fassinger (1996) は、「個人アイデンティティ」と「集団アイデンティティ」を区別してモデル生成を行ったことも特徴である。自分が LGB であることについての気づきや認知と、LGB のコミュニティに対する気づきや認知の発達は異なるものとし、先行研究を整理して二つを区別した発達モデルを提唱した (McCarn & Fassinger, 1996)。カミングアウトまでの発達プロセスのみに着目し、より具体的な当事者の経験をとらえた研究もある。宮腰 (2013) は、LGB のインタビューを質的に検討し、カミングアウトは、あるがままの自分で接したい思いと、関係性が失う不安との間での葛藤であることが捉えられた。高藤・岡本 (2017) も同様に、LGB のインタビューを質的に検討し、カミングアウトの機能に、異性愛者との間に感じる孤独感の解消があることや、カミングアウトを受け入れてもらえ、LGB であることを公言している環境があることで、カミングアウトの必要性も低下していくことなどを、当事者の声から示した。さらには、Cass (1979) モデルに限らず、Troiden (1989) モデルを参照した心理的支援の事例研究も行われてきた (堀田, 1998)。LGB アイデンティティ発達研究では多角的な言及が行われ、LGB により有益な視点が次々と提供されている状況といえる。

LGB アイデンティティ発達に関する研究は、その発展の中で、他のマイノリティ・アイデンティティと比較したときのいくつかの独自性も示した。古くは Gibson (1989) が、その頃の研究の動向から、LGB は、特別に家族の受け入れやサポートが得られづらい可能性を指摘した。石丸 (2001, 2007a) は、実際に民族マイノリティ、障害者との経験の差について、先行研究の比較から明らかにした。1) 異性愛が前提の家族や友人の社会であるために、出生時や自認当初から LGB の仲間やコミュニティに囲まれている当事者は滅多にいないこと、2) 自分でカミングアウトをしなければ可視化されることがない当事者が一定数いること、の 2 点で、独自性を有している可能性が高いと指摘する (石丸, 2001, 2007a)。後述する、強みに着目した研究を行った Riggle & Rostosky (2012) も、LGBTQ+ 当事者へのインタビューから、他者の関与がほとんどない状態から自己決定、自己理解を深め、他者へのコミットメントをはかる必要があることは、他のマイノリティには少ない経験であると述べた。自認時や出生時から周囲に同じ LGB がいることの少なさや、LGB であることがカミングアウトしない限り LGB であると認識されづらい点で、他のマイノリティと経験の差異が考えられる。

Cass (1979) から発展してきた一モデルで LGB を理解することへの限界も指摘されている。例えば Diamond (2007) は、LGB アイデンティティ発達に関する研究が、時間の経過とともに漸進的にアイデンティティを確立する線的な理解を行っていることに意義を唱え、非線的で、セクシュアリティが変容するなどの不連続性、突然性があることを実際の LGB

へのインタビューから指摘している。Rosario, Schrimshaw, & Hunter (2006) も、Cass (1979) の述べる「アイデンティティの統合」の段階の後、再び自身のセクシュアリティをポジティブに捉えられなくなった当事者の存在を示し、プロセスはより多様である可能性を指摘した。Floyd & Stein (2002) は、カミングアウトのパターンを若年層のLGBに尋ね、LGBであることを自分で受容した後にカミングアウトをしている者が一定数いることを明らかにし、Cass (1979) や Troiden (1989) の段階モデルで理解できない当事者は、特異な事例ではないことを示した。年代に即した経験の特有性に関する言及も、少ないながらもいくつかある。当事者の声から研究を行った Cass (1979) や 宮腰 (2013)、高藤・岡本 (2017)、堀田 (1998) の研究は、ほとんど青年期～成人前期を対象にしている。しかし、誰かを育てる「世代性」(Erikson, 1959/2011) の時期にある中年期の当事者が、同性カップルで子どもを育てることが当たり前でない社会において、特有の葛藤を抱え、適応を求められていることや、人生の「統合」(Erikson, 1959/2011) を求められる高齢期の当事者が、再度性指向について葛藤する可能性があること (DeLamater & Sill, 2005) がいわれ、思春期以前のLGBを対象にした研究に至っては、近年まで行われてきてこなかったことが指摘されている (Mustanski, 2011)。年代に応じて特有の課題を抱えている可能性があるが、これまでのLGBアイデンティティ発達に関する研究は、それらを反映していない。モデルに当てはまらない当事者の事例は本邦でも、同性愛感情について、自認した当初から抵抗のなかった当事者 (眞野, 2014) や、「段階5: アイデンティティの誇り」(Cass, 1979) がなかった当事者 (横木, 2003) が、ライフストーリー、ライフヒストリー研究で取り上げられている。以上の言及から、従来のLGBアイデンティティ発達に関する研究で示されてきた線的な一モデルでの理解では、研究の発展や支援は不十分といえる。

## 2. 内在化された同性愛嫌悪に関する研究

内在化された同性愛嫌悪とは、「他の同性愛者や自らの同性愛に対してのネガティブな態度や影響 (Shidlo, 1994)」のことを指す。上述のLGBアイデンティティ発達研究 (Cass, 1979 ; Troiden, 1979) でLGB特有の自己嫌悪感が着目され、内在化された同性愛嫌悪は単体で研究が深められている。LGBの心理的健康に重要な意味を持つと想定される。

内在化された同性愛嫌悪の実態を把握するために、尺度開発を中心に研究が行われてきた。例えば Shidlo (1994) は、これまでの内在化された同性愛嫌悪に関連する研究をレビューした上で尺度作成を行い、内在化された同性愛嫌悪が当事者にとってどのような評価なのか、その実態を捉えようとした。その結果、3因子で構成された尺度が作成され、自分自身の性的指向に関する態度や感情の項目で構成された「個人内ホモネガティビティ (Personal Homonegativity)」(「ゲイであることを考える時はいつでも私は落ち込む」など15項目)、社会的に共通した同性愛者に対する態度や、他の同性愛者に対して思うことに関する項目によって構成された「全体的ホモネガティビティ (Global Homonegativity)」(「同性愛者は異性愛者と同じような満足を得られない」など10項目)、他の人にセクシュ

アリティの開示を行えないといった内容の「開示 (Disclosure)」(「自分がゲイであることを人に隠しておくことは私にとって重要なことである」など10項目)と命名した。Ross & Roser (1996)も同様に内在化された同性愛嫌悪の測定を試みて、別の尺度を開発した。「同性愛者であることの公表 (Public Identification as Gay)」(「私の同性愛を誰が知っているかをコントロールしておくことは重要なことである」など10項目)、「同性愛者へのステイグマの知覚 (「社会はまだゲイであるために人々を罰する」など6項目)、「同性愛者といることの居心地」(「同じ同性愛者といることの社会的状況は私を不快にさせる」など6項目)、「道徳的・宗教的な受容」(「同性愛は神の意志に反する」など4項目)の4因子で構成された (Ross & Roser, 1996)。異なる観点から内在化された同性愛嫌悪について測定ができるようになっている。

上記の尺度をもとに、内在化された同性愛嫌悪がLGBにもたらす影響について、実際に示されてきた。Amola & Grimmert (2015)は、黒人のMSM (男性との性交渉の経験を持つ男性)にインターネット調査をとり、内在化された同性愛嫌悪の高さが、抑うつ傾向と正の関連、自己肯定感と負の関連を持つことを示した。また、Meyer (1995)は、質問紙調査から、ゲイ男性間の内在化された同性愛嫌悪のレベルを比較し、内在化された同性愛嫌悪の得点が高い者ほど、不安や悲哀、無力感、罪悪感などの心理的課題や、自死念慮、性交渉と性交渉による性感染への不安が高いことを示している。Szymanski & Chung (2001)はレズビアンを対象に質問紙調査を行い、内在化された同性愛嫌悪が自己肯定感と負の相関、孤独感と正の相関があることを示し、Herek, Cogan, Gills, & Glunt (1995)の場合は、レズビアンとゲイの両方に質問紙調査を行い、Amola & Grimmert (2015)と同様、抑うつ傾向や自己肯定感との関連を示しただけでなく、レズビアンの方がゲイより内在化された同性愛嫌悪の得点が有意に低いことを明らかにしている。Frost & Meyer (2009)は、分析に構造方程式モデリングを採用し、内在化された同性愛嫌悪によって抑うつ傾向を呈した結果、パートナーなどとの関係性の悪化にもつながることを示した。本邦では、高藤・岡本(2019)が内在化された同性愛嫌悪の内在化や変容のプロセスについて質的に検討した。異性愛中心の周囲、社会の態度によって内在化された同性愛嫌悪を持つようになるが、同性愛者であると開示している快適な居場所や、性的な関係のみでない同性愛者との関係づくりなどが内在化された同性愛嫌悪の低減に重要な役割を持つことが示された。内在化された同性愛嫌悪も現在まで多角的な検討が行われ、実際に精神的健康や対人関係にネガティブな影響を与えていることまで明らかになっている状況である。

しかし、LGBアイデンティティ発達に関する研究と同様に、内在化された同性愛嫌悪に関する研究も一要因で当事者の経験を理解する難しさから課題が指摘されている。同性愛嫌悪がない社会で過ごす場合には、そもそも当事者がネガティブに内在化する機会を持たないことや、「開示」(Shidlo, 1994)や「同性愛者であることの公表」(Ross & Roser, 1996)で示されたカミングアウトに関する経験は、単に開示しない方が現実的な利益が多いためなどの嫌悪感以外の評価も関与しているという指摘がある (石丸, 2007b; Mohr & Fassinger,

2000)。ネガティブな経験ばかりが取り上げられ、ポジティブな経験、強みに関する言及がないこともいわれるようになった (Vaughan & Rodriguez, 2014)。要因を限定せず、LGB の経験をより幅広く捉えた研究が必要になっている。

### 3. LGB Identity Scale の開発に至る研究

LGB アイデンティティ発達や内在化された同性愛嫌悪に関するそれぞれの研究は、当事者理解、心理的支援に有益な知見をもたらしてきたが、いくつかの課題もあった。一モデル、一要因で当事者を理解することは難しいと考えられる。そのような研究課題に、近年は一つのアプローチとして、LGB が出会う可能性のある経験をより広く捉え、尺度化し、縦断的研究を行うための準備がされている。具体的には、Mohr & Fassinger (2000) をもとに、Mohr & Kendra (2011) が “Lesbian, Gay and Bisexual Identity Scale (以下、LGBIS と略記)” を開発した。8 因子構成で、それぞれを「隠ぺいへの動機 (Concealment Motivation)」「私の性指向はとても個人的でプライベートな問題だ」など3項目、「困難なプロセス (Difficult Process)」「LGB であることを認めるのはとても辛いプロセスだ」など3項目、「アイデンティティの不確実性 (Identity Uncertainty)」「私の性指向を理解しようと努めるとき、とても混乱する」など3項目、「内在化された同性愛嫌悪 (Internalized Homonegativity)」「もし叶うことなら、私は異性愛者であることを選ぶだろう」など3項目、「受容懸念 (Acceptance Concerns)」「自分の性指向が他人から評価されているのではないかと気になることがよくある」など3項目、「アイデンティティの優越性 (Identity Superiority)」「私は LGB の人は異性愛者より優れていると思っている」など4項目、「アイデンティティの肯定 (Identity Affirmation)」「私は LGB コミュニティの1人であることを誇りに思う」など3項目、「アイデンティティの中心性 (Identity Centrality)」「私の性指向は私のアイデンティティの中心的側面である」など4項目と命名された。この尺度は、LGB の経験が一モデル、一要因ではなく、複合要因によって捉えられることを明確にし、縦断的研究のツールとして機能する準備を整えた点で意義がある。さらには、各々の経験と精神的健康や心理的問題との関連を示すことができるようにした (Mohr & Kendra, 2011)。LGB の経験を多角的に検討することにつながっている。

以上、本節では LGB である経験に関する代表的な研究として、1) LGB アイデンティティ発達に関する研究と、2) 内在化された同性愛嫌悪に関する研究、3) Mohr & Kendra (2011) の LGBIS の開発に至る研究を概観した。それぞれが LGB の理解や支援に活用されてきたが、LGB の特徴的な経験は多様にあり、一モデル、一要因では当事者理解につながらなくなっていた。Mohr & Kendra (2011) の LGBIS 開発をはじめ、より多くの経験を捉える研究が、今は求められるようになった。

## 第3節 LGB であることの強みに関する研究と展望

### 1. 強みに関する研究

ポジティブ心理学が注目されるようになり、強みに関する研究が行われるようになった。強みとは、「人が活躍したり最善を尽くしたりすることを可能にさせる特性」(阿部・岸田・石川, 2021; Wood, Linkey, Maltby, Kashdan, & Hurling, 2011) のことを指す。Seligman & Csikszentmihalyi (2000) は、心理学分野ではネガティブな経験や精神疾患への理解に焦点があてられていたが、人生を価値あるものにするためには、ポジティブな経験や特徴に関する研究を積極的に行う必要があると指摘し、以降強みに関する研究が蓄積されている。例えば、Peterson & Seligman (2004) は、個人が保有する強みの尺度を開発し、6 領域、24 つの強みを示した。日本語版尺度 (VIA-IS) を開発した大竹・島井・池見・宇津木・ピーターソン・セリグマン (2005) も参考にし、この段落ではそれらの強みについて説明する (表 1-1)。一つ目の領域として、「知恵と知識」があげられる。「独創性」や、「好奇心・興味」、「判断」、「向学心」、「見通し」がこの領域に含む強みである。二つ目に、「勇気」である。「勇敢」や、「勤勉」、「誠実性」、「熱意」がこの領域に含む強みである。三つ目は、「人間性」である。「愛する力・愛される力」、「親切」、「社会的知能」が含まれる。四つ目は、「正義」である。「チームワーク」や、「平等・公平」、「リーダーシップ」が含まれる。五つ目は、「節度」である。「寛大」、「謙虚」、「思慮深さ・慎重」、「自己コントロール」が含まれる。最後に、「超越性」である。「審美心」、「感謝」、「希望・楽観性」、「ユーモア・遊戯心」、「精神性」が含まれる。主観的幸福感や、精神的健康との関連が示されており (大竹ら, 2005; Peterson & Seligman, 2004), 強みを持つことの心理的意義が明らかになった。

強みは、単一的な機能だけではなく、強みを活用するその者の関心や考えを広め、ネガティブな感情の喚起を元に戻すなど、ポジティブな経験を展開、広める機能があることも述べられてきた (Fredrickson, 1998; Fredrickson, 2004; Fredrickson, Mancuso, Branigan, & Tugade, 2000; Fredrickson & Levenson, 1998)。Fredrickson (1998) がこれまでのポジティブ感情に基づく研究レビューから提唱した“Broaden-and-Build Model”である。実際に、ネガティブな感情に陥った者は、ネガティブ感情を誘発する映画を見るよりも、満足感を与えるか、楽しいと思える映画を見ることの方が、ネガティブな感情の回復を早めることが、質問紙調査によって実験的に明らかにされている (Fredrickson et al., 2000)。同じ実験は、心拍数や身体動作の測定などからも検証され、やはり回復を早めるという結果を得ている (Fredrickson & Levenson, 1998)。その他にもこれまでに複数の研究が行われ、その研究結果をまとめた Fredrickson (2004) は、ポジティブな経験には、注意と思考を広げる、ネガティブな感情の喚起を元に戻す、レジリエンスを高める、などの機能があ

表1-1 VIA-ISの構成と各強みの項目例（大竹ら，2005より一部抜粋）

| 領域    | VIA-ISの各強み     | 項目例                                      |
|-------|----------------|--|
| 知恵と知識 | 独創性            | 私は、何かをする時に、ほかの方法がないかと考えるのが好きだ            |
|       | 好奇心・興味         | 私は、いつも、世の中に好奇心をもっている                     |
|       | 判断             | 必要に応じて、私は非常に合理的に考えることができる                |
|       | 向学心            | 私は、何か新しいことを学ぶ時にわくわくする                    |
|       | 見通し            | 私は、いつも物事をよく見て、幅広く情勢について理解している            |
| 勇気    | 勇敢             | 私は、強い抵抗にあう立場をとることができる                    |
|       | 勤勉             | 私は、いつも自分が始めたことはきちんと終わらせる                 |
|       | 誠実性            | 私は、いつも約束を守る                              |
|       | 熱意             | 私は、人生を横から傍観者としてみているのではなく、それに全身で参加している    |
| 人間性   | 愛する力・<br>愛される力 | 私は、ほかの人からの愛を受け入れることができる                  |
|       | 親切             | 私は、この1ヶ月以内に、隣人を自発的に助けたことがある              |
|       | 社会的知能          | 私は、どのような状況であっても、それに合わせていくことができる          |
| 正義    | チームワーク         | 私は、グループの一員として、全力を出して働く                   |
|       | 平等・公平          | 私は、その人がどうであったかに関係なく、だれにでも平等に対応する         |
|       | リーダーシップ        | グループ内では、私は、だれもが仲間であると感じることができるように気を配っている |
| 節度    | 寛大             | 私は、いつも過去のことは過去のことで考えている                  |
|       | 謙虚             | 私は、自分の実績を自慢したことはない                       |
|       | 思慮深さ・<br>慎重    | 私は、いつも身体的に危険な行動は避けるようにしている               |
|       | 自己コントロール       | 私は、自分の感情をコントロールできる                       |
| 超越性   | 審美心            | 私は、誰かの素晴らしさに触れると涙が出そうになることがある            |
|       | 感謝             | 私は、いつも私の世話をしてくれる人たちにお礼を言っている             |
|       | 希望・楽観性         | 私は、いつもものごとの良い面を見ている                      |
|       | ユーモア・<br>遊戯心   | 私は、笑わせることでだれかを明るくする機会があるとうれしい            |
|       | 精神性            | 私の人生には、はっきりした目的がある                       |

ると述べた。強みに関する研究は、その特性だけでなく、どのような経験をもたらずかま  
で、研究が重ねられている。

強みを活かした介入研究も行われている。Seligman et al. (2005)は、強みを活かした  
介入の発端となった研究とされ、感謝の気持ちを高めるエクササイズや、自分自身の最も  
ポジティブな点の認識を高めるエクササイズなどを行い、抑うつ感、幸福感の測定などか  
らその効果を調査した結果、それらのエクササイズが有益であったことを示した。その後  
の介入研究は蓄積され、レビュー研究としてまとめられている (Ghielen, Woerkmom, &  
Meyers, 2017 ; Schutte & Malouff, 2019)。それらのレビュー研究で、あらゆる強み介入  
が、幸福感や、仕事やグループ活動への成果 (Ghielen et al., 2017)、抑うつ感の低下、  
生活満足度 (Schutte & Malouff, 2019) に有意な影響を及ぼすとまとめられた。以上よ  
り、強みに関する研究は、蓄積が重ねられるべき分野であり、心理的支援に活用できる可  
能性も大いに持っていると言える。

## 2. 「LGBであることの強み」に関する研究

ポジティブ心理学の見地に立ってLGB の理解を深めようとする動きが見られるようになったのは、近年のことである。Vaughan & Rodriguez (2014) は、これまで異性愛者や性別に違和を持たない者を健康の標準であるという偏った理解があったため、LGB 研究では近年までポジティブ心理学の枠組みに基づく言及がほとんどないことを指摘し、研究の進展を訴えた。実際にMohr & Kendra (2011) でも、Mohr & Fassinger (2000) の尺度を改訂するとき、「アイデンティティの肯定」因子にあげられる肯定的な経験に関する質問紙を加えた。徐々にLGB を対象にした研究で「LGB であることの強み」が扱われ始めている。

そのため、現在までに「LGB であることの強み」に関する研究はまだ少ない。しかし、1) 強みに着目してはいなかった研究の中で、既に示されてはきたLGB であることの強みを整理した研究や、2) 尺度開発のために、実際に当事者の声を聞きLGB であることの強みを整理した研究がある。これらはLGB であることの強みが注目されるようになった代表的な研究といえる。以下、それぞれの研究の概略を示す。

### **(1) 研究レビューから見出されたLGB であることの強み**

まず、Vaughan et al. (2014) のシステムチックレビュー研究がある。対象は、LGB とトランスジェンダーとし、強みとして着目されてはいなかったが、先行研究で既に示されてはいたLGB であることの強みを整理した。当事者は、1) 独創性、2) 誠実性、3) 熱意、4) 愛する力・愛される力、5) 平等・公平、6) チームワーク、7) 自己コントロール、8) 精神性を、LGB であることの文脈の中で持ちうることを示された。以下、Vaughan et al. (2014) の言及の要点を、8つの強みに基づいてまとめる。

#### **1) 独創性**

例えば、LGB であることのカミングアウトや、同性婚などの家族観の再定義など、従来の男女二元論社会の一般的なプロセス、価値観ではない生き方を考え、採用することは、LGB であったからこそ得られた特性であると言及していた。多様なLGBTQ+当事者を対象にした研究で独創性と捉えられる言及が見られたが、これらのLGB の言動を独創性という強み、ポジティブな側面であるということを明確に主張している文献は少なかった。

#### **2) 誠実性**

分析全体の中で、2番目に多く見られた特徴であり、LGB アイデンティティ発達の中で、他者にカミングアウトをすることや、LGB であることを受け入れること、LGB であることを表現するための方法を模索することなどを、誠実性の例としてあげた。レズビアン、ゲイを対象にした研究の方が、バイセクシュアルやトランスジェンダー、有色人種のアイデンティティを持っているLGBTQ+当事者の研究と比べ、この誠実性に関連する経験をよく取り上げていた。

#### **3) 熱意**

自身の人生全体への喜びや充足感などを、LGB は質的研究の中で豊富に語っていた。ただし、バイセクシュアルやトランスジェンダー、有色人種のLGBTQ+の研究では熱意に関する



る記述はみられなかった。さらには、この熱意については、多くの研究が注意を払っていなかったため、LGB であることとの明確な関連性は示されていなかった。

#### 4) 愛する力・愛される力

分析全体の中で、最も多く見られた強みであった。マイノリティである故に、親密性を重視し、関係を大切に、構築し、維持することを行っていた。この愛する力・愛される力をテーマにした当事者の語りや言及などは、あらゆるLGBTQ+の研究で言及されていたが、比較的レズビアン、ゲイが多かった。また、恋愛感情は数多く取り上げられてきたにも関わらず、強みとして表現した研究はほとんどなかった。

#### 5) 平等・公平

個人的な平等へのコミットメントだけでなく、平等を支援するために、社会的な運動や特定の組織に関与し、当事者支援活動を行う場合もあった。平等・公平は、あらゆるLGBTQ+を対象にした研究で見られた。

#### 6) チームワーク

他のLGBTQ+との社会的な繋がりを経験し、健全な関係を結ぼうとすることが、これもあらゆるLGBTQ+を対象にした研究で見られた。

5) 平等・公平と、6) チームワークは、共に正義の領域の強みに位置づけられる。多くの先行研究は、LGBTQ+であるゆえの特徴であることを明確に示しているが、正義を研究全体の全面的なテーマとして取り扱っていた例は、ほとんどなかった。Vaughan et al. (2014) は、この点のみ推察を述べており、そういった平等・公平やチームワークを重視するような支援者などの声を扱うことで、その支援者の、差別偏見の認識やLGBTQ+を擁護したいという願望の方が反映され、ネガティブな側面ばかりが扱われ、結局その者自身の持っていた正義の領域の強みを取り扱う機会にはなり得なかったのではないかと、言及している。

#### 7) 自己コントロール

性感染症とLGBTQ+が結びつかないようにより安全なセックスの実践をすることや、より心理的に安全な状況をつくるために、カミングアウトをするか、しないかを考えることなど、心身の幸福だけでなく、現実的なリスクとのバランスをとって行動することが捉えられていた。自己コントロールについても、当事者の言動が取り上げられてはいるが、あまり認識されてこなかった。

#### 8) 精神性

LGBTQ+として、どのように信仰を育み、祝福することができるのかを探り、目的を定める当事者の姿が示された。特に、スピリチュアリティ、宗教との関連について調査した研究で、精神性については取り上げられている。しかし、バイセクシュアル、トランスジェンダーの経験を扱った研究はほとんど見られなかった。

以上より、LGBの強みはこれまでも示されてはきたと言える。ただし、強みをテーマとして扱ってきたことはほとんどなく、また、LGBの中でも特に、バイセクシュアル当事

者の強みは、あまり言及されてこなかったことも示された。

## (2) 当事者の声から見出されたLGBであることの強み

次に、Riggle et al. (2014)の尺度開発に関する研究である。Riggle et al. (2012)の場合、後述するLGBの直接の声(Riggle & Rostosky, 2012)から、本来当事者は強みを持っているにも関わらず、どういった強みを持っているかは研究されず、ネガティブな経験や感情ばかりが尺度化されていることを批判的に言及し、新たに“Lesbian, Gay, and Bisexual Positive Identity Measure (LGB-PIM)”を開発した。LGB-PIMは、5因子25項目で構成され、それぞれの因子を、「自己への気づき(Self-Awareness)」(「LGBTであることは、自分自身についての重要な洞察につながる」など5項目)、「確実性(Authenticity)」(「LGBTアイデンティティは自分自身に正直なことを意味する」など5項目)、「コミュニティ(Community)」(「私はLGBTコミュニティに支えられていると感じる」など5項目)、「親交(Intimacy)」(LGBTであることで、よりパートナーと親密であることができる)など5項目)、「社会正義(Social Justice)」(「LGBT当事者として、LGBTの権利擁護者として行動することは重要である」など5項目)と命名した。LGB-PIMは、妥当性の検討のために、抑うつ傾向や、生活満足度との関連が検討され、「自己への気づき」因子以外は、抑うつ傾向と負の相関があることを示し、全ての因子が生活満足度と正の相関があることを示した。LGBであることの強みが実際に精神的健康を高めることに寄与している。

## 3. 研究の展望-文化・歴史的背景と社会構成主義に基づく研究-

ここまで、LGBであることの経験について、特にLGBであることの強みに着目し、先行研究を概観した。上述の通り、この領域の研究はまだ発展途上にあるが、特に本論では、(1)文化・歴史的背景への着目と、(2)社会構成主義の研究の実施の観点から、研究の展望を整理する。

### (1) 文化・歴史的背景への着目

近年はインターセクショナリティ(交差性)という言葉が注目され、LGBアイデンティティとその他のアイデンティティの相互作用によって、当事者の経験の様相は異なることが主張されるようになった。インターセクショナリティとは、人が同時に多くのアイデンティティを有しており、それらの相互作用で主観的経験が異なることを表す用語である(Crenshaw, 1989)。元々は法学で用いられていた用語で、Crenshaw(1989)が黒人差別の中でも女性はより被害が大きい可能性を指摘したことからインターセクショナリティへの注目が始まった。LGBを対象にした研究でも、大抵の性指向に関する経験は、人種や文化・歴史的背景、ジェンダー、階級、年齢の発達と交差するため、個別的事となることが指摘されている(Johnson, 2000)。

特にLGBを対象にした研究では、文化・歴史的背景の影響を考慮に入れた研究が重ねら

れている。Galliher, McLean, & Syed (2017) は、文化・歴史的背景こそ、あらゆるアイデンティティに最も影響を与えると述べている。実際にLGBを対象にした研究で、文化・歴史的背景を理由にした先行研究への批判的言及がいくつか見られる。まず、Fukuyama & Ferguson (2000) は、アメリカでのLGBを対象にした研究に対し、アメリカは多くの文化や民族性で構成されている国であるにも関わらず、ヨーロッパ中心の文化を有する当事者や、白人で、男性で、クリスチャンを対象にした研究が多い故に、実態を捉えられていないことを主張した。実際に、有色人種でLGBである当事者に関しては独自に研究が発展し、二つのアイデンティティを持つことで得られる強みの尺度が既に開発されている (Ghabrial, 2017 ; Ghabrial & Andersen, 2021)。

本邦のLGBが欧米で中心的に研究されてきた当事者と異なる経験をしている可能性を示唆する言及もいくつかある。Fukuyama & Ferguson (2000) は、文化的アイデンティティに着目しながら研究を行う際に注目すべき各文化のこれまでの言及をまとめ、例えばアジア系アメリカ人は、他の文化と比較して、家族への孝行が行動を規定することや、家族内で第一子の男子を優遇する傾向を持ち、その影響を受けて性指向も経験している可能性などを述べた。中国では、欧米のLGBを対象にした心理的支援、心理教育などで採用される、支援者側の性の多様性を強く肯定する姿勢は、集団主義文化を理由に向いていない可能性があり、肯定しながらも冷静に説明する「弱い」肯定的態度や教育のあり方が向いている可能性が性教育の絵本の分析 (Liang, Tan, & O' Halloran, 2017) やLGBへのインタビュー研究 (Liu, Chui, & Chund, 2022) から示されるようになった。本邦の当事者ではないが、近い文化圏のLGBの経験が、欧米の研究と比較し、家族観や集団主義傾向を理由に異なることが明らかになりつつある。以上のような各国や民族性などの文化・歴史的背景を考慮に入れ、独自の経験の可能性と、その経験に何が影響を与えているか、探索する必要がある。

心理学分野以外の研究も概観すると、日本でのLGBの経験の独自性についてはさらに推察が可能となる。例えば、日本人の代表的な特徴として、確固たる自己がなく、直接的な他者とのつながりや評価があった上で、初めて自己を認識できることは、文化人類学を中心に時代を超えて述べられている (Hamaguchi, 1985 ; 梅棹, 1991 ; 内田, 2009)。Benedict (1946/2008) は、社会的要請を受け、さまざまな日本人の生活に関わる記録を元に、価値観や行動の基準が自己にはなく外部にあるという特徴を示した。土居 (2007) も自らの経験から、「甘え」という言葉で、集団や他者の好意などに依存する傾向を述べ、集団主義的な発想が本邦の文化的特徴の一つとして語られている。Hamaguchi (1985) からは、Benedict (1946/2008) や土居 (2007) を批判的に検討し、単に日本人が所属する集団の価値観を重んじているというよりは、文脈依存の立場に立っていること、すなわち、「対人関係における、関係そのものを自己とみなす」ことが主張されるようになった。例えば、大陸と繋がらない辺境の地にある日本に住む者は、地理的な影響を受け、国外や他者を上位と捉えがちであり、他国との関係性から、「自分は他者より劣っている」と捉える傾向があることが、自らの経験を参考に論じた梅棹 (1991) や、

日本人の行動のメディアの記録や研究など、さまざまな情報から論じた内田 (2009) が述べている。心理学からは、日本人が集団主義であるという認識について意義を唱える研究もあるが (高野・櫻坂, 2010), 集団主義, 文脈依存的自己については、様々な立場から議論されている時点で、日本人を語るときに重要なコンテンツであることは違いない。LGB の性指向に基づく経験にも影響を与えている可能性がある。

しかしながら、本邦の心理学・臨床心理学分野における LGB に与える文化・歴史的背景の影響に関する言及は少ない。強みに焦点を当てた研究のみならず、ネガティブな側面も含めたさまざまな経験でほとんど見られないことが現状である。欧米の研究をそのまま採用することには、そのような文化・歴史的背景を考慮に入れていない点で、注意が必要である。本邦の LGB が国外の先行研究にない独自の経験をしていることを前提に、あらゆる経験が探索され、その経験に影響を与える要因が示されることが、今後の研究として求められる。

## (2) 社会構成主義の研究の実施

先行研究のような実証主義 (Mohr & Kendra, 2011 ; Riggle et al., 2014 ; Vaughan et al., 2014), 後述する第 2 章のポスト実証主義の立場での研究は、その対象者の多くに当てはまりやすく、共有のしやすい、客観性を追求した経験や事実を捉えることを試みている。支援などへの援用につながるなど、それらの研究の有益性は上述の通りであるが、一方で、研究結果が、LGB のイメージを規定している可能性にも目を向けなければならない (Gargen, 1999/2004 ; Said, 1979/1993)。我々は、このような知識が、「客観的」、「一般的」であることを掲げている故に、メディアなどで取り上げられたときに、それを支持し、「当たり前の現実」として捉えられている可能性に留意しなければならないことを、Gargen (1999/2004) は指摘している。例えば、社会学者の Said (1979/1993) は、東洋のイメージに関する研究の歴史について言及し、東洋学がヨーロッパ人の研究者の立場から調べられたことで、「ヨーロッパスタイルの東洋学」を構築し、多くの人に共有されることによって、東洋人の特徴として東洋人自身も捉え、そのような傾向を作った可能性を指摘した。心理学分野で実証主義中心の LGB を対象にした先行研究が多いことも、確かにそれらの研究は、大多数の LGB の経験をとらえていたのかもしれないが、その研究結果自体が影響を与え、LGB の行動を形成、規定する可能性もあったかもしれない。

このような、研究やメディア、政治などのさまざまな社会、文化の影響が、個人の経験を構成するという立場に立った理論が、社会構成主義である。当事者の心的現実とは、客観的に観察が可能な行動や指標によって明らかになるものではなく、出来事と出来事の間を筋立て、意味づけることによって構成されるという考え方である (Bruner, 1990/2016 ; 森岡, 2015)。実証主義やポスト実証主義と、社会構成主義の違いは、岩壁 (2010) や Ponterotto (2005) で説明されている (表 1-2)。実証主義、ポスト実証主義が、客観的事実の存在を認め、研究者の主観を統制することでその事実を明らかにするパラダイムに立つ一方、社会構成主義では、現実社会的に構成されるため、一通りではなく、研究を行う場合も、そ

表1-2 研究パラダイムの特徴（岩壁，2010より一部抜粋）

|                                       | 存在論<br>(人間観・世界観・<br>現実観の性質)  | 認識論<br>(何を知ることがで<br>きるか・知の主体と<br>対象の関係)   | 価値論<br>(どのような価値・<br>美德・道徳・倫理を<br>表し、目指すか)                              | 方法論<br>(どうやって知を獲<br>得できるのか、どの<br>ように認識論を実行<br>するのか)                    |
|---------------------------------------|--|---|--|--|
| 実証主義<br>(postivism)                   | 1つの客観的現実が<br>存在し、それを正確<br>に捉え、研究し、理<br>解できる。   | 知の主体は、対象か<br>ら完全に切り離され<br>客観性が達成でき<br>る。客観的な条件の<br>もとに一般的な法則<br>を確立することが重<br>要。                                   | 研究は統制された条<br>件の下に行われ、研<br>究者の価値観による<br>影響は受けにくい中<br>立的な営みである。          | 実験、準実験、サー<br>ベイ、相関研究から<br>事実、法則を引き出<br>し、予測を目指す。<br>無作為化、厳密な測<br>定が重要。 |
| ポスト実証主義<br>(post-postivism)           | 客観的現実が存在す<br>る。それを完全に理<br>解することはできな<br>いが、それに漸次的<br>に接近していくこと<br>は可能である。   | 知の主体は、対象か<br>ら完全に切り離され<br>ないが、研究者の主<br>観はある程度統制で<br>きる。記述・探索的<br>研究の価値を認め<br>る。                                   | 研究者の価値観が研<br>究の結果に影響を与<br>えないように統制す<br>ることが重要であ<br>る。                  | 厳密な方法手続きに<br>基づいた質的研究、<br>頻度の分析、記述統<br>計、相関研究。                         |
| 社会構成主義<br>(social<br>constructionism) | 何が事実かというこ<br>とは、社会的に構成<br>され、政治的な力に<br>影響を受ける。事実<br>が伝えられるのは言<br>葉である以上、表現<br>されることがどのよ<br>うに社会的権力の影<br>響を受けるかが重<br>要。 | 知は言語によって制<br>限されている。言葉<br>で表現できるものし<br>か知ることができな<br>い。また、表現は社<br>会政治的権力によっ<br>て制限されるため、<br>知を制限する社会的<br>要因の分析が重要。 | より自由であり、<br>オープンな理解を可<br>能とする社会文化的<br>な抑圧を指摘し、改<br>革することが研究の<br>役割である。 | 折衷的。社会的言語<br>の分析。個人のイン<br>タビューから社会的<br>影響について明らか<br>にする。               |

の現実には研究者の主観や語られた言語などによる統制を避けられないため、統制要因の分析が必要であるというパラダイムに立つ (Ponterotto, 2010)。実証主義、ポスト実証主義は、この社会、文化の影響を論じることを避けてきているが、実際には影響を受けているため、個人の人生はより個別的で主観的なものであると考えられ、社会構成主義はその影響について扱う、ということになる (Bruner, 1990/2016)。Gargen (1999/2004)は、社会構成主義の立場を4つの文にまとめ、さらに詳述している。以下、本論の問題意識に則って、その内容を具体的に説明する。

- 1) 「私たちが世界や自己を理解するために用いる言葉は、「事実」によって規定されない」「言語は、世界をありのままに写しとるものではない」ことを Gargen (1999/2004)は主

張する。LGB の困難や心理的課題も、そもそも男女二元論社会であり、男か女しかいない前提の言語世界であったからこそ、可視化されてこなかったという背景がある。社会構成主義に基づく研究は、そのような現在のカテゴリーや理解から解放されるために使用されるものである。

## 2) 「記述や説明, そしてあらゆる表現の形式は, 人々の関係から意味を与えられる」

LGB が影響を受けるものは、自身の性指向と日本の文化・歴史的背景だけではない。上述の Johnson (2000) の指摘で示したように、その他の LGB の側面の影響はいくつも考えられる。それらが複雑に絡んだ日常の「関係」の中で、主観的事実が形成されていくことを Gargen (1999/2004) は主張した。「関係」を全て読み解くことはできないが、できるかぎり理解し、解釈をすることが、社会構成主義の立場で行われることである。

## 3) 「私たちは, 何かを記述したり説明したり, あるいは別の方法で表現したりする時, 同時に, 自分たちの未来をも創造している」

現在のカテゴリーや、理解からの解放は同時に、自分たちの未来を生成する。Gargen (1999/2004) は、「生成的言説-現存の理解の伝統に立ち向かうと同時に、行動の新たな可能性を切り開くような言説や表現」と呼んでいる。LGB を一モデル、一要因で理解する難しさについて言及した研究のうち、眞野 (2014) もこの社会構成主義に基づく研究であり、「本邦の地方都市における同性愛者」という、LGB の中の特定のカテゴリーを新たに創出し、根強く残る同性愛嫌悪や、それに基づく生きづらさ、一方で、アイデンティティの受容は比較的難しくないことなどを示していった。LGB 間での個別性が明らかになり、理解や支援をすべき対象と方針を細やかに見出したように考えられる。

## 4) 「自分たちの理解のあり方について反省することが, 明るい未来にとって不可欠である」

社会構成主義では「自省 (reflexivity) -自分がもっている前提を疑問視し, “明らかだ” とされているものを疑い, 現実を見る別の枠組みを受け入れ, さまざまな立場を考慮してものごとに取り組む姿勢」が重要とされ, それが異なる文化や伝統を理解し認めていくことにつながると述べられている (Gargen, 1999/2004)。LGB を対象とし, 性の多様性を一つのテーマとする本論において, このような考え方は欠かせないのではないか。

社会構成主義は, 実証主義, ポスト実証主義を完全に批判する立場ではない。トライアンギュレーションという考え方から, 様々なパラダイムから同じテーマを検討する重要性が述べられるようになった (Denzin, 1970; Flick, 1995/2002)。例えば, Flick (1995/2002) の言及を参照して社会構成主義の立場の研究の利点を説明すると, 1) 実証主義, ポスト実証主義の立場から「客観性」を目指して捉えられてきた現象や, 「一般的」と捉えられている現象を, 主観的, 具体的に理解できる点, 2) なぜ, そのような現象が当事者に経験されるようになったのか, インタビューの対話などのディスコースから解釈できる点, 3) 「客観性」, 「一般的」と捉えられてきた現象の裏に潜む, 潜在的, 無意識的な規則や現象を明らかにできる点, があると考えられる。3) のように実証主義, ポスト実証主義の結果にな

い成果を得るための批判的検討だけでなく、1)、2)のように、具体的事例を示すことや、既に実証主義などの研究で捉えられてきた事象の前後のプロセスについて言及できるという、相補的役割も果たすといえる。社会構成主義の研究者からも、実際に実証主義、ポスト実証主義とは相補的な立場にあることが述べられている。例えばBruner (1990/2016)は、実証主義、ポスト実証主義で「客観性」、「一般性」をもった知見が得られるからこそ、疑問が生まれ、より良く、より深く探求されることを述べている。Gargen (1994/2004)も、実証主義、ポスト実証主義で得られた成果自体は人々に有益となり得るため、批判をしているわけではないこと、ただし、社会構成主義の関心は、それらの研究が明らかにした経験の特徴ではなく、どのような関係性がその人の経験を構成しているか、であり、同じ現象を捉える場合でも視点が異なること、を述べている。実証主義、ポスト実証主義の研究は、大多数が共有している、もしくは共有できる現象であるため、それ自体は有益であり、一方で、具体性、主観性、その経験の特徴に至るプロセスを追求し、さらには、まだ言語になっていないマイノリティの現象とその背景を捉える必要があり、そのためにも、社会構成主義の研究は求められる。対立的関係ではなく、相補的関係になり得ると考えられる。

ちなみに、個別性を尊重した研究の意義についてもここで言及しておく。社会構成主義の研究や事例研究など、個別性を尊重した研究は、かつて一般的理解を深める実証主義などの研究に比較して価値は劣り、論文として認めることは難しいといわれてきたが (Dogan & Pelassy, 1990)、それは誤解であると Flyvbjerg (2006)は述べている。具体的な誤解と説明はいくつかあげられ、例えば、1) 個別性を重視した研究は一人の人間の理解のみしか行えないという誤解には、基礎知識を現実のニュアンスのある見方に発展させるためには事例の存在が不可欠であり、専門職大学院の教育や研究の中心が事例にあるため (Barnes, Christensen, & Hansen, 1994)、事例理解と研究を数多く行うことが専門性の向上に有益になっていると述べ、2) 研究者の先入観や恣意性を排除できないという誤解には、事例を詳述することで他の研究者に様々な先入観や仮説の誤りを指摘、修正されることも多くなるため (Campbell, 1975 ; Flyvbjerg, 2001)、構造度の高い手法を用いた研究と同等か、それ以上に、先入観や恣意性が検討されていると述べた。

個別性を尊重した研究への言及は、岩壁 (2010) の他にも、本邦の臨床心理学分野 (枝川・辻河, 2011 ; 遠藤, 2002 ; 岩壁, 2010 ; 河合, 2001 ; 竹家, 2008) でも複数みられる。遠藤 (2002) は、実証主義、ポスト実証主義の研究が多様性を孕んだ結果を示すことができないことを指摘し、「個の完全性 (個別性を忠実に掬い上げること)」を厳密に保つことこそ、質的研究が行うべき役割ではないか、と指摘している。質的研究を行ったにも関わらず、本来示すべき個別的、独自の経験を示すことができなかつたことへの疑念や不満は、実際にポスト実証主義の立場で質的研究を行い、不妊を対象にした竹家 (2008) や、LGBTQ+を対象にした枝川・辻河 (2011) によっても述べられている。河合 (2001) は、心理臨床に向き合う立場から、支援者は普遍性と向き合っているのではなく、目の前の個人と向き合っており、「関係の在り方」を考えることが重要であること、それをやるのは事

例研究などの個別性を尊重した研究であることを述べた。個別性を重視した研究の必要性は、国外に限った課題ではないと言える。

ナラティブ研究は、社会構成主義に基づいた研究手法の代表といえる。当事者の日常の文脈を重視しながら、その複雑な有り様を示すナラティブ研究は、国内外で展開している。(Galiher et al., 2017 ; 桜井, 2006 ; やまだ, 2000)。ナラティブとは「広義の言語によって語る行為と語られたもの」(やまだ, 2000) の両方を指す。経験を詳細に言語で示しながら、「一般化」された理論の具体性、もしくは当てはまらない新規性の現象を示すと同時に、その背景に潜む、社会的な文脈、関係を明らかにする研究である (Galiher et al., 2017 ; 桜井, 2006)。

ナラティブ研究が「語られたもの」(やまだ, 2000) に限らず、「語る行為」(やまだ, 2000) や「共時的側面」(木場, 2019) にも着目している点について、ここでさらに言及しておく。ナラティブ研究では、研究者と研究対象者の相互性に着目し、語られ方も考察する必要がある。なぜなら、ナラティブは、研究協力者の記憶の再現ではなく、研究者との相互行為によって組織化されるため (Holstein & Gublium, 1995/2004 ; 野村, 2005 ; やまだ, 2006)、研究者と研究対象者の相互性自体が一つの経験として価値を持っているためである。また、研究の系統性を示すという意味でも、一般的な量的研究で信頼度の係数を示すことと同様に、研究の手続きや実際の語りを細かく報告し、研究者と研究対象者の相互性を考察することが求められてきた (Holstein & Gublium, 1995/2004 ; 野村, 2014)。Flyvbjerg (2006) の述べるように、研究者の先入観や恣意性が指摘、修正される機会を提供する必要がある。そのため近年のナラティブ研究は、後述の木場 (2019) や枝川・辻河 (2011) のように、方法の詳述や逐語の一部を示し、インタビュアーとインタビュイーの相互性への着目と省察を行っている。すなわち、研究者と研究対象者の相互性への考察は、1) 一つのLGBの経験であり、2) 研究の限界を考察するためにも、必須である。

LGBを対象にしたナラティブ研究は、心理学、社会学分野に散見する (Hammack, Mayers, & Windell, 2013 ; 木場, 2019 ; 眞野, 2014 ; Shapiro, Rios, & Stewart, 2010)。Shapiro et al. (2013) は、4人のレズビアン当事者のインタビューの逐語を対象ナラティブとし、キリスト教の教えの影響を受けレズビアンであることをカミングアウトできなかったことや、大学に所属できたからこそ、図書館を利用したり、講義で女性運動が取り上げられたりし、自分のセクシュアリティについて理解を深めることができたこと、地方は都市部と比較し理解が得られづらいことなどが示された。LGB アイデンティティ発達の特徴については、確かにCass (1979) と類似する知見と捉えられるが、宗教や学業など、その特徴に至る背景は、さまざまであるといえる。本邦では上述の眞野 (2014) の他に、木場 (2019) が、日本在住の日本人とアメリカ人の「ハーフ」のバイセクシュアル当事者と、北欧出身のバイセクシュアル (もしくはパンセクシュアル、全てのジェンダーに恋愛や性愛が向く者) へのインタビューを対象ナラティブとし、LGBである自分をどのように意味づけているか、明らかにした。自分達が女性でマイノリティのコミュニティ内で「縁 (ふち)」にい



ること、「縁」にいる者は「多く現れる」こと、日本では、「同性愛の問題について話す」、議論することが難しいことなどを話した。また、インタビュアーもバイセクシュアルであったことで、「縁」にいることが深く語られたことや、一方で、インタビュアーが日本人であったことによっても、文化的差異から議論の難しさが表出されたことなど、木場 (2019) が「共時的側面」と呼ぶ、インタビュアーとの相互性も、ナラティブに影響を与えた可能性を指摘した。木場 (2019) は、新たに国外に出生の背景をもつLGBに着目し、その経験の具体的様相を明らかにしたといえる。対象ナラティブはインタビューに限らない。Hammack et al. (2013)は、心理学研究の歴史に着目してレビューをし、心理学研究コミュニティ内にみられる同性愛の扱いに関する「マスターナラティブ」(「全体社会への同化と適応を促すストーリー (桜井, 2005a)」のこと) について調査した。1800年代から1970年代は精神疾患分類をされていたことから「病気 (sickness)」として扱われ、1970年代以降は精神疾患から外されたことにより「種類 (species)」と捉えられ、1990年代以降は同性愛者の中にもさまざまなカテゴリーがあることに研究者の関心が移ったことから、「対象 (subjects)」になったと述べている (Hammack et al., 2013)。様々なナラティブを対象とし、LGBの個別的経験や、どのように社会でみられてきたか、さらにはその背景を明らかにしてきた。

本邦の臨床心理学分野も例外ではなく、強みには着目していないが、LGBTQ+を対象にしたナラティブ研究が行われ、当事者の経験を様々に示されるようになった (枝川・辻河, 2011; 荘島, 2008; 涌井, 2006)。特に枝川・辻河 (2011) は、本論の対象ともなるバイセクシュアル当事者のインタビューを対象ナラティブとし、当事者理解と、求められる心理的支援について一考察を行った。家族の伝統的な性役割に関する価値観、親の意向が強い家族のパワーバランスによって、自身の性指向への違和感や強い苦痛を感じていたが、家族と距離を保って生活をする中で、親の考えにも理解を示せるようになり、今後も家族関係を模索しながら自己理解、他者理解を行っていくとする当事者の語りが得られた。主には、性指向に基づく経験に、家族の態度や自立した経験が強い影響を与えてきたことを示し、例えばこういった場面では家族から距離感を保って生活することを推奨するなど、具体的な心理的支援の方法を模索ができる機会になっている。

研究ではないが、LGBの語りを示した文献も複数ある。近年でいえば、同性婚人権救済弁護団 (2016) 編集の「同性婚 だれもが自由に結婚する権利」や、大塚・城戸 (2017) 編集の「LGBTのひろば」に数多くのLGBの語りが掲載されている。例えば前者 (同性婚人権救済弁護団, 2016) は、本邦で同性婚の法制度がされていないことの問題点を示すために、LGBの語りの一部を切り取って明示した。将来の家族像に希望が持てないことや、社会から受け入れられていないような気持ちにさせられること、伝統的家族観の枠組みに当てはまらないことで、孤独感を感じることで、子どもの親権を得られないこと、家族対象の社会保障、民間サービスなどが受けられないことへの困り感などが語られている (同性婚人権救済弁護団, 2016)。後者 (大塚・城戸, 2017) では、LGBTQ+が同じ当事者へのメッセ

ージを伝えている。当事者が自身のセクシュアリティに基づく心理的課題以外にも、家族や障害に基づく傷つきを抱えうること、長男として出生したことで、家を引き継ぐ背景から家族にカミングアウトをすることが難しいこと、妊娠をきっかけにこれまで「仲間」だと思っていたレズビアンコミュニティからバッシングを受けたこと、恋愛関係をうまく築けなかった経験など、様々な生きづらさを抱えていること、同じ境遇にいる者が他にもいることを伝えている。多様なテーマで生きづらさが表現されていた。

一方で、LGB であることの強みに着目したナラティブ研究となると、国内外問わず、その数は少なくなる。Riggle & Rostosky (2012) と Ghabrial (2017) のポスト実証主義的立場で行った研究が、唯一当事者の声を拾い上げている。後に、Riggle et al. (2014) の尺度作成の土台となった Riggle & Rostosky (2012) の研究は、1000 人近くのインタビューをポスト実証主義的にまとめ、元々は9つのカテゴリーを提示していた(表1-3)。それぞれの強みは相互関係にあることや、「本来性 (authenticity)」や「自覚, 洞察, 成長 (self-awareness, personal insight, and growth)」, 「他者とのより強い感情的つながり (stronger emotional connections with others)」は、LGB 独自の強みであることを指摘した。自認当初から他の当事者に囲まれていることが減多にないため、それを乗り越えていくプロセスが求められることや、カミングアウトをしてようやく理解と居場所を作ることができないことなどの、LGB アイデンティティ発達に関する研究で示した LGB の経験の独自性が関与している (Riggle & Rostosky, 2012)。さらには、「コンパッションと共感 (Compassion and empathy)」や「メンター, ロールモデル, アクティヴィスト (mentors, role models, and activists)」は、例えば同じ LGBTQ+ に共感を寄せ、他の LGBTQ+ の支援を行う者もいれば、LGBTQ+ に限らず、様々な悩みや困難を抱えた者の支援を行う者もおり、LGBTQ+ 以外のアイデンティティやコミュニティとも相互関係を持って、発揮されやすいこと、他のマイノリティ集団と共通した強みであることが言われている (Riggle & Rostosky, 2012)。「楽観的感覚 (a sense of optimism)」は、LGB アイデンティティと関連を持たず、パーソナリティである可能性も言及した (Riggle & Rostosky, 2012)。Ghabrial (2017) は、有色人種で LGBTQ+ の当事者へのインタビュー調査を行い、そのインタビューから有色人種で LGBTQ+ であることの強みに焦点を当てた尺度の開発 (Ghabrial & Anderson, 2021) に繋がった。どちらのマイノリティコミュニティでも差別や被害的経験をしうるが、一方で、どちらもマイノリティである者同士で、より結束を持って支え合えることを複数の当事者がポジティブに語った (Ghabrial, 2017)。二つの研究は、どちらも量的研究につながり、一般的な強みの傾向を捉えることに有益であったといえる。しかし、強みの特徴に関するデータを中心に切り取って提示しており、具体的に強みはどのような経験のされ方をしているのか、どのような社会的背景や関係によってその強みを獲得するようになったのか、現在「LGB であることの強み」と言及されている特徴は本当にポジティブに活用されているのか、などを十分に理解することは難しい。

表1-3 Riggle & Rostosky (2012)の示した各強みのカテゴリーとインタビューの例 (筆者訳)

| カテゴリー   | インタビューの例  |
|---|---|
| 本来性<br>(authenticity)   | 人々が私の性を推測し続けるために、私は性別が曖昧な服装をします。  |
| 自覚、洞察、成長<br>(self-awareness, personal-insight, and growth)      | 私は社会に疑問を抱き、探求し、そして私自身の現実を創造しなければならなかった。しばしば困難を伴うが、通常の規定された社会的構造を超えて私自身の意味を求めることを、ゲイであることは可能にしたと信じている。 |
| 新しいルールの創造への自由さ<br>(freedom to create new rules)                 | セクシュアリティの二項構造に挑戦する空間に根ざしていることは、人権、民族性、階級、性別などの他の二項カテゴリーを理解し、挑戦することに役立つ。                               |
| 他者とのより強い感情的つながり<br>(stronger emotional connections with others) | レズビアンであることをカミングアウトして以来、男性と親密な友情を持ち続けながら、女性とも親密な友情を育むことができた。   |
| コンパッションと共感<br>(compassion and empathy)                          | 私にとってゲイであることへの最大の肯定的経験は、白人男性の特権的アイデンティティからの旅である。ゲイであることで、抑圧されている人々と働くことに対する私の関与や情熱が、永遠のものとなった。        |
| メンター、ロールモデル、アクティヴィスト<br>(mentors, role models, and activists)   | ゲイであることの肯定的な側面は、平等のためのより大きな闘いの一役割を担っていることである。私たちはこの闘いで前進しており、この変化につながる運動の一部であることは素晴らしいことだ。            |
| LGBTQコミュニティへの所属<br>(belonging to an LGBTQ community)            | ゲイであることで、簡単に繋がりを作れる。引っ越すときは、いつもその引っ越し先にあるLGBコーラスのグループにネット上で参加して、引っ越した後すぐにグループを作っている。                  |
| ユーモア感覚<br>(a queer sense of humor)                              | ゲイであることは私の皮肉な感覚を研ぎ澄ませます。他の人が、私の人生の不条理さを見て、ただ当惑したり、無知であるような言動を取ったりしたとき、笑うことができる。                       |
| 楽観的感覚<br>(a sense of optimism)                                  | 私は人生全般についてより前向きになることをカミングアウトして以来学んだ。いつも最悪の事態を想定していたが、正直でいることで良いことが起こると信じている。                          |

以上、本節では、LGBの経験の中でも、近年注目されるようになった「LGBであることの強み」に関する研究について概観した。研究は途上の段階にあり、少ない領域ではあるが、特に今後は、文化・歴史的背景の影響を考慮し、本邦での経験について改めて探索されなければならないと考えられた。ただし、本邦での文化・歴史的背景の影響に関する言及の少なさは、強みのみならず、ネガティブな経験も同様の状況であるため、あらゆる経験とその経験に影響を与える要因が探索される必要があるだろう。また、LGBの性指向に基づく経験には、文化・歴史的背景以外も影響を与え、よりローカルな社会や関係性の影響を受け、複雑で個別的なものと考えられた。先行研究のような実証主義や、第2章のようなポスト実証主義の研究では、強みの特徴を捉え、明瞭な結果を示す点で有益となる一方、具体的な理解、様々な社会や関係性に着目した理解は難しい。これまでの「LGBであることの強み」に関する研究を参照しながらも、当事者の日常の文脈に基づいた理解が行える社会構成主義の研究も必要であると考えられた。

## 第4節 本研究における主題と構成

本章では、LGB である経験に関する研究の中で、国内外の心理学分野の研究を中心に概観し、整理することで、本邦の当事者を理解するための研究の展望を見出した。

まず、LGB である経験に関する代表的な研究として、LGB アイデンティティ発達に関する研究、内在化された同性愛嫌悪に関する研究を取り上げた。それぞれがLGBの理解や支援に有用に使われてきたが、LGBの特徴的な経験は多様にあることが研究の蓄積によって明らかとなり、一モデル、一要因では当事者理解や支援につながらなくなっていた。Mohr & Kendra (2011) のLGBIS開発をはじめ、より多くの経験を捉える研究が求められるようになった。

次に、LGBの経験に関する研究の中でも近年注目されている「LGBであることの強み」に関する研究について概観した。研究は途上の段階にあり、研究数が少ない領域ではあるが、特に今後は、文化・歴史的背景の影響を考慮し、本邦での経験については改めて探索されなければならないことが考えられた。本邦での文化・歴史的背景の影響に関する言及の少なさは、強みのみならず、ネガティブな経験も同様の状況であるため、あらゆる経験が探索され、その経験に影響を与える要因も示される必要があった。また、LGBの性指向に基づく経験は、文化・歴史的背景以外にも、よりローカルな社会や関係性などの影響を受けるため、複雑で個別的なものと考えられた。先行研究のような実証主義や、第2章のようなポスト実証主義の研究では、強みの特徴を捉え、明瞭な結果を示す点で有益となる一方、様々な社会や関係性も含んだ個別的な様相を理解することは難しい。これまでの「LGBであることの強み」に関する研究を参照しながらも、当事者の日常の文脈に基づいた理解が行える社会構成主義の研究が必要であると考えられた。

そこで本研究では、本邦のLGBが、自身の性指向にどのような経験をしているか、特に「LGBであることの強み」に着目し、個別性を尊重して明らかにすることを目的とする。図1-1は、本研究の構成である。

第2章では、本邦のLGBの性指向に基づく経験と、その経験に影響を与える要因について探索し、そのモデルを示すこととする。個別性の尊重を一つの問題意識としているが、そもそも本邦では、文化・歴史的背景を考慮に入れた上での客観的知見が得られていない。本邦のLGBのコミュニティにおける経験に関する、「客観的」、「一般的」知見、マスターナラティブが十分に理解されていない状況、と言える。第3章以降の社会構成主義の研究が、国外の実証主義における先行研究との比較によって考察されることでも、これまでの研究との相補的役割を十分に果たすと考えられるが(Bruner, 1990/2016; Gargen, 1999/2004)、第2章で、本邦のLGBを対象に、強みを含む様々な経験を総合的に捉えた「客観的」、「一般的」知見を整理した後、その知見から着目すべき経験や現象を定め、さらには着目した

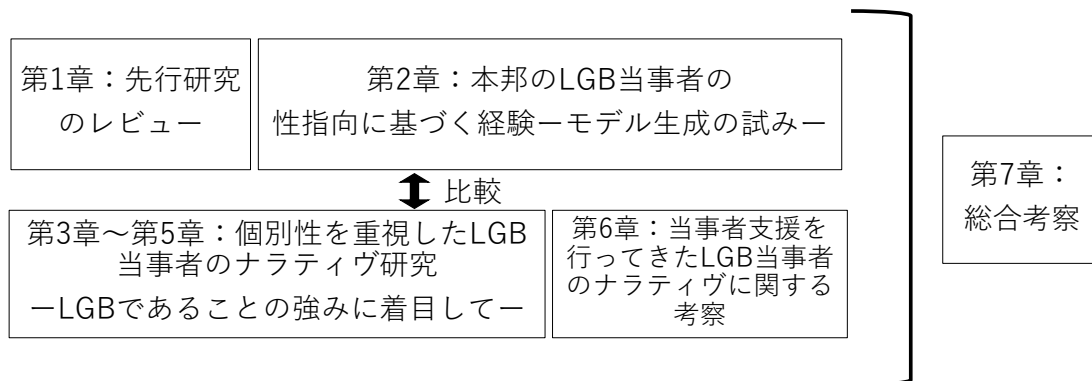


図1-1 本研究の構成

点について第2章の「客観的」、「一般的」知見と比較検証を行えば、個別的な経験をより細やかに捉えることができる。そのため、まずは客観的理解を目指そうとするポスト実証主義の立場で、LGBの性指向に基づく経験と、その経験に影響を与える要因の関係性を示すモデルを示すことを目的に研究を行う。具体的には、先行研究に捉われない発想を得るために、本邦の17名のLGBに低構造度のインタビューを実施し、その逐語を、KJ法（川喜田，1986）を用いて分析する。考察では、得られた結果と、Mohr & Kendra（2011）の研究をはじめとする、様々な国外の先行研究と比較し、新しく得られたと考えられる経験、特に第3章以降で着目すべきLGBの経験を見出す。その経験に影響を与える要因についても、上述の文化・歴史的背景の影響について言及したいいくつかの文献との比較を通して検討する。

第3章～第5章では、第2章で研究対象者になったLGBのうち、複数名に新たにインタビューを行い、その逐語を対象ナラティブとしながら、LGBであることの強みで着目されていることがどのように経験されているかを個別的に明らかにする。先行研究や第2章で示されたモデルと比較をしながら、文化・歴史的背景以外にも様々な側面を持つ当事者の個別性を尊重した理解を試みる。後述をするが、第3章以降は、LGBTQ+当事者支援活動をするLGBに着目することになった。第2章の研究から、Vaughan et al.（2014）の示した「平等・公平」、「チームワーク」や、Riggle et al.（2014）の尺度における「社会正義」の特徴は、どのような背景から獲得されたか、より詳細な検討が必要と考えられたためである。そのため第6章では、第3章～第5章の研究対象者となったLGBから共通して得られた、LGBとして行うLGBTQ+当事者支援活動に関する考察をまとめる。最後に第7章で総合考察を行う。

## 第2章

本邦のLGBの性指向に基づく経験

ーモデル生成の試みー

## 第1節 問題と目的

第1章で述べたように、LGBの独自の経験に関する研究は、一モデルや一要因での理解ではなく、より多くの経験を捉えることが求められるようになった。Mohr & Kendra (2011)をはじめとする研究によって、ポジティブな経験も含めたあらゆる経験が捉えられるようになったが、多くの研究は、本邦のLGBを対象にしていなかった。近年はインターセクショナルリティ（交差性）という言葉が注目され、LGBアイデンティティとその他のアイデンティティの相互作用によって、当事者の経験の様相は異なることが主張されている（Crenshaw, 1989）。特にLGBを対象にした研究では、文化・歴史的背景の影響を考慮に入れた研究が重ねられており（Galliher, McLean, & Syed, 2017; Ghabrial, 2017; Ghabrial & Andersen, 2021; Fukuyama & Ferguson, 2000）、白人で、男性で、クリスチャンを対象にした多くの研究では、本邦のLGBの実態は捉えられていない可能性が示唆された。本邦のLGBが欧米で中心的に研究されてきた当事者と異なる経験をしている可能性は、近い文化圏のLGBの経験に関連する研究（Fukuyama & Ferguson, 2000; Liang, Tan, & O' Halloran, 2017; Liu, Chui, & Chund, 2022）や、文化人類学を中心とした他分野の研究（Hamaguchi, 1985; Benedict, 1946/2008; 梅棹, 1991; 内田, 2009）からも推察された。そのため、本邦のLGBが国外の先行研究にない独自の経験をしていることを前提に、あらゆる経験が探索され、その経験に影響を与える要因も示される必要が考えられた。

そこで本章では、本邦のLGBの性指向に基づく経験と、その経験に影響を与える要因について探索し、一つのモデルを示すこととする。社会構成主義の研究の実施を、本論全体の目的の一つとしていたが、そもそも本邦では、文化・歴史的背景を考慮に入れた上での客観的知見が得られていない。本邦のLGBのコミュニティにおける、「客観的」、「一般的」知見、マスターナラティブが十分に理解されていない状況、と言える。第3章以降の社会構成主義の研究が、国外の実証主義における先行研究との比較によって考察されることでも、これまでの研究との相補的役割を十分に果たすと考えられるが（Bruner, 1990/2016; Gargen, 1999/2004）、第2章で、本邦のLGBを対象に強みを含む様々な経験を総合的に捉えた「客観的」、「一般的」知見を整理した後、その知見から着目すべき経験や現象を定め、さらには着目した点について、第2章の「客観的」、「一般的」知見と比較検証を行えば、個別的な経験をより細やかに捉えることができる。そのため、まずは客観的理解を目指そうとするポスト実証主義の立場で、LGBの性指向に基づく経験と、その経験に影響を与える要因の関係性を示す一モデルを示すことを目的に研究を行う。

具体的には、本邦の17名のLGBに低構造度のインタビューを実施し、その逐語をKJ法（川喜田, 1986）を援用して分析する。考察では、得られた結果と、国外のLGBのあらゆる性指向に基づく経験を示したMohr & Kendra (2011)の研究を中心に、国外の先行研究と

比較し、新しく得られたと考えられる経験を見出す。その経験に影響を与える要因についても、上述の文化・歴史的背景の影響の可能性について言及したいくつかの文献との比較を通して検討する。

非構造化インタビューについて、KJ法（川喜田，1986）を援用して分析する理由は、先行研究に捉われない発想的なアプローチが求められるためである。本章の目的となるLGBの経験については、Mohr & Kendra（2011）やRiggle et al.（2014）の研究があり未開とは言えないが、文化・歴史的背景に関する問題意識から、本邦のLGBの経験に関しては未開の領域があると考えられる。先行研究に依拠しない低構造度のインタビューによって、新たな経験を捉えることが求められるだろう。また、KJ法は、そのような未開の領域に着目して情報をあらゆる側面から収集し、研究者に限らない複数人の解釈を経て、データ自体から仮説生成を行う分析法である（川喜田，1969）。元々は文化人類学で用いられてきたツールであるが、心理学、臨床心理学の分野でも近年に至るまで援用されている（古田，2016；一柳，2021；今井・岡田・高瀬，2020；三好・堀川・高岸，2021）。本研究の問題意識にも合致する分析方法であると考えられる。以上より、LGBのあらゆる経験を拾うことができる低構造度のインタビューを行い、分析方法としてKJ法を援用する。

## 本章の目的

本邦のLGBが性指向に基づいてどのような経験をしているか、また、その経験に影響を与える要因について、当事者へのインタビューから探索的に明らかにする。



## 第2節 方法

### 研究対象者

知人，もしくは知人の紹介によって得られた17名を研究対象者とした（表2-1）。性指向は，レズビアン5名，ゲイ6名，バイセクシュアル6名で，年齢は20代10名，30代4名，50代2名，70代1名，居住地は関東7名，近畿4名，中国3名，九州・沖縄3名であった。職業は自由回答としたが，会社員と答えた者が最も多かった。

### インタビューの場所

研究対象者の指定する場所で原則実施した。指定がなければ，外部に情報が伝わらない個室を筆者が選んだ。

### 調査期間

2017年12月～2018年3月まで行った。

表2-1 研究対象者のプロフィール

| 協力者 | 性指向      | 年齢  | 居住地   | 職業        |
|-----|----------|-----|-------|-----------|
| A   | バイセクシュアル | 20代 | 九州・沖縄 | 会社員       |
| B   | バイセクシュアル | 30代 | 九州・沖縄 | 会社員，個人事業主 |
| C   | ゲイ       | 70代 | 九州・沖縄 | アルバイト     |
| D   | ゲイ       | 20代 | 中国    | 対人援助職     |
| E   | レズビアン    | 20代 | 関東    | 会社員       |
| F   | バイセクシュアル | 20代 | 関東    | 会社員       |
| G   | ゲイ       | 20代 | 関東    | 学生        |
| H   | レズビアン    | 50代 | 中国    | 執筆業       |
| I   | レズビアン    | 50代 | 中国    | 会社員，個人事業主 |
| J   | レズビアン    | 30代 | 近畿    | 大学院生      |
| K   | レズビアン    | 20代 | 関東    | 会社員       |
| L   | ゲイ       | 20代 | 関東    | 対人援助職     |
| M   | バイセクシュアル | 20代 | 関東    | 学生        |
| N   | バイセクシュアル | 20代 | 関東    | 教育機関職員    |
| O   | ゲイ       | 20代 | 近畿    | 研究員など     |
| P   | ゲイ       | 30代 | 近畿    | 会社員       |
| Q   | バイセクシュアル | 20代 | 近畿    | 公務員       |

## インタビュー方法

インタビューは筆者が行った。まず、フェイスシート(資料1)にて性指向、年齢、居住地域、職業を尋ねた。その後、「レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることはどういうことを意味しますか。思いつくことをできる限りあげてみてください。」「あなた自身はレズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることをどのように思っていますか。思いつくことをできるだけあげてみてください。」のオープンクエスチョン2題を尋ね、1人につき60分程度、出てきた言葉について詳しく尋ねた。本研究の問題意識から、先行研究に捉われない発想法的な考え方が方法に取り入れられるべきであると考え、構造度の低いインタビューを行った。ただし、オープンクエスチョンで回答がしづらい可能性が想定されたため、Mohr & Kendra (2011) や田中 (2018) を参考に、「レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることは隠したいことであると思ったことはありますか」などの補助質問を8題、文化・歴史的背景の影響も考慮に入れ、Fukuyama & Ferguson (2000)を参考に「親のために、レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることを犠牲にして男女で結婚しても良いと考えたことはありますか」などの補助質問を2題、合計10題準備した(表2-2)。インタビューが回答の難しい様子であるとインタビューの主観で判断したときには、その補助質問をいくつか提示した。クローズドクエスチョンのため、協力者が「はい」と答えた場合には、その経験を詳しく尋ねた。

表2-2 インタビューで使用された補助質問

- 
- ①レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることは、隠したいことであると思ったことはありますか。
  - ②レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることに、確信がもてないと思ったことはありますか。
  - ③可能であれば、異性愛者でいたいと思ったことはありますか。
  - ④レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることを認めることは難しいと感じたことはありますか。
  - ⑤周りの人があなたの性指向をどのように思っているのかを考えたことはありますか。
  - ⑥レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることは、異性愛者の人たちよりも優れていると思ったことはありますか。
  - ⑦レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることを、肯定的に捉えたことはありますか。
  - ⑧レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることは重要な側面であると思ったことはありますか。
  - ⑨他者のために、レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることを犠牲にできると考えたことはありますか。
  - ⑩親のために、レズビアン(ゲイ、バイセクシュアル)であることを犠牲にして男女で結婚してもよいと考えたことはありますか。
-

## 分析方法

インタビュー方法と同じように、先行研究に捉われない発想的な考え方が分析に用いられるべきように考え、川喜田（1986）のKJ法を援用した。以下、その手順を示す。

(1) 筆者が音声データを逐語化、切片化した。切片化は桜井（2005a）の語りの種類を参考にして行い、5人の臨床心理学専攻の大学院生（以下、分析協力者とする）が、切片化が適切かチェックをした。桜井（2005a）の述べる性指向への「評価」や「態度」の語りがMohr & Kendra（2011）が示した質問項目と同等の語りになる。「評価」は“価値判断に関する語り”のことを指し、「態度」は、“価値判断に基づく自分自身の状態の語り”を指す（桜井，2005a；竹家，2008）。その他の語りもどのような出来事や要因がそれらの「評価」や「態度」に影響を与えたか考察する上で重要と考え、分析対象として扱った。

(2) 筆者と分析協力者がグループ編成を行った。机の上にランダムに切片化データを並べ、同類のものを近くにおき、小グループを作った。小グループが作成されたら、表札作りを行った。筆者と分析協力者がそれぞれ表札案を出し調整した上で表札を作成した。

(3) 最初の小グループ（一次グループ）づくりを終えたら、さらに大きなグループに集約する作業と新しく得られたグループの表札作りを(2)と同じ方法で行った。これをグループが10以下になるまで繰り返した。最終的に、五次グループづくりまで行われた。

(4) 筆者と分析協力者が、図解化を行った。(2)、(3)で作成されたグループを、解釈のしやすいように配置し、グループごとの関係性を線で結んだ。

(5) 筆者が叙述化を行った。

## 倫理的配慮

研究協力の任意性と撤回の自由、個人情報保護、データの取り扱いについて慎重に説明し（資料2）、同意を得た上でインタビューを開始した。なお、本研究は九州大学大学院人間環境学研究院臨床心理学講座研究倫理委員会の承諾を得た後実施した。

## 第3節 結果

### 1. LGB への評価と態度に関する語りのグループ編成

グループ編成の結果、評価や態度の語りで構成されたグループを表2-3に示す。何回目のグループ編成時に生成されたグループかを、一次、二次、・・・五次で示す。また、一次グループは□、二次グループは◇、三次グループは【】、四次グループは{}、五次グループは<>で示す。

まず、三次グループ編成時に5つのグループが得られた。【性開示への懸念】、【受け入れられない】、【『普通』とどう折り合いつけたら良いかわからない】、【LGBであることの肯定】、【『普通』でいたい】、【『普通』への反発】があげられた。二次グループ編成時には、4つのグループが得られた。〈周囲からどう思われているのだろうか〉、〈重要なLGBアイデンティティ〉、〈一部としてのアイデンティティ〉があげられた。一次グループ編成時に、5つのグループが得られた。[当事者として役に立ちたい]、[社会に変化を求める]、[LGBで申し訳ない]、[期待に応えられない]、[LGBでいられることがありがたい]があげられた。

一次グループ編成時に得られたグループは、本研究の考察において重要な位置づけにあるため、切片化の前後も含めたより詳細な語りを示す。まず、[当事者として役に立ちたい]や、[社会に変化を求める]は、自身がLGBであったからこそ、他の当事者の支えになりたいことや、実際に支援はしなくても社会の変化を求める語りで構成された。例えば、[当事者として役に立ちたい]グループに語りの一部が編成されたHは以下のように語った。

H：(当事者支援団体の名称)を立ち上げたのも、当事者の大学生が一つの大きなきっかけだったんだけど、その子はトランスジェンダーの子で、…今の若者たちはすぐにネットで情報が得られるでしょ？でも彼と話していても、やっぱり生きづらさや根源的な孤立感みたいな。周りにもいないし、ひとりぼっちみたいな。そういう感覚って30年経っても変わらないなって、感じたっていうのも、ありますね。(…は省略を示す。)

具体的な当事者支援活動をしなくとも、[社会に変化を求める]者もおり、当事者支援活動をする者に賛同していた。例えばIの語りがあげられる。

I：日本では同性婚が認められてないから、パートナーシップ制度とかがあったとしても、それは法律で守られているものでもなんでもないし、だから自分たちのことをパートナーって言うだけのものだから、そうじゃなくてやっぱり、男女間の婚姻関係で守られて

表3 LGBであることに対する態度・評価の語りで構成されたグループとMohr & Kendra (2011) の因子との比較  
 LGBであることに対する態度・評価の語りで構成されたグループ

| 三次グループ | 性開示への懸念<br>受け入れられない               | (カミングアウトをしたら) 嫌がられるのではないか<br>(自分の性指向を) 認めたくないところもあるんだろ<br>うな、って思います    | 類似するMohr & Kendra<br>(2011) の因子 |
|--------|-----------------------------------|--|---------------------------------|
|        | 「普通」とどう折り合いつけたら良いかわからない<br>たら良いかな | 付き合うとしても (女性と男性の) どっちと付き合っ<br>たら良いかな                                   | アイデンティティの不確実性                   |
|        | LGBであることの肯定                       | 自分はゲイで良かったな、って思った  | アイデンティティの受容                     |
|        | 「普通」でいたい                          | 異性愛者だったら良かったのに   | 内在化された同性愛嫌悪                     |
|        | 「普通」への反発                          | 価値観を、成長させることを (異性愛者は) 怠ったん<br>じゃないか                                    | アイデンティティの優越性                    |
| 二次グループ | 周囲からどう思われているのだろうか                 | 親が私に対して、どういう感情を抱くのか  | 受容懸念                            |
|        | 重要なLGBアイデンティティ                    | ゲイであるってことは自分にとって重要なこと  | アイデンティティの中心性                    |
|        | LGBであることの受容                       | 思ったよりは (自分の性指向を) 受け入れるように<br>なった                                       | 困難なプロセス*                        |
| 一次グループ | 一部としてのアイデンティティ                    | (性指向は) 単純に私の一部   | アイデンティティの中心性*                   |
|        | 当事者として役に立ちたい                      | 共存できるきっかけみたいなを作りたい   |                                 |
|        | 社会に変化を求め                          | 社会的な状況っていうのは、やっぱり変えていった方<br>がいい  |                                 |
|        | LGBで申し訳ない                         | ごめんね、あなたの想像と違う (性指向である) け<br>ど、みたいな。                                   |                                 |
|        | 期待に応えられない                         | 孫の顔が見たいっていうのも、そうですね。親が求め<br>る、幸せとか、楽しみにしていることとか、のに<br>応えられない           |                                 |
|        | LGBでいさせてくれてありがたい                  | その部分 (性指向) を分かってもらえらるっていうの<br>はすごくありがたいと思う。何も隠さずオープンでい<br>られる、自分で居られる。 |                                 |

いるものがあるのと、同等のものが私らは欲しいと思つて。

[LGB で申し訳ない] グループは、異性愛中心主義の社会での一般のように振る舞うことができない自分に罪悪感を抱えたことが語られた。例えば、Q は世間体が悪いことを気にし、親や親族への申し訳なさを語った。

Q: まあこのまま、世間体で言ったら普通の恋人を見つけた方が良いのかな、と思いつつ、いや違うな、と思ったり。表向きには、両親にはそう、探し中、なんよ、っていう。…やっぱちょっと、申し訳ないな、みたいなの。正月に、親戚が集まっている時に、まあ親戚の人からも、どうなん、って言われるので。(…は省略を示す。)

家族以外の者への申し訳なさを話した当事者もいた。F は職場に嘘をついて生きていることについて話した。

F: 私が本当のことを言っていないから、虚偽の情報で話しているから、なんか、申し訳ないな、って思っているだけで。向こうは普通にさ、奥さんの話とか、子どもの話とか、別れちゃった彼女の話とか、してくれるわけだよ。その中で私は、(F のパートナー) のことを、なんか彼氏っていう程で置き換えて話すんだよ。まあ若干話せないこともあるさ、女の子同士だから。だから、なんかそれってさ、一枚噛ませているようなさ、そういう感じが申し訳ないな、って思うの。

[期待に応えられない] は、明確に他者の期待があった点で [LGB で申し訳ない] グループと差異があった。例えば、G の親に結婚や出産を求められた話があげられる。

G: なんか、結婚して子どもを産んで、みたいなのが、親が、子どもに求める幸せなのかな、とか。まあ多分、孫の顔がみたいにも繋がるんですけど、そういうのが幸せ、って俺の親は思ってるし、求めているので、それに応えられないっていうところに、申し訳なさが、あります。

[LGB でいさせてくれてありがとう] は比較的ポジティブな言葉であったが、異性愛中心主義の社会での一般のように振る舞うことができない自分の立場を低く捉え、周囲に配慮するように話しているという点では、[LGB で申し訳ない] や [期待に応えられない] グループに共通していた。例えばK の語りがあげられる。

K: やっぱりカミングアウトをすると、偏見とかもあるので、まあ離れていかれたことはな

いんですが、みんな理解して、お話聞いてくれたりだとか、まあなんか私がそうであるってことに対して特に、今までと何も変化なく接してくれることの方がほほほほなので。すごく、周りの人には感謝だな、って思います。…仕事が終わるとあとプライベートで、なんかやっぱり、恋愛をしたりとか、っていうところで、それがほとんど占めてくるので、その部分を分かってもらえるっていうのはすごくありがたいと思う。

[LGBで申し訳ない]、[期待に応えられない]、[LGBでいさせてくれてありがとう]の3つのグループの共通点は、周囲の期待や言動に配慮し、「自分の立場を低くした態度をとっている」点で、それがその他のグループとは別と捉えられた。今後、この「自分の立場を低くした態度をとる」ことを、その意の用語である「謙る」を使って表現する。

## 2. LGBの性指向に基づく経験と影響を与える要因

### —図解化、叙述化の結果—

分析の結果得られた、LGBの性指向に基づく経験と影響を与える要因の関係について示す。図解化の結果は、図2-1の通りである。当事者は<LGBアイデンティティ>について主に語った。LGBとしての自身の{性に関する認識}をすると、主に2つの行動、もしくは態度をとろうとする。まず、〈状況への対処〉である。LGBへの〈差別・偏見〉、[結婚ができない]という制度の問題、[古い「家」]文化の存在などの【社会的背景】や、自分の持つ【LGBへのイメージ】や【LGBコミュニティ】に参加したことなどの{LGBアイデンティティに影響を与える経験}を受けて、上述したうちのいくつかのネガティブな{LGBであることについて}の評価や態度を持つようになる。例えば、【性的開示への懸念】をすることや、【「普通」でいたい】という思い、[LGBで申し訳ない]という思いなどを抱く。そういった評価や態度をもつ〈状況への対処〉として、[LGBであることに距離を置く]ことや、異性愛者などのいわゆる[「普通」になろうとする]こと、別の[何かに努力する]ことを試みる。[LGBであることに距離を置く]ことや、[別の何かに努力する]など、LGBであることへのネガティブな内在化がなくとも行える行動もみられた。

[古い「家」]については、本研究の考察において重要な位置づけにあるため、より詳細な語りを示す。結婚や出産をすることや、家族内の性役割を責任だと感じていた。ただしそれは、「古い」、「古典的」、「前時代」、「田舎」などの、古くからの価値観であることを強調する言葉も付与されていた。現在の家族から問われる態度だけではなく、かつてからその地域にあったものと捉えている価値観を示す点で特徴的であった。例えばNやJの語りがあげられる。

N: すごい田舎育ちなんですけど、そういう、なんか風習みたいなのが、結構あるところで、しかも長男なんですよ。なので、すごいまだ家とか、期待されてる部分とか、結構あるの

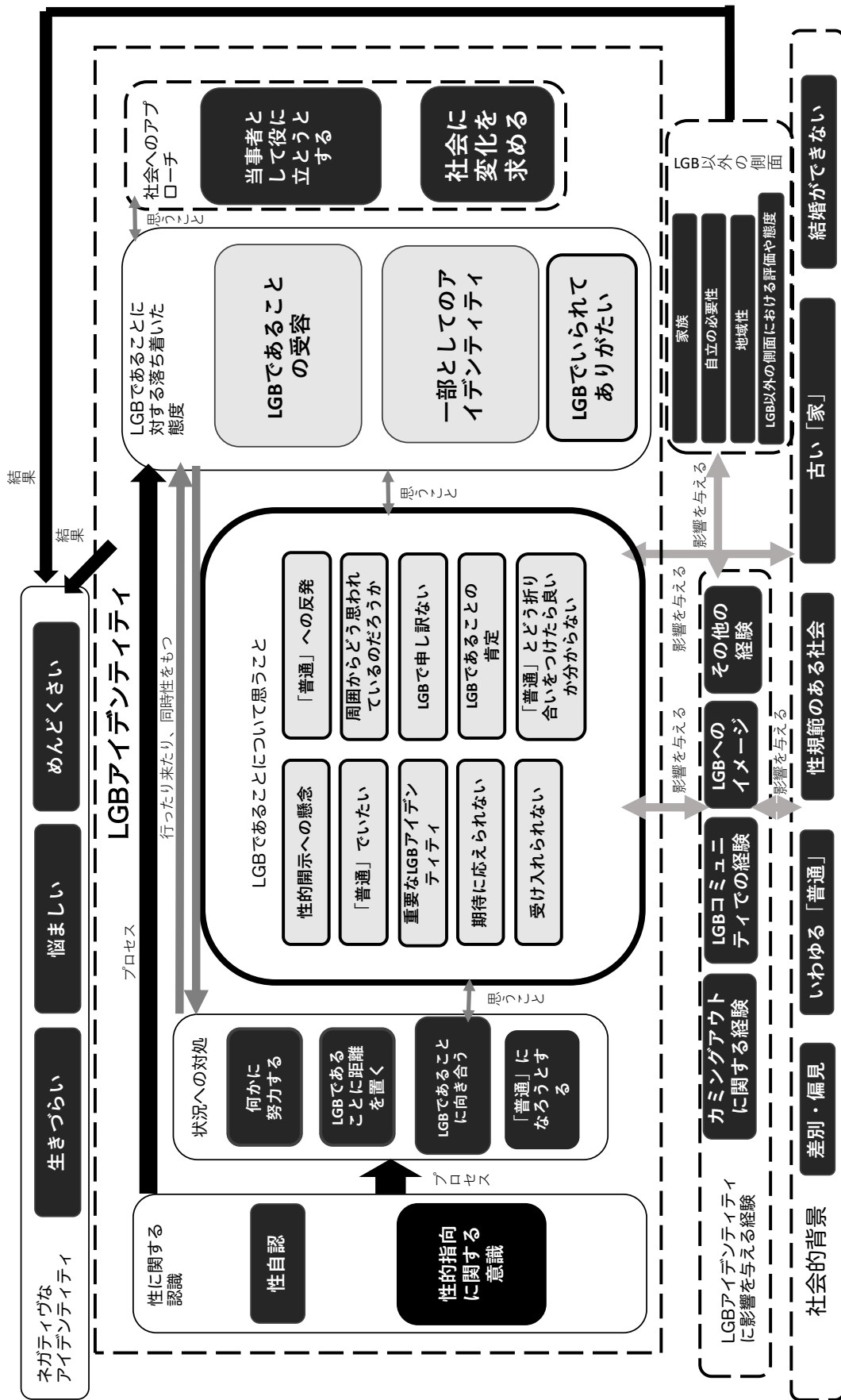


図2-1 LGBT当事者の性指向に基づく経験と影響を与える要因（図解化の結果）



で、そこに対して、親にすごく申し訳ないな、って結構思うので、なので、異性愛者であるのならばその方が楽だな、というか、その方が良いな、って思ってた時期もありました。

J: (父親は) ものすごい、古典的な考え方をする人だった。男女とは、男とは、なんかだから、自分がレズビアンであることに気づく前に、例えば、お皿自分で下げたらどうなの、みたいなことをめっちゃ言って、亀裂が入ってたんですよ。

新たな現象の発見を重視する KJ 法において、何人の切片化データからそのグループが構成されているかは本来重要ではないが (川喜田, 1969, 1986), [古い「家」] のグループは4人の研究対象者 (F, J, N, Q) のデータから生成された。

次に、【LGB であることに対する落ち着いた態度】である。〈状況への対処〉と同じく、【社会的背景】や {LGB アイデンティティに影響を与える経験} を受け、{LGB であることについて} の中でも【LGB であることの肯定】ができるようになることや、それ以外の評価や態度が薄れることがある。その結果、〈LGB であることを受容〉をすることや、〈一部としてのアイデンティティ〉として捉えること、〈LGB でいられてありがたい〉と感ずることなどと、【LGB であることに対する落ち着いた態度】を取るようになる。その後、当事者によっては、[当事者として役に立とうとする] ために、人権活動を始めると【社会へのアプローチ】を行う者や、具体的な活動はなくても [社会に変化を求める] 者も出てくる。

〈状況への対処〉と【LGB であることに対する落ち着いた態度】は、左から右に流れる一方向的なプロセスではなく、日によってその言動は行ったり来たりし、同時性をもつものである。また、ネガティブな〈LGB アイデンティティ〉形成は、性指向に限らない、当事者の総体的な【ネガティブなアイデンティティ】形成に寄与する。〈家族〉の仲の良さや〈自立の必要性〉が求められるような経済的問題、噂がすぐ広まるような〈地域性〉などの【LGB 以外の側面】も、〈LGB アイデンティティ〉や【ネガティブなアイデンティティ】形成に影響を与える。

## 第4節 考察

### 1. LGB への評価と態度に関する語りのグループに関する考察

本章は、本邦のLGBが性指向に基づいてどのような経験をしているか、当事者へのインタビューから探索的に明らかにした。考察では、国外のLGBを対象にした先行研究と比較して類似や差異を見出し、図解化や叙述化で得られた知見も踏まえて、性指向に基づく経験に影響を与える要因についても考察する。

表2-3に、本研究の自身の性指向への評価や態度の語りで構成されたグループとMohr & Kendra (2011)のLGBISの各因子との比較を示すと、多くはMohr & Kendra (2011)を代表する先行研究で説明できる経験であったと考えられる。〈LGBであることの受容〉や〈一部としてのアイデンティティ〉は、それぞれLGBISの「困難なプロセス」と「アイデンティティの中心性」の逆転項目に類似した質問が見られる。これらのことから、Mohr & Kendra (2011)などの国外の当事者を対象にした研究は、本邦の当事者理解にも有用と思われる。

Mohr & Kendra (2011)とは異なるが、他の先行研究で示されてきた知見と類似するグループも示された。具体的には、【社会へのアプローチ】内にある、[当事者として役に立ちたい]や、[社会に変化を求める]グループがあげられる。これらはVaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」の因子に類似する語りで構成された。第3章にも通じる結果で、本邦でも、正義感を持って当事者支援活動を行う者や、変化を求める者がいるといえる。

本研究から特筆すべき点は、LGBによって、支援的態度や実際の行動に差があったことである。[当事者として役に立ちたい]と、実際に当事者支援団体に所属するか、立ち上げるなどしてアクティヴィストになる、もしくは、生業としている当事者の一方で、[社会に変化を求める]が、実際の活動はなく、変容に賛同する当事者にグループが分けられた。Vaughan et al. (2014)や、Riggle et al. (2014)では一まとめになっており、尺度作成の参考とされたRiggle & Rostosky (2012)の質的研究でも、他者に貢献するレベルに差はあることを認めつつも、「メンター、ロールモデル、アクティヴィスト」と最終的に集約された。この差にどのような背景があるのかは本研究では明らかにならなかったが、[当事者として役に立ちたい]のグループのように、より他者志向的な経験の方が、当事者にとって自分の強みとして認識されやすく、ポジティブに作用しうるのでないか。そのために、このコミットメントの差の背景が明らかになることが必要であると考えられる。

[LGBで申し訳ない]、[期待に応えられない]、[LGBでいられてありがたい]は、どれも自分自身の性指向への評価や態度ではあるが、ポジティブにもネガティブにも他者の期待や言動に配慮し、かつ、謙っている点でその他のグループとは別と捉えられ、一次グルー

ブのまま残された。

逐語をみると、このような他者への配慮は、家族関係の中で多く語られた。家族との関係性の問題は、国外でも指摘されているが、多くは拒絶や虐待をされる可能性や、宗教的価値観の不一致に至る不安を扱っており (D' Augelli, 1998 ; Savin-Williams, 2001 ; Newman & Muzzonigro, 1993), LGBの方が他者に配慮するような評価や態度ではない。こういったLGBと家族の関係を調べた研究とは質が異なっていたといえる。また、これらの語りはアイデンティティの「世代性 (Erikson, 1959/2011)」に関する研究でも一つの葛藤としてみられる可能性のある知見だが、アメリカやイタリアのLGB研究では、異性愛社会での出産、子育て、部下の育成ではなく、若年層のLGBやLGBコミュニティに貢献をする中での葛藤が扱われている (Rostati et al., 2021 ; Rosebrough, 2003)。一方で、本研究の結果は、[LGBでいられてありがたい] という、LGB以外のコミュニティにとどまって関わろうとする当事者の様子も示された。「世代性」に関する研究とも異なる結果のように思われる。すなわち、これらの研究との比較からも、他者の期待や言動に配慮し、かつ、謙る経験が新たに得られた知見であった可能性が十分に考えられる。

## 2. LGBの性指向に基づく経験と影響を与える要因 (図解化, 叙述化) に関する考察

これらの評価や態度に与えた影響を中心に、図解化、叙述化の結果をみるが、まずはくLGBアイデンティティ>グループ内で特徴的であった様相を取り上げる。それは、〈状況への対処〉と【LGBであることに対する落ち着いた態度】が、行ったり来たりすることや、同時性をもつことを認めている点である。Cass (1979)に代表される、<LGBアイデンティティ>発達のプロセスを辿ろうとする者がいることは、本研究の結果からも説明ができる。その一方で、やはりモデルに当てはまらない当事者がいることも、本研究の結果から示すことができる。例えば、Rosario et al. (2006)の研究に見られた、LGBアイデンティティ統合をした後に、再び自身のセクシャリティをポジティブに捉えられなくなる当事者が、本邦にもいると考えられる。

また、〈状況への対処〉のなかに [LGBであることに距離を置く] ことや、[別の何かに努力する] が見られたことから、LGBであることをネガティブに捉えていても、適応的に生きている者がいる可能性も指摘できる。本研究のインタビューが、LGBであることについてを中心に語ってもらう機会になっていたため、図解化、叙述化の結果も<LGBアイデンティティ>に関する内容が中心的に示されたが、実際に努力してきたものや、他のアイデンティティについても同じ程度語ってもらう機会があれば、石丸(2007b)が示したように、カミングアウトをしなければ認識されづらいLGBの経験の特有性を活かして、適応的に生きていたことがより示されていたかもしれない。

次に、<LGBアイデンティティ>に影響を与えた経験や社会的背景に迫る。その多くは、

これまでの先行研究で説明できるだろう。{LGB アイデンティティに影響を与える要因} や【社会的背景】は、Cass (1979)や宮腰 (2013), 高藤・岡本 (2017) など、これまでのLGB アイデンティティ発達に関する研究で数多く取り上げられている。【LGB 以外の側面】も、家族や「自立の必要性」にみられた経済的問題 (Johnson, 2000), 地域性 (Galliher et al., 2017 ; Shapiro et al., 2010) は、先行研究でも触れられていた。ちなみに、【LGB 以外の側面】や<LGB アイデンティティ>が影響を与えていた、【ネガティブなアイデンティティ】というグループも見られた。このことも、心理的課題との関連が示された、内在化された同性愛嫌悪や、LGBIS の研究と一致する結果であったといえるだろう (Amole & Grimmett, 2015 ; Herek, et al., 1995 ; Meyer, 1995)。

しかし、「古い「家」」グループは、当事者が、現在の家族から問われる態度だけではなく、古くからあった家族観の影響があると捉えていることを示し、先行研究と比較し特異であった。確かに欧米での文献でも、家族が結婚や出産に理想を抱くことへの課題が指摘されているが、研究数としては少ないともいわれている (Goldfried & Goldfried, 2001 ; Heatheromgton & Lavner, 2008)。一方で、本章の「古い「家」」のグループは、4人のインタビューから構成されたグループであった。本研究のみならず、枝川・辻河 (2011) でも、バイセクシュアル当事者の家族の価値観、パワーバランスに、当事者自身が理解を寄せる語りが得られていたことから、本邦では個別性の高い事例とは言いきれない。また、アジア文化圏民族が、他民族と比較し家族集団との繋がりを重視し、家族孝行が行動を規定する可能性はこれまでも指摘されている (Fukuyama & Ferguson, 2000)。すなわちアジアに含まれる本邦でも、欧米研究と比較して家系のつながりや家族内の伝統的価値観の重視が根強いいため、当事者の方が家族に配慮する形で、特に、他者に配慮し、謙るという経験に影響を与えていた可能性がある。家族に同じ当事者がいる機会が減多になく、カミングアウトされない限り可視化されづらい LGB 独自の傾向を踏まえると (石丸, 2001, 2007a), 他のマイノリティと比較してもこの事象は独自性を持っている可能性が高い。ただし、方法として、簡易で分かりやすい図解化、叙述化を目指す分析を用いたため (川喜田, 1986), 他者の期待や言動に配慮し、謙る経験と古い「家」は直接矢印を引かれるなどして、関係性が示されたわけではない。実際に関係があったかは、より詳細にインタビューから読み取る必要がある。

家族の問題だけでなく、Fのように、職場などでの関係性についても語られた。図解化、叙述化から手がかりとなる結果は得られなかったが、家族だけでなく、直接的な他者とのつながりを重視することや (Benedict, 1946/2008 ; Hamaguchi, 1985 ; Liang, Tan, & O' Halloran, 2017 ; Liu, Chui, & Chund, 2022 ; 梅棹, 1991 ; 内田, 2009), 他者が文化的に上位であるという認識 (内田, 2009) という、アジアや日本の文化性は古くから指摘されてきた。そういった集団主義的価値観が家族に限らず他者に配慮することに影響を与えたことは推察できる。

### 3. 研究の展望

本章の課題として、まず、ポスト実証主義の立場での研究であったことがあげられる。一部に当事者の実際のインタビューを提示したが、客観的知見を目指し、性指向に基づく経験とそれに影響を与える要因について一モデルを生成することを目的とした研究であったために、具体的様相を理解することが難しい。特に、2つの視点に着目し、研究の展望について述べる。

#### 1) 支援的態度や行動にLGBの中で差が生じる背景が明らかにすること

[当事者として役に立ちたい]と、実際に当事者支援団体に所属するか、立ち上げるなどしてアクティビストになる、もしくは、生業としている当事者がいる一方で、[社会に変化を求める]が、実際の活動はなく、変容に賛同する当事者にグループが分けられた。両者は共に、【社会へのアプローチ】グループ内に編成され、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」の因子に類似していたが、【社会へのアプローチ】、支援的態度や実際の行動には、LGBによって差があることが明らかになった点は特徴的であった。[当事者として役に立ちたい]のグループのように、より他者志向的な経験の方が、当事者にとって自分の強みとして認識されやすく、ポジティブに作用するのではないか。そのためにも、この支援的態度や行動に差が生じる背景が明らかになることも必要であると考えられた。

#### 2) 他者に配慮し、謙る経験と[古い「家」]グループの関係性を明らかにすること

本章では新たに、[LGBで申し訳ない]、[期待に応えられない]、[LGBでいさせてくれてありがとう]という経験に関連するグループを見出した。これらは、周囲の期待や言動に配慮し、「自分の立場を低くした態度をとっている」、すなわち「謙っている」点で、先行研究や、本章のその他のグループとは別と捉えられた。また、経験に与える影響として、[古い「家」]という現在の家族から問われる態度だけではなく、かつてからその地域にあったものと捉えている価値観を示すグループも得られ、この伝統的家族観重視の影響が周囲の期待や言動に配慮し、謙る経験に影響を与えると考察した。しかし、簡易で分かりやすい図解化、叙述化を目指す分析を用いたため(川喜田, 1986)、他者の期待や言動に配慮し、謙る経験と[古い「家」]が直接矢印を引かれるなどして、関係性が示されたわけではなかった。実際に関係があったかは、より詳細にインタビューから読み取る必要性が考えられた。

他の課題や研究の展望も、3点あげられる。まず、研究対象者の属性について、家族内の伝統的価値観の影響があるならば、ジェンダーによっても異なる経験をしている可能性がある(Fukuyama & Ferguson, 2000)。また、単純に研究対象者の年代で20代が多かったことから、他の年代を中心とすれば結果に差異が見られる可能性もある。ジェンダー、年代から対象を限定し、研究を行うことも、新たな知見を得られるのではないか。次に、客観性の追求について、本章の研究はポスト実証主義の立場にあったため、客観的事実となることを目指すことも研究の展望として考えられる。今後多数のLGBを対象にし、現象

を正確に予測できる量的研究を行うことも求められるだろう。例えば, [LGB で申し訳ない], [期待に応えられない], [LGB でいられてありがたい] といった態度や評価は, 他のLGBにも経験されるものか, 明確にする必要がある。最後に, 研究対象者を本邦のLGBに限定した点について, 考察で示したように, 本邦の文化・歴史的背景が推察されるならば, 多文化圏にいる当事者との比較研究を行い, 国外との差を明確にすることも求められる。

## 第3章

一人のバイセクシュアルのナラティブ

—自分も支えられるための当事者支援活動—

## 第1節 問題と目的

第1章で述べたように、LGBであることの強みは、社会構成主義に基づく研究での理解も必要である。近年取り上げられるようになったLGBであることの強みに関する研究は、多くが実証主義に基づく研究で、当事者の個別性を尊重した理解に迫れていなかった。これは、第2章の課題でもあり、特に、1) 支援的態度や行動にLGBの中で差が生じる背景が明らかにならなかった点、2) 他者に配慮し、謙る経験と「古い「家」」グループの直接的関係は示せなかった点を、とりあげた。

社会構成主義の研究手法の一つである、個別性を重視したナラティブ研究の意義についても第1章で述べたとおりである。経験を詳細に言語で示しながら、「一般化」された理論の具体性、もしくは当てはまらない新規性の現象を示すと同時に、経験の背景に潜む、社会的な文脈、関係を明らかにする研究である (Galihier et al., 2017 ; 桜井, 2006)。「語られたもの」(やまだ, 2000) と、「語る行為」(やまだ, 2000) や「共時的側面」(木場, 2019) の両方に着目して考察することを特徴とする。かつてナラティブ研究のような個別性を重視した研究は、一般的理解を深める実証主義などの研究に比較して価値は劣り、論文として認めることは難しいといわれてきたが (Dogan & Pelassy, 1990), それは誤解であることも Flyvbjerg (2006)によって指摘されている。LGBであることの強みに着目してはいないが、本邦の臨床心理学分野でも、LGBを対象にしたナラティブ研究は実際に行われてきた (枝川・辻河, 2011)。すなわち、個別性を重視したナラティブ研究には独自の意義があり、他の手法を用いた研究と同等の価値を持つと考えられる。

そのため、本章以降は1人のLGBのインタビューを対象ナラティブとしながら、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強みに着目しながら明らかにする。強みの中でも、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」因子の中で着目された、“LGBTQ+当事者支援、擁護 (以降、当事者支援)” 活動をするLGBを取り上げる。第2章の課題の一つに、支援的態度や行動にLGBの中で差が生じる背景が明らかにならなかったことが理由としてあげられる。[当事者として役に立ちたい] のグループのように、より他者志向的な経験の方が、当事者にとって自分の強みとして認識されやすく、ポジティブに作用しうるのではないか。そのためには、まずこの[当事者として役に立ちたい] のグループのような支援的態度や行動が生じる背景が明らかになることが必要であると考えられた。Vaughan et al. (2014)も、これまで当事者支援活動をする者を研究対象にしても、差別偏見の認識やLGBTQ+を擁護したい願望が反映され、ネガティブな側面が多く扱われたため、強みとしてその経験が着目されることが少なかったことを問題としてあげていた。以上より、第2章のLGBの中で筆者が改めてインタビューを依頼した者の中から、「当事者支援の役割を担っていることを公表していた者、もしくは



は職業としていた者」のインタビューの逐語を対象ナラティブとする。

さらには、よりローカルで個別的な語りが得られるよう、先行研究や第2章の研究では示されなかったジェンダーにも着目し、インタビューを依頼するLGBと、対象とするナラティブをさらに選定する。地方在住のLGB（眞野，2014；Shapiro et al., 2013）や、出生に本邦以外のルーツも持つLGB（木場，2014）など、これまでLGBの中での多様で新たな経験は、他のアイデンティティとの交差によって示されてきたことが多い。伝統的価値観から解放され、未来を創造するという意味でも（Gergen, 1999/2004）、取り扱われてこなかった他のアイデンティティを持つ者とその経験を積極的に取り上げることや、その語りを示そうとすることは、社会構成主義の研究に求められる姿勢と考えられる。このようなこれまでの問題意識や取り上げられてこなかった者を選定することは「理論的サンプリング」（Glaser & Strauss, 1967/1996）と呼ばれ、ナラティブ研究を含む質的研究で有効といわれている（やまだ，2006）。本論でも理論的サンプリングに則った選定が求められるだろう。そこで本章では、第2章のもう一つの課題であった、ジェンダーによっても異なる経験をしている可能性に着目する。当事者支援活動をするLGBの中でも、今まで取り扱われることの少なかったジェンダーの者を研究協力者とするすることで、国内外の先行研究には見られないナラティブがより得られる可能性がある。

## 本章の目的

LGB1人のインタビューを対象ナラティブとしながら、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動に着目しながら明らかにする。また、研究対象者の一つの経験となり、研究の限界を考察するためにも、研究者と研究対象者の相互性にも着目し、語られ方を考察する。

## 第2節 方法

### 研究対象者

第2章の研究対象者のうち、Int が強く関心を持った5名のLGBには、改めてインタビューを依頼し、承諾を得て、より詳細に自身のセクシュアリティに基づく経験について尋ねていた。その5名のうち、第3章の研究対象者となったBは、30代のバイセクシュアルで、当事者支援活動をしていた。トランスジェンダー（ジェンダーアイデンティティが出生時に決められた性別と一致しない者）でもあり、出生時の性別は女性であった。BとIntは、2015年から年に数回会う機会があった。Bが運営するLGBTQ+支援団体の活動にIntが参加し、日常生活の話や、臨床心理学的立場からBの活動に助言をすることがあったが、BやIntの性について話す機会は、第2章のインタビュー時以外にほとんどなかった。

IntがBにインタビューを再度依頼した理由には、Bがトランスジェンダーであったことも同時に語ったことがあげられた。アジア圏のステレオタイプのジェンダー役割が性指向にも影響を与える可能性（Fukuyama & Ferguson, 2000）がいわれてきたが、LGBで、かつトランスジェンダーの者を対象にした研究はほとんど見られない。個別的で、先行研究にはみられないような語りが得られるかもしれないと考えたため、改めて研究対象になることを依頼した。

### 対象ナラティブ

2018年12月に行った1回のインタビューの逐語を対象ナラティブとした。第2章より詳細にインタビューができるよう、2時間を目安にインタビュー時間を設定し、1時間48分となった。

インタビューは、Harmmans (1995)と、Harmmans (1995)の一部を日本語訳したFlick (1995/2002)を参考にし、当事者が自身のセクシュアリティについて自由に語ってもらえるよう、(Bさんはバイセクシュアルであることについてどのように思っていますか。ご自由に、ゆっくりとお話ください。)と最初のみ教示し、その後はIntの関心や研究対象者のそのとき話したいことなどに基づいて進めた。ナラティブ研究を中心に、質的研究では、まず漠然と相手の人生に関心を抱き、文章化の過程でテーマが洗練されていき、理論や仮説生成に至ることが特徴とされる（Flick, 1995/2001; Hermanns, 1995; 桜井, 2005b; Wolcott, 2001）。そのため本章でも、LGBの性指向に関する経験やLGBであることの強み、当事者支援活動をすることに漠然と関心を持ちながらも、研究対象者の話したいこと、話ができることを中心に語ってもらった方が良いという考えに立ち、インタビューの設定を行った。

## インタビュー実施場所

筆者と研究対象者で協議した後、決定した貸会議室にて実施した。

## インタビュー어의属性

Int は筆者が行った。Int は 20 代の臨床心理学、LGBTQ+の心理と支援について学ぶ大学院生で、自身もゲイであると自認していた。

## 分析方法

竹家(2008)に倣った分析を行った。竹家(2008)は「シーケンス分析(Flick, 1995/2002)」や Rosenthal (1993)を基盤とし、研究者と研究対象者の相互性も考慮に入れた分析方法を示した。同じくバイセクシュアルへのインタビューを行った枝川・辻河 (2011) も採用しており、本章の研究にも適していると考えた。具体的には、以下の方法によってナラティブの再構成と経験の意味づけを行った。

### (1) 「語られたもの」に関する精読

竹家 (2008) は、「トランスクリプトを精読し、まずは全体としての形を見失わないように注意しながら、全体の語りの流れをみる」、「物語における意味的連続性を重視しながら「物語世界 (桜井, 2005b)」、「ストーリー領域 (桜井, 2005b)」双方について構造的にみる」とこの手順を説明している。「物語世界」とは、語られたものの中にある「筋 (桜井, 2005b)」のことを指す。いつ、どこで、だれが、どうした等の「筋」と、「ストーリー領域」、すなわち、その「筋」に対するインタビューーの評価や態度はどうであったか、について考えながら精読する段階といえる。図 3-2-1 の場合、メンズと恋愛・性的関係が 10 年ぐらいいないことに対し、自分がバイセクシュアルであることは印象としては薄いというストーリー領域の語りが得られ、当事者支援活動の一環として行っている講演で常にバイセクシュアルと言語化していることや、もし“バイじゃなくなって”と誰かに言われた時に“嫌だ違う”と言うことを想像したことに対し、バイセクシュアルであることはなくせない、欠かせないというストーリー領域の語り得られた。

### (2) 「語る行為」に関する精読

竹家 (2008) は、「語られた順番、特に聴き手と語り手の共同による継起順序の流れをみる。」とこの手順を説明している。この段階でも精読を行うが、今度は研究者と研究対象者の相互性を考察するために行われる。図 3-2-1 の場合、四角で囲った Int. の言葉が B の語りに影響を与えている可能性があった。なぜなら、その Int. の言葉の後、語られる経験やストーリー領域が異なっているように考えられるためであった。

|   |                      |
|---|----------------------|
| <p>Int1：Bさんは、バイセクシュアルであることについてどのように思っていますか。ご自由にゆっくりとお話ください。</p> <p>B1：んー。どう思ってるのかな（笑う）。んー。どう思ってるのかな。なんか全然、彼氏できない。メンズと、恋愛関係も、性的な関係も、もうずっとないんですよ。最後、もう10年ぐらないかもしれないですね。最後にメンズとセックスをしたのはもう24とか25のときかもしれなくて、10年ぐらいうち何もないし、感情的に惹かれるっていうのはもう、あんまりないかな。いいな、って思う人はいても、なんかそんなに強烈に。積極的に恋愛関係を探したいっていう風にはなかなかないねー。ということで…バイであるっていうことが、自分にとってなんのかって考えると、結構印象としては薄いもの。…</p> | <p>筋（プロット）</p>       |
| <p>Int2：…今なんでその話が出てきたのかな、っていうのを、不思議に思ってきたんですけど、なんだったんでしょうね。</p>   | <p>ストーリー領域</p>       |
| <p>B2：あー。あ、なんでかっていうと、印象としては薄い、もの？なんだけど、でもなくせない、欠かせない、…僕は、こんな活動をしているから、講演活動をしているから、常に言語化、性的指向について常に言語化してる、活動してる、ので、だから、なんか自分にとって、性的指向もまた、なんだろうな、なくせない、なくせないっていうのかな。…バイじゃなくなって、って。女の子と付き合ってるんだから、あなたは女の子が好きで、メンズが好きなんじゃないんでしょ、って言われたら、え、嫌だ違う、って。そうじゃない、って思うから、なくせない、って感じたのかな。自分の中の一部だと思うから。</p>   | <p>考えられうる意味的まとまり</p> |
|   | <p>聴き手とのやりとり</p>     |

図3-2-1 分析方法(Bの語りはB, インタビュアーの語りはInt, 省略は…で表記する。)

### (3) 各着眼点（「語りの種類」、「鍵になる言葉」、語られた量）の明確化

竹家（2008）は、「語られた量と語りの種類に着目し、語り手の人生の「鍵になる言葉（桜井，2005a）」を見出す」とこの手順を説明している。まとまりをさらに明確にするために、いくつかの着眼点を設け、整理する手順といえる。着眼点の一つとして、桜井（2005a）の「語りの種類」と「鍵になる言葉」が採用されている。その語りは経験の話なのか、評価の話なのかなど、筆者の視点から捉え、頻出する言葉を明らかにする。そして、前後の語りと、「語りの種類」や「鍵になる言葉」に違いがあるかで、今後まとまりを作っていくことになる。図 3-2-2 の場合、メンズと恋愛・性的関係が 10 年ぐらないという経験的語りと、バイセクシュアルであることは印象としては薄いと言う評価の語りが得られ、鍵になる言葉として「メンズ」や「関係」が考えられた。Int2 の語り以降、別の経験とその評価の語りになったこと、「メンズ」や「関係」が頻出はしなくなったことから(図 3-2-1)、C1 の語りまでを一つのまとまりとして分類した。

また、語られた量にも着目する。インタビュー自体の影響、インタビュアーとインタビュイーの相互性を考察するためである。例えば、より豊富に語っているとすれば、その後の語りを方向づけている可能性や、インタビュアーの積極的関与がみられる可能性がある。竹家（2008）同様、逐語の総行数に占める各シーケンスの行数の割合で示す。図 3-2-2

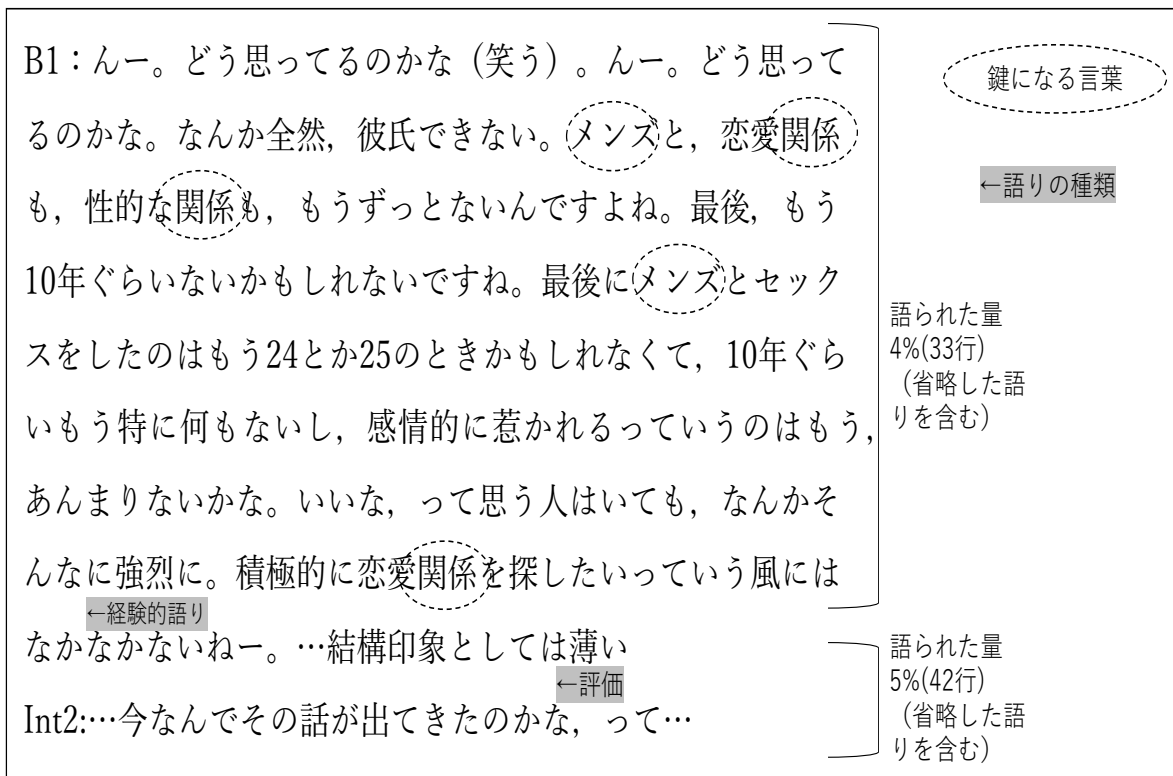


図3-2-2 分析方法(Bの語りはB, インタビュアーの語りはInt., 省略は…で表記する。)

での Int1 から B1 までの語りは 33 行で、全体の 4%であった。

#### (4) 年表の作成

竹家 (2008) は、「物語世界」を中心に「筋」に基づく“現実”に基づいた年表を作成する」とこの手順を説明している。ライフストーリーの概略であり、再構成されたナラティブをよむ際の補助的役割を果たす。Bの年表は、後に示す表 3-3-1 である。

#### (5) 経験への意味づけの分析

竹家 (2008) は、「ストーリー領域 (桜井, 2005b)」の「評価」や「態度」等の語りにも注目し経験の意味づけを分析する」とこの手順を説明している。意味づけは、枝川・辻河 (2011) と同じ、「体験した出来事を解釈し、構築した意味を、自己と他者における語りを通して普遍化していくこと」とする。手順 (1) での精読や、手順 (3) で着目した語りの種類を参考にし、「物語世界 (桜井, 2005b)」, 「ストーリー領域 (桜井, 2005b)」を実際に構造的に捉えることになる。図 3-2-2 の場合、メンズと恋愛・性的関係が 10 年ぐらいないという経験には、バイセクシュアルであることは印象としては薄いという意味づけられたことになった。

#### (6) ナラティブの再構成

竹家 (2008) は「ライフストーリーを再構成し、解釈する」とこの手順を説明している。

これまでの手順を参考にしながら、それぞれのまとまりにある出来事に対し、どのように思っていたか、明らかにし、研究の目的に基づいて結果ができる限り明瞭になるよう整理し、文章化する。

### **倫理的配慮**

研究対象者には、研究前に個人情報の取り扱いや自由意志に基づく研究協力の原則と、具体的な協力撤回などの手続きや研究開示の方法を説明し、同意を得た（資料3）。研究開示の具体的な手続きの一つとして、公表前に研究対象者に本論の内容について確認を依頼し、表現の修正などを行った。なお、本研究は九州大学大学院人間環境学研究院臨床心理学講座研究倫理委員会の承諾を得た後、実施した。

## 第3節 一人のバイセクシュアル (B) のナラティブ

### 1. Bの年表

ナラティブをもとに作成したBの年表を表3-3-1に示す。Bは地方都市に生まれた。出生時性別は女性であった。高校生の時にバイセクシュアルであると自認し、同性を好きになり、友人に初めてカミングアウトした。また、同時期からレズビアンコミュニティ、トランスジェンダーコミュニティに参加した。教育学系の大学に進学し、大学4年時に1年間休学し、卒業した。大学卒業前後でLGBTQ+の啓発講演活動、居場所活動を始め、講師、『スタッフ』として活動した。その頃までジェンダーアイデンティティはクエスチョニングだったが、24歳からトランスジェンダーになった。27歳から小学校教員として働き、29歳時に辞めた。インタビュー現在、Bは30代でパートナーがいた。主に当事者の個別相談、啓発、居場所活動を仕事としていた。

### 2. Bのナラティブ

表3-3-1 Bの年表

| 年齢  | ライフヒストリー                               |
|-----|--|
| 0歳  | B誕生                                    |
| 6歳  | 小学校に入学する。                              |
| 12歳 | 小学校を卒業し、中学校に入学する。                      |
| 15歳 | 中学校を卒業し、高校に入学する。                       |
| 17歳 | レズビアンコミュニティに行く、<br>トランスジェンダーコミュニティに行く。 |
| 18歳 | 高校を卒業し、大学に入学する。                        |
| 21歳 | パートナーができる。                             |
| 23歳 | 大学を休学し、フリーターになる。<br>男性としてアルバイトを行う。     |
| 24歳 | 大学を復学する。<br>LGBTQ+啓発講演活動を始める。          |
| 25歳 | 大学を卒業する。<br>LGBTQ+の居場所活動を始める。          |
| 27歳 | 小学校教員として働く。                            |
| 29歳 | 小学校教員を辞める。                             |
| 30代 | LGBTQ+の啓発、支援、居場所活動を行う。                 |
| 現在  |  |

表3-3-2 Bのナラティブのシーケンス

| 本論での<br>語りの順 | 内容的にひとつながりのエピソード       | 語られた順 | 語られた<br>量(%) | 鍵になる言葉                  |
|--------------|------------------------|-------|--------------|-------------------------|
| 1            | 自分を『化け物』と思っていた         | 10    | 2            | 化け物, 騙し                 |
| 2            | バイセクシュアルという言葉に出会う      | 5     | 5            | バイ, 大切                  |
| 3            | LGBTQ+コミュニティで同調圧力を受ける  | 3     | 11           | ピアン, 同調圧力, トランス, コミュニティ |
| 4            | 自分の性について考える            | 7     | 7            | 男, 女, 大学                |
| 5            | トランスジェンダーである           | 6     | 6            | 男, 女, バイト, トランスジェンダー    |
| 6            | LGBTQ+の子どものためにできることをする | 8     | 13           | 子ども, LGBT, コツコツ         |
| 7            | 自分の居場所を作る              | 4     | 2            | ミックス, 場所                |
| 8            | バイセクシュアルであることは印象が薄い    | 1     | 4            | メンズ, 関係                 |
| 9            | バイセクシュアルであることはなくせない    | 2     | 5            | なくせない, バイ               |
| 11           | 元々『正義感』を持っていたかもしれない    | 9     | 5            | 正義感, 子ども                |
| 10           | 今の自分を好きである             | 11    | 15           | 好き, 弱い, 努力              |
| 12           | 性と他の側面の関連は分からない        | 12    | 24           | 分からない, 関係               |

Bのナラティブのシーケンスを可視化できるようにするため、緩やかな流れを表3-3-2に示した。実際には語り直しや繰り返しなどがあった。また、BとIntの相互性についても考察するため、語られた順、鍵になる言葉、語られた量も表3-3-2に示した。鍵になる言葉はエピソードごとに異なっていたが、『バイ』セクシュアルや『トランス』ジェンダーなどのセクシュアリティ、ジェンダーに関する言葉は複数のエピソードに含まれていた。内容的にひとつながりのエピソードは12得られたが、主には(1)セクシュアリティ、ジェンダーに関するナラティブか、(2)セクシュアリティ、ジェンダー以外のナラティブに大別できた。本章の目的に沿ってできる限り分かりやすく示すため、Bのナラティブはこの2項目に沿って再構成することが望ましいと考えられた。語られた量で最も多かったのは、「性と他の側面の関連は分からない」ナラティブで24%であった。表3-3-3、3-3-4には、インタビューの逐語をできる限り示し、Bのそのままの言葉とIntとのやりとりが確認できるようにした。さらには、表からインタビューの流れが分かるよう、太字斜体で直前までの語りの要約を示した。以降、Bの言葉は『』、Intの言葉は◇、言い換えられた言葉や補足した言葉は()、逐語の省略は…で示す。

### (1) セクシュアリティ、ジェンダーに関するナラティブ (表3-3-3)

高校から大学1年の頃、Bは自分のことを『化け物』だと思っていた(語り1)。女性を好きになることは『頭おかしい』ことで、同級生にカミングアウトをして好きな人の話を聞いてもらえたとしても、『土下座して謝りたい』気持ちになっていた。そのようなBにとって、バイセクシュアルという言葉自体に出会ったことは、自分を理解する上で重要な経験となった(語り2)。様々な性を示す言葉がBにとって『しっくり来な』く、『寄る辺ない感じ』があったが、バイセクシュアルという自分が名乗れる言葉を見つけ、今でも『大



表3-3-3 セクシュアリティ、ジェンダーに関するナラティブ

語 **表3-3-4語り1の後の語りであった。これまでの話を整理したとき、詳しく聞いていなかったカ**  
 リ **ミングアウトの話になった**

- 1 Int：（カミングアウト）終わった後に印象を抱いたとか、ってありますか？  
 B：どういう思いで話してたか、っていうと、確か、土下座して謝りたいぐらいの気持ちで話したかな。僕は、隠してた、こんなとんでもない人間で、高校生の時とかは自分は化け物みたいに思ってたと思う。頭おかしいとか、化け物だ、とか思ってて。でも隠してるから友達でいられた、けど、騙していた。騙してるってずっと思ってたから、こんな自分でごめんなさい、って、土下座して謝りたいぐらいの気持ちで、話した気がする。  
 Int：それは、バイセクシュアルであることに関してなんですか、それとも、曖昧なジェンダーアイデンティティっておっしゃってましたけど、全部含めて？  
 B：その辺、どうだったかな。でも女の子が好きであるという点に対してだったような気がする。なんかこの間部屋の断捨離をしてたら、なんか20代前半の頃までかなり日記を書いてて、日記っていうかまあノートに、感じることバーッって書くみたいなことをずっとやってたのが、捨てられなくて。出てきたから、パラって見たら、自分は化け物だって書いてあって。やっぱ思ってたんだ。多分それはね、大学1年生の時とかに書いてたと思うんだけど。より強く高校生の時は思ってたかな。でそれは、多分、性別の話よりは女の子を好きになる自分、かな。

語 **表3-3-3語り7の後の語りであった。当事者支援を行うことに自分の居場所を作る意味もあっ**  
 リ **た、ということについて話していたときにBから話された。**

- 2 B：ちなみに今ふと気づいたんですけど。バイであることがなくせないっていう風に思ったのは、ジェンダーアイデンティティがクエスチョニングだった時期に、バイであるっていう名乗り、そのアイデンティティがすごく重要だったからだと思います。だからいまだにバイって言ってるのかも。パンじゃなくて。なんか、バイセクシュアルって、性自認を問わない言葉だな、って思って。なんか、ジェンダーアイデンティティのしっくり来なさっていうか。なんかどれも違う感じ、で、自分にはこう、寄る辺ない感じがあったんですよね。ハチドリがこうバタバタバタバタバタしてしてるけど、止まれない、みたいなイメージ。今思い返すとそういう感じで、寄る辺なくて自分が分からなくて、その中でバイセクシュアルであるっていうことは、はっきりしていた。から、特に10代の頃とかは、結構、男子を好きになったっていう経験がまだ濃かったから、付き合ったりとかしてないけど、バイセクシュアルであるとはすごくはっきりしている。だから、大切だったのかな、って思いました。

語 **表3-3-3語り9の後の語りであった。バイセクシュアルであることは『なくせない』とBが語った**  
 リ **後に、Intが尋ねた。**

- 3 Int：バイセクシュアルでなくなっしてほしいって、実際に言われたことがあるんですか。  
 B：んー。あー、めっちゃ若いころとかはあったかも。なんか高校生の時に、ビアのコミュニティに行き始めたんですよね。で、ビアのコミュニティにはトランスみたいな人とか、トランスの人とかも、いて、いたけど別にトランスに優しいわけでもないし、バイに優しいわけでもなくて。で、なんか結構偏見みたいなのもみんなあって。で、自分はその、19歳ぐらいの頃まで多分ビアのコミュニティに行ったりしてたかな。…バイだよっていうのはいうんだけど、あのめっちゃボーイだから、僕が。あ、ボーイッシュ。僕はトランスだってその頃思ってなかったから、めっちゃボーイ、っていう感じで見られて。で、なんか偏見だけど、偏見っていうかなんだろう、そのときの、他の人たちが持ってた偏見だと、ボーイとフェムが付き合うもので、ボーイはボーイを好きになったりだとか、しない、し、で、僕みたいななのは、なんかバイとかじゃないっしょ、みたいな。感じの、ノリがあったかな。…。そういう強烈な同調圧力っていうか、そういうのは、あの時感じて。で、同時にトランス系の人たちに対するこれじゃない感もすごい感じて。で、

語 **表3-3-3語り5の後の語りであった。表3-3-3語り3での、LGBTQ+コミュニティで同調圧力を受けた語り**でBが話したことについて、Intが質問をした。

4 Int: 離れたじゃないですか、レズビアンコミュニティから。

B: なんで離れたのかというと、彼女ができたからです。21歳ぐらいの時に、ピアン系のイベントで知り合った人と、ノリで付き合い始めて、その人はピアン自認がない人だったけど、付き合い始めて、結構安定して続いたかな。から、なんかそのバーとかイベントとかに行く頻度はすごく下がった。で、友達みたいなのも、ピアンコミュニティで出会った人とかも、なんかすごく限られた、特に気があった人とかかつるんですけど、前ほど、イベント行ったり掲示板したりみたいなことはしなくなった。かな。で、自分なんだろうなっていうのは多分大学生になってからずっと考えて、それは多分ジェンダーアイデンティティについてだけ。ってのはなんか私服になったら。高校生まで制服で、特に高校生の時の部活があの制服を脱ぐ暇がないみたいな部活だったから、自分ってなんだろうけど、とりまなんか女みたいな感じで過ごしてて、でも大学生になったら、私服で過ごすようになる。と、男なのか女なのか聞かれたり、男で通用しちゃったり、女でいなくても良くなったりもした。でそうすると、なんの服をきているとか何を選んでいるとかを、いちいち突っ込んでくる人がいて。まあそんなには多くなかったけど。で、私はなんでしょうか、っていうのを大学生のときに考え始めたのかな。相変わらず女の子が好きであるってことにちょっと悩んだりもしたけど。

語 **表3-3-3語り2の後の語りであった。表3-3-3語り3での、LGBTQ+コミュニティで同調圧力を受けた語り**でBが話したことについて、Intが質問をした。

5 Int: 社会的には(男性の方が良いと感じた)って、どういう意味なんでしょう。

B: 男なのか女なのかわからなかったから、わかんなくてずっと。でも23才の時に、自分はフリーターをしてその頃。大学を休学して学費を貯めるために。でそのときにトランスの友達から、なんか僕がずっとジェンダーアイデンティティってわかんないんだよねー、ってずっと言っていたから、それなら女で過ごした経験をもうしてるんだし、男で過ごしてみたら、って言われて、男でバイトしてみた。ら、男かって言われると相変わらず分かんないままだったけど、男として生活した方が、自分って感じがした。ていうことで、社会的には男性で、っていうような話。なんかすげー男らしくみたいなのはやっぱりちょっと、違うなって思ってたけど、それまでは端っこの方でも良いから女性の枠の中でって思ってたけど、で、男性の端っこの方でみたいなものの方が、なんか、あの時どう感じたのかな。なんか初めて、自分って感じがした。でそれまでいかに、自分が無理をしたり、自分じゃない人のふり?演技、してたのかっていうのが、そんなときに初めてわかった。まあ男で生活するのは大変だったけど、それはバイト先が大変なだけだったのかもしれないけど。店長に蹴られるみたいな経験は、あんまりしたことなかったかな。別にそれ、男だったら受け入れなきゃいけないとは思わないけど、男で生活するのって大変だな、これ、って。社会的な、男ジェンダーの生きづらさみたいなものはあるにせろ、なんかこっち、って感じ、って思った。から、トランスジェンダーなんだ、って思って。

切] だと思えるほどのアイデンティティとなった。その後Bは、レズビアンコミュニティ、トランスジェンダーコミュニティに出向いたが、そこで『強力な同調圧力』を受けた(語り3)。レズビアンコミュニティにある『ボーイ(ボーイッシュなレズビアン)とフェム(フェミニンなレズビアン)が付き合うもの』などの偏見があり、バイセクシュアルである自

表3-3-3 (続き2) セクシュアリティ, ジェンダーに関するナラティブ

語 **表3-3-3語り5の後の語りであった。トランスジェンダーと自認するようになってからのことを**  
 り **続けて話した。**

6 B: 多分その, ちょっと (トランスジェンダーであることが) クリアーになったら, もともと自分が (大学) に進学したのは, 先生になろうと思ったからだけど, 先生になろうと思ったのは, LGBTの子どもに, 自分みたいな思いをさせたくない, って思ったからだった, ってことで原点に帰って。卒論のテーマを変えたいと思った。復学したときに。僕はLGBTの子ども支援, 青少年支援について, 研究したい, って, 元々のゼミの先生に言ったら, なんか福祉系の先生を紹介されて。まあとにかく, 本来科を越えて, 専攻を, 全然違う専攻のゼミに入ることはあんまりないみたいだけど, 留年してるし, いんじゃないね, みたいな感じだったんですかね。まあとにかく行って, LGBTのこと始めた。特に, コネもないし所属できそうな団体もないし, 仲間もないからコツコツできることから始めて, …インカレサークルの人たちと知り合って。トランスプライド的にはすごい活性化されて, なんかトランスってもっと自由でいいんだ, みたいな感じかな。…卒論と自分の興味関心とやりたいことがめちゃくちゃ合致してるから, 論文を書くためにやっています, っていうよりはなんか全て同時進行みたいな感じの印象だった。その頃はなんでもやろうみたいな感じ, で。なんか良い感じになりそうな人には積極的に会いに行って話したりとかよくしてて。大学の人権の授業の先生が, "後期の授業で話してみる?" だとか, その頃に大学に"サークル作りた!" って思ってサークル作ってみたりだとか。そんな感じ。

Int: 卒論がしたいとかではなくて自分みたいな思いをさせたくない, っていうところなんですか。

B: うん。させたくないんだけど, 子どもたちにアプローチみたいなのは, その頃そんな簡単にできることじゃないから, なんか自分にできること何かな, って思った時に, 多分, 啓発だと思った。で, 知ることによって何かが変わる人たちがたくさんいて, それによって, まあ結果的には, 子どもたちも生きやすくなるだろうかと, みたいなことは思ったのかな。卒論絶対読み返したくないけどね。できることからコツコツと, みたいな。

語 **表3-3-3語り3の後の語りであった。レズビアン, トランスジェンダーコミュニティを離れた後**  
 り **について, Intが尋ねた。**

7 Int: (レズビアンやトランスジェンダーのコミュニティを) 離れて, どこに行ったんですか。どこにも行かなかったんですか。

B: 離れて, 新しい場所を作った。それは, (現在のLGBTQ+居場所活動) という,

Int: あー, なるほど。

B: ミックスの場所, が, あんまりなかったかな。なんか, 飲み屋のなかに一応ミックス, という名前になっているけど偏りのある場所とかが, ミックスバーって言うてるゲイバーみたいな。のところがあつたかな, って感じだけど。結局どこにもなじまなかったから, ビアンのところもなんかちょっといづらかったし, バイの居場所, まあバイの居場所っていう手もあったのかな。まあどっちみちだし, みたいなところもあって, なんかまぜまぜの方が, 自分は好きだな。

分には優しくない世界だと感じていた。似たような『強力な同調圧力』はトランスジェンダーのコミュニティにもあつた。それらのコミュニティを離れ, 大学に入学すると, Bは自分の性について改めて考えるようになった (語り 4)。私服で過ごす生活になると, 『男なのか女なのか聞かれたり, 男で通用しちゃったり, 女でいなくても良くなったり』し,

表3-3-3 (続き3) セクシュアリティ, ジェンダーに関するナラティブ

語 **最初の語りであった。教示に沿って話された。**

り Int: Bさんは、バイセクシュアルであることについてどのように思っていますか。ご自由にゆっ  
8 くりとお話ください。

B: んー。どう思ってるのかな(笑う)。んー。どう思ってるのかな。なんか全然、彼氏できない。メンズと、恋愛関係も、性的な関係も、もうずっとないんですよ。最後、もう10年ぐらいないかもしれないですね。最後にメンズとセックスをしたのはもう24とか25のときかもしれないけど、10年ぐらいもう特に何もなし、感情的に惹かれるっていうのはもう、あんまりないかな。いいな、って思う人はいても、なんかそんなに強烈に。積極的に恋愛関係を探したいっていう風にはなかなかないねー。ということで…バイであるっていうことが、自分にとってなんなのかって考えると、結構印象としては薄いもの。

語 **表3-3-3語り8の後の語りであった。バイセクシュアルであることが『印象としては薄い』と  
り 語ったことについて、Intが詳しく尋ねた。**

9 Int: …今なんでその話が出てきたのかな、っていうのを、不思議に思ってきたんですけど、なんだったんでしょうね。

B: あー。あ、なんでかっていうと、印象としては薄い、もの? なんだけど、でもなくせない、欠かせない、…僕は、こんな活動をしているから、講演活動をしているから、常に言語化、性的指向について常に言語化してる、活動してる、ので、だから、なんか自分にとって、性的指向もまた、なんだろうな、なくせない、なくせないっていうのかな。…バイじゃなくなって、って。女の子と付き合ってるんだから、あなたは女の子が好きで、メンズが好きなんじゃないんでしょ、って言われたら、え、嫌だ違う、って。そうじゃない、って思うから、なくせない、って感じたのかな。自分の中の一部だと思うから。

『私はなんでしようか』と考え始めた。一つの考える手段として、友達の助言をもとに、Bは男としてアルバイトをすることにした(語り5)。そのときに、男性であるかはBの中で依然分からなかったが、『男性の端っこの方』で生きた方が『自分』という感じがしたため、『トランスジェンダー』と自認をするようになった。トランスジェンダーであることが分かれると『スッキリ』し、大学に進学した理由も、自分と同じ経験を『LGBTの子どもにさせたくない』と思っていたことであつたと思いだした(語り6)。卒業論文やサークルへの参加、啓発、居場所活動などを通し、『コツコツと』『子どもたちへのアプローチ』を行っていた。また、LGBTQ+の居場所活動は、自分の場所を作ることも一つの理由としてあつた(語り7)。レズビアンやトランスジェンダーコミュニティに『なじまなかった』ことから、自分の好きな居場所を自分で作ろうとした。インタビュー現在、日常生活ではバイセクシュアルであることを意識することが少なく、印象として『薄い』ものであつた(語り8)。ただし、講演活動で常に言語化していることや、バイセクシュアルでなくなると言われると『嫌だ違う』と思うことから、『なくせない』ものであつた(語り9)。

このナラティブでは、セクシュアリティ、ジェンダーに関して、Bのカミングアウトからインタビュー現在に至るまでの出来事とその出来事への意味づけが語られた。本章の主目的であるBの当事者支援活動の背景を明らかにするという点でいえば、主に、1)Bの

ジェンダーと LGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観と、2) B 自身が支えられる必要のあったことの、2 つの特徴的な考察が得られたと考えられる。その他、第 2 章で取り上げた、3) [LGB で申し訳ない] の具体的様相、についても語られた。以下、その 3 点をまとめる。

### 1) B のジェンダーと LGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観

B は、同性を好きになることをネガティブに認識し、レズビアン、トランスジェンダーコミュニティでも『同調圧力』を受け、『私はなんでしょうか』と、大学生まで性に関するネガティブな経験や自問する日々を過ごしていた。「アイデンティティの混乱」(Cass, 1979) や、性指向に基づいて自分を嫌悪する様相 (Shidlo, 1994) を、具体的に語ったと考えられるが、『化け物』という言葉で自分を語るほどの認識の大きさについて、筆者の経験からは理解し得ないものがあると感じた。

筆者が理解し得なかった一つの背景として、B のジェンダーの影響があげられた。B はジェンダーでも自分の出生時性別や身体的性別に違和感を感じており、性において自認できるカテゴリーがなかった経験や、セクシュアリティとジェンダーの双方にレズビアン、トランスジェンダーコミュニティでの『強い同調圧力』の経験をしていたことを語った。LGBTQ+コミュニティ内のジェンダー、セクシュアリティの二項対立的価値観については、これまでも指摘されてきた (Blumstein & Schwartz, 1977)。本邦でも、レズビアンコミュニティで、性指向が異性愛と同性愛以外は不可視の状況にあり、両性愛や全性愛が「周縁化(排除はされないがコミュニティの中心にはいられない存在)」となることが木場 (2019) のナラティブ研究で示された。B の語りは木場 (2019) とは異なり、『ボーイ』や『フェム』という性役割(女性性-男性性) (Blumstein & Schwaratz, 1977) の話であった。木場 (2019) では示されなかったが、性指向だけでなく、性役割の二項対立も国外と同様に本邦でみられることが窺える。特にその頃、ジェンダーアイデンティティがクエスチョニングであった B にとっては、『強力な同調圧力』という言葉で表現するほど、性役割の二項対立的価値観が強く経験されていたに違いない。LGBTQ+の中でもジェンダー、セクシュアリティは多様であるにも関わらず、実際のコミュニティでは偏った理解がなされていたことが、筆者の理解し難かった、B の『化け物』という認識につながっていたと考えられる。

このような LGBTQ+コミュニティにみられる二項対立的価値観こそ、本研究の注目する、B の当事者支援活動の背景になっていたようだ。バイセクシュアルと自認するようになったことだけでなく、ジェンダーでも『トランスジェンダー』と自認する経験があった上で、『LGBT の子どもに (同じような経験を) させたくない』と思ったこと、レズビアンやトランスジェンダーコミュニティに『なじまなかった』ため、B 自身の居場所を作ろうとしたことから、当事者支援活動を始めていた。二つのアイデンティティでマイノリティであることで、双方のコミュニティの中でも差別を受け、一方で、その者同士で結束を持とうとする様相は Ghabrial (2017) の研究でもみられた。B も、LGBTQ+コミュニティでの偏った理解と B 自身のセクシュアリティ、ジェンダーとの不一致が当事者支援活動の背景になり、

自分と同じような他者を支えようとする行動を取るようになったと考えられる。

## 2) B自身が支えられる必要のあったこと

上述した、当事者支援活動でB自身の居場所を作ろうとしたことも、本章の着目すべき点であり、筆者にとって理解し難い語りであった。なぜなら、他者ではなく、自分が支えられるようとしていた点は、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」に類する語りとは一致しないためである。確かに当事者支援活動を始めたことに、『LGBTの子どもに(同じような経験を)させたくない』思いがあったこともあったが、支援者ではなく、被支援者になるために当事者支援活動を始めた点では、Bの語りはVaughan et al. (2014)や、Riggle et al. (2014)の当事者支援活動に関する記述では十分に理解できないものであったといえる。

一方で、比較する先行研究の知見の範囲を広げると、自分も支えられるために当事者支援活動を行う当事者は、これまでもわずかながら取り上げられていた。例えば、斎藤(2019)が北海道の当事者支援団体の事例で、当事者支援活動は「対外的活動」であるが、「対内的活動」の機会でもないと、心の「バランス」がとれない、と語った当事者が取り上げられている。Riggle & Rostosky (2012)も、強みに関する質的研究で、各強みは相互作用する関係にあることを指摘している。「メンター、ロールモデル、アクティヴィスト」としての強みを発揮し他者の支援をしながらも、「自覚、洞察、成長」の機会となる可能性もこの指摘から推察できる(Riggle & Rostosky, 2012)。第2章でも、一定の【LGBであることに対する落ち着いた態度】があった上で[当事者として役に立とうとする]行動と、LGBであることに対する[状況への対処]行動は、同時性をもつものと捉えられていた。自分も支えられるために当事者支援活動を行う可能性は、言及の数としては少ないものの、近年は他にも事例が見られつつある状況といえる。

## 3) [LGBで申し訳ない]の具体的様相

ちなみに、第2章で特筆した[LGBで申し訳ない]に類する話もBは語った。具体的には、“自分を『化け物』と思っていた”ナラティブでの、『土下座して謝りたい気持ち』や『ごめんなさい』という言葉である。Bの語りでいえば、カミングアウトが他者に受け入れられることは、ポジティブな自己像の獲得に向かう重要な経験の一つと捉えられていた(Cass, 1979; 高藤・岡本, 2017)が、この語りからはそういった変容が見てとれない。バイセクシュアルであることが申し訳ないという評価は、Bにとって、語りの通り大きく、ネガティブな影響を与えると捉えられるが、家族関係や文化・歴史的背景など、その他の側面の影響があったかなど、その詳細に迫ることはできなかった。

### (2) セクシュアリティ、ジェンダー以外のナラティブ (表3-3-4)

セクシュアリティやジェンダー以外の話もした。まず、当事者支援を活動行うほどの『正義感』を持っていたのは、元々だったかもしれないという話だった(語り1)。また、『他の人がなんと言おうとも、僕は自分が好き』である話もあった(語り2)。ただし、自分が『好

表3-3-4 セクシュアリティ、ジェンダー以外のナラティブ

語 **表3-3-3語り8の後の語りであった。当事者支援を行い始めた背景について、Bが続けて語った。**

1 B：でもそれは多分もともと僕が子どもの頃から正義感強めのタイプだったと思う。今思い返すと。表現として適切かは分からないけど。なんでそのように思ったかっていうと、クラスの、なんていうのかな。ハブられ、まではいかないけどあんまり馴染んでいないような人。を、よろしく、って言われたりしてた。例えば社会科見学に行ったりするときに、その子一人になりそう、とかんとき、よろしくって。先生から言われたりしたのかな。あとね、曲がったことが嫌いだった、多分高校生の時は。なんだったんだろうね。いや、10代の自分が、自分は正義感が強いとか思ってなかった。もうちょっと経って、20代とか、活動始めるようになって。たまに、なんか聞かれる、やっぱ。どうしてこんな活動してるのか、って。で、多くの人はなんかトランスだからやっているのだろうと思ったりするんだけど、別に。当事者だから社会的な活動するとは限らない、と思う中でどうして自分やってるんだろうな、って。でなんか自分は昔からこういうのが好きだったのかもしれないな。

語 **表3-3-3語り1の後の語りであった。高校の頃の日記を残している理由について、Intが詳しく尋ねた後、語られた。**

2 B：昔から好きですよ、自分のこと多分。

Int：なんかそれは僕の中では化け物だ、っていうイメージとは逆なんですけど。

B：うんうん。確かに話しててそれは思いましたね。化け物だな、とか頭おかしいな、とは思っているけど。あーでもちょっと待てよ。自分好きだな、って感じ、思うようになったのは大学生からかもしれないな。高校生の頃も好きだったのかな。んー。でも大学生の時に書いたものにも化け物だ、って書いてあるんだよね。…今自分が好きだな、って思うのは、多分他の誰がなんと言おうとも、僕は自分が好きって感じなんだと思う。他の人が僕をどう評価するからとかじゃなくて。なんか、とても素敵な自分の顔、とか顔面偏差値が高いとか、全然ないけど。他の誰がなんと言おうとも僕は自分の顔が好きだな、って。思ったりとか。

語 **表3-3-4語り2の後の語りであった。『正義感』や『自分が好き』と思うようになった背景についてIntが詳しく尋ねた。**

3 B：なんか今話していたような、セクシュアルオリエンテーションとジェンダーアイデンティティと、直接的な関係性がない自分の人生に起こっているいろんな出来事を、がどれぐらい自分のSOGIEの側面に関係していて影響があったのか、っていうのは、ちょっとよくわからないですね。…それらの部分と性的指向の関係性について、関係があるのかないのか、とか。

Int：…今性的指向に関しては、自分がその一、印象は薄いけどなくせないものって最初におっしゃったじゃないですか。なんかそういう風に思うに至った背景はなんだったのかっていうのを追ってたときに、こう、正義感が強かったとか、曲がった事が嫌いなことが、絡んできたじゃないですか、なんか途中から。うん、だからちょっと大事になってくるのかな、っていう想像をしてた。

B：…うん、そうねー。そうだねー。なんで正義感が強いのかについては、ちょっと分かんないんだよね。

き』であることのきっかけになるような経験は語られなかった。インタビューの終盤、こういったセクシュアリティ、ジェンダー以外の自分の評価や態度が、どの程度バイセクシュアルであることと関わりを持っているかを多くやりとりしたが、『正義感』や自分のこと

が『好き』と思うようになった背景になる経験は結局『分からない』と話した（語り 3）。この後、倫理的配慮のために本論を提示し検討したときも、『なんで正義感があったのかは本当に分からないんだよね』と話した。

#### ・“性と他の側面の関連は分からない” こと

ジェンダー以外の側面も、B のバイセクシュアルとしての人生や、当事者支援活動を行うことに影響を与えている可能性があり、筆者の関心は強かった。特に、『正義』という強みと捉えられる言葉そのものが語られることや、『他の人がなんと言おうとも、僕は自分が好き』という言葉については、第2章の考察に用いた他者の評価で初めて自己を認識できるという本邦の文脈依存的自己に関する文化論 (Hamaguchi, 1985; 梅棹, 1991; 内田, 2009) とは異なる語りで特徴的であったといえる。

それほど『正義』、『自分が好き』と語る背景を探索する重要性は本研究にとって高いと考えられる一方で、今回の対象ナラティブの中では、明確で詳細な語りを得ることができなかった。最後の“性と他の側面の関連は分からない” 語りはインタビューで最も語られたエピソードであったことから、Int と多くのやりとりをしたにも関わらず、語れなかったことがみてとれる。現時点ではひとまず、当事者支援活動を行うことの全てを、B 自身も明確にしないまま経験していたことが推察されるのみである。

### (3) インタビューにおける B と Int の相互性

方法や逐語からインタビューにおける B と Int の相互性を確認し、如何にしてこのナラティブが得られたか、考察する。多くの考察が可能だが、本研究で着目した当事者支援活動を行うに至った背景の語りが得られたことに着目すると、1) 筆者がジェンダーにも関心を寄せていた点、2) インタビューの構造、の影響は大きいと考えられる。以下、この2点についてまとめる。

#### 1) 筆者がジェンダーに関心を寄せていた点

まず、筆者がBのジェンダーに関心を寄せていたことで、(1)セクシュアリティ、ジェンダーで考察したナラティブでの 1)B のジェンダーと LGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観と、2)B 自身が支えられる必要のあったことに関する語りと考察が得られたと考えられる。問題意識や理論的サンプリングから、ジェンダーへの関心を示していたが、逐語からも、B が自発的にジェンダーについて語る様相 (表3 語り 2, 語り 3, 語り 4, 語り 6), Int がジェンダーについて質問をしていたこと (表3 語り 5, 語り 7) がうかがえる。表3 語り 3, 語り 7 は上述の2点の考察の中心となった語りである。以上より、筆者のBのジェンダーへの関心が、特にLGBTQ+コミュニティにおける二項対立的価値観の考察につながる語りを生成したと考えられる。

#### 2) インタビューの構造

一方で、セクシュアリティやジェンダー以外の語りを制限するようなインタビューの構造でもあった。これが(2)セクシュアリティ、ジェンダー以外のナラティブでの“性と他の



側面の関連は分からない” ことに関する語りと考察につながったと考えられる。具体的には、〈バイセクシュアルであることについてどのように思っていますか。〉と尋ねた点と、インタビュー時間は唯一構造化されていた。Bが他の側面について語る想定をしておらず、時間も限られていたため、特に、『正義感』や自分のことが『好き』と思うようになった背景になる経験は、最終的に『分からない』と話したことにつながった可能性がある。この構造化されていた点は、本研究の限界と捉えることもできる。例えば、LGBであることを尋ねる姿勢は維持しつつ、より人生全般を自由に語れる構造で、再度Bにインタビューを行うことができれば、本研究では『分からない』ままに終わったBの経験に、新たな意味づけがなされることが期待できる。

## 第4節 Bのナラティブのまとめ

### —自分も支えられるための当事者支援活動—

本章は、1人のLGBのインタビュー（B）を対象ナラティブとしながら、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動をすることに着目しながら明らかにすることを目的とした。第2章で、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景が明らかになることが、研究の展望の一つになったことが目的を設定した理由であった。Bのナラティブから、主に1) BのジェンダーとLGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観と、2) B自身が支えられる必要のあったこと、3) “性と他の側面の関連は分からない” ことの、3つの特徴的な考察が得られた。

#### (1) BのジェンダーとLGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観

Bが当事者支援活動を始めた一つの背景に、ジェンダーでも出生時性別や身体的性別に違和感を感じていたことと、それに基づく経験があげられた。BはLGBTQ+コミュニティの中にも性役割の二項対立的価値観がみられ、ネガティブな経験をしていたのであった。そのことが、『LGBTの子どもに（同じような経験を）させたくない』と、さらには、レズビアンやトランスジェンダーコミュニティに『なじまなかった』ため、B自身の居場所を作ろうと、当事者支援を始めることにつながっていた。

#### (2) B自身が支えられる必要のあったこと

1) BのジェンダーとLGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観にも関連するが、当事者支援活動でB自身の居場所を作ろうとしたことは、特徴的であった。他者ではなく、自分が支えられようとしていた点は、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」に類する語りとは一致しないためであった。一方で近年は、この当事者支援活動を行う者自身がその活動の中で支えられる場合があることについて、斉藤(2019)の「対内的活動」に関する言及など、わずかながら事例が見られる状況になった。

#### (3) “性と他の側面の関連は分からない” こと

ジェンダー以外の側面も影響を与えている可能性があった。例えば、元々『正義感』を持っていたかもしれないこと、『他の人がなんと言おうとも、僕は自分が好き』である話があげられた。ただし、このようなセクシュアリティ、ジェンダー以外の自分の評価や態度が、どの程度バイセクシュアルであることと関わりを持っているかは明らかにならなかった。当事者支援活動の全てを、B自身も明確にしないまま経験していたことが推察された。

他に、第2章で特筆した[LGBで申し訳ない]に類する話もBは語った。“自分を『化

け物』と思っていた” ナラティブでの、『土下座して謝りたい気持ち』や『ごめんなさい』という言葉であった。B にとっては、それほどまでに大きくネガティブな経験であると考えられたが、家族関係や文化・歴史的背景など、その他の側面の影響があったか、については迫ることができなかった。

最後に、これらのナラティブが如何にして得られたか、インタビュアーとインタビューの相互性に基づいて考察した。特に、1) 筆者がジェンダーに関心を寄せていた点と、インタビューの構造から考察を深めた。

今後の研究としては、得られた観点から新たにインタビュー協力者を得ることが考えられよう。例えば、1) 男性、女性、トランスジェンダー以外のジェンダー自認の当事者や、2) 他者を支えることと自分を支えることの両方の意識を持たない、斉藤 (2019) でいう、「対外的活動と対内的活動のバランス」の意識はなく当事者支援活動を行っている者、などを一つの観点として理論的サンプリングを行うことができる。また、インタビュアーとインタビューの相互性から、3) インタビューの教示の変更や、B へのインタビューを再度実施することも、研究の展望としてあげられた。

## 第4章

### 一人のゲイのナラティブ

—他者も自分も支えられなかった当事者支援活動—

## 第1節 問題と目的

LGB であることの強みに関する研究の多くが実証主義に基づく研究で、当事者の全体性を尊重した理解に迫れていなかったこと、それは第2章の一つの課題にもなったことは、第1章、第3章でも述べた通りである。そのため、本章でも第3章と同じような問題意識に則り、引き続き社会構成主義の研究手法の一つである個別性を重視したナラティブ研究を用いて、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、強みの中でも当事者支援活動をすることに着目しながら明らかにすることを目的とする。当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景について、主に示していく。

ただし、第2章だけでなく、第3章を踏まえた上で、対象ナラティブの理論的サンプリングを行うこととする。具体的には、1) ジェンダー、2) 年代、3) 当事者支援活動に寄せる思い、の観点から、第3章とは異なる研究対象者のナラティブを選択することができる。

### (1) ジェンダー

第2章の課題の一つであり、第3章では理論的サンプリングの1つの観点となった。他のジェンダーを持つ当事者にも取ることも、一つの選択であるだろう。ただし、筆者が対象ナラティブとして示すことのできるインタビューなどは、第3章のBを除いて、男性、もしくは、女性のみであった。そのため、第4章のサンプリングの観点からは除外された。男性、女性、トランスジェンダー以外のジェンダーを自認するLGBへのインタビューは、本論全体の課題となる。

### (2) 年代

年代についても第2章の課題の一つであった。研究対象者の年代で20代が多かったことから、他の年代であれば、第2章ではみられなかった現象や経験が捉えられる可能性がある。特に、これまでのLGBを対象にした本邦での当事者理解に関する研究は、青年期～成人前期の研究が多く（枝川・辻河, 2011; 石丸, 2007b; 宮腰, 2013; 高藤・岡本, 2017, 2019; 横木, 2003）、思春期以前や、中年期、高齢期の当事者に関する研究は少ない。本論で示した先行研究の中では、眞野（2014）の研究対象者の一部に40代がいたのみである。本邦のLGB研究全体の様相からも、他の年代の当事者を取りあげることは積極的意義があると考えられる。

### (3) 当事者支援活動に寄せる思い (図4-1)

第3章から明らかになったことの一つは、当事者支援活動を行う背景に、自分も支えられるため、という目的があった点である。具体的に言えば、第3章で取り上げたBは、自分の性について理解が深まり、『スッキリ』とした気持ちになって、『LGBTの子どもに（同じような経験を）させたくない』と思ったことだけでなく、既存のLGBTQ+コミュニティでは自分自身の居場所が得られず、自分自身で居場所を作ろうとしたことも、Bの当事者支

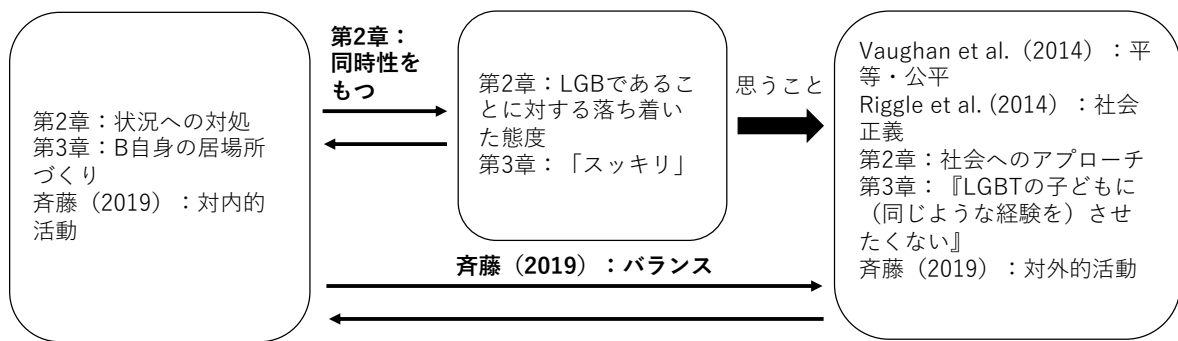


図4-1 第2章，第3章，斉藤（2019）の結果と考察の簡略

援活動の背景になっていた。第2章でいう，同時性をもつ〈状況への対処〉行動，もしくは，斉藤（2019）で言う「対内的活動」の意識がBの当事者支援活動にあたって重要であった。これらの考察に至る語りを得たことは，本研究の意義の一つといえるだろう。では，ここでいう〈状況への対処〉行動の同時性を当事者支援の文脈で語らない者や，「対外的活動と対内的活動のバランス」の意識が見られない者はいるのか。いるとすれば，強みとして当事者支援活動を行えているのか，もしくは行えていないのか。さらには，強みとして当事者支援活動を行えているのであれば，どういった背景がみられるのか，などの疑問が生じた。ここでの同時性をもつ可能性のある〈状況への対処〉や，「対外的活動と対内的活動のバランス」といった観点から，Bとは当事者支援活動に寄せる思いが異なる者のナラティブを取り上げることは，新たな価値観や語りを得られる可能性があり，有益と考えられる。

## 本章の目的

1人のLGBのインタビューを対象ナラティブとしながら，性指向に基づく個別的経験について，特にLGBであることの強み，当事者支援活動に着目しながら明らかにする。また，研究対象者の一つの経験となり，研究の限界を考察するためにも，研究者と研究対象者の相互性にも着目し，語られ方を考察する。

## 第2節 方法

### 研究対象者

第2章の研究対象者のうち、Intが強く関心を持った5名のLGBに、改めてインタビューを依頼し、承諾を得て、より詳細に自身のセクシュアリティに基づく経験について尋ねた。第4章の研究対象者となったCは、70代のゲイであった。第2章のインタビューのときに知人から紹介を受け、知り合った。第2章のインタビューが初めて面会したときで、本インタビューは2度目の面会であった。

IntがCにインタビューを再度依頼した理由には、Cが当事者支援活動をしており、高齢期の当事者であったことがあげられた。第1章にて取り上げた本邦のLGBを対象にした研究は、多くが青年期～成人前期の年齢を対象にしており、本邦の高齢期のLGBを対象にした研究はほとんど見られなかった。トランスジェンダーでバイセクシュアルであったBのナラティブと同様、どういった経験をしているのか、その一端を知るCへのインタビューは有益になると考えた。

### 対象ナラティブ

2019年1月に行った1回のインタビューの逐語を対象ナラティブとした。第4章の対象ナラティブとして選んだ積極的意義は、高齢期であったことではなかった。そのインタビューで、他者を支援する目的はほとんど語られず、第2章でいう自分自身の[状況への対処]、斉藤(2019)でいう「対内的活動」を中心的な目的として、Cが当事者支援活動を始めたことを語った点も、理由としてあげられた。当事者支援活動に寄せる思いで、Bとは異なっていたため、対象ナラティブとする意義があると考えた。

第2章より詳細にインタビューができるよう、2時間を目安にインタビュー時間を設定し、2時間27分となった。インタビューは、当事者が自身のセクシュアリティについて自由に語ってもらえるよう(Cさんはゲイであることについてどのように思っていますか。ご自由に、ゆっくりとお話ください。)と最初のみ教示し、その後はIntの関心や研究対象者のそのとき話したいことなどに基づいて進める、構造度の低い手法であった。第3章と同じ考えに立ち、インタビューの設定を行った。

### インタビュー実施場所

筆者と研究対象者で協議した後、決定した貸会議室にて実施した。

### インタビューアーの属性

Intは筆者が行った。Intは20代の臨床心理学、LGBTQ+の心理と支援について学ぶ大学

院生で、自身もLGBであると自認していた。

## 分析方法

竹家(2008)に倣った分析を行った。竹家(2008)は「シーケンス分析(Flick, 1995/2002)」やRosenthal(1993)を基盤とし、研究者と研究対象者の相互性も考慮に入れた分析方法を示した。同じくLGBへのインタビューを行った枝川・辻河(2011)も採用しており、本章の研究にも適していると考えた。具体的には、以下の方法によってナラティブの再構成と経験の意味づけを行った。詳細は第3章に示した通りである。

- (1) 「語られたもの」に関する精読を行った。
- (2) 「語る行為」に関する精読を行った。
- (3) 各着眼点(「語りの種類」、「鍵になる言葉」、語られた量)を明確にした。
- (4) 年表を作成した。
- (5) 経験の意味づけを分析した。
- (6) ナラティブを再構成した。

## 倫理的配慮

研究対象者には、研究前に個人情報の取り扱いや自由意志に基づく研究協力の原則と、具体的な協力撤回などの手続きや研究開示の方法を説明し、同意を得た(資料3)。研究開示の具体的な手続きの一つとして、公表前に研究対象者に本論の内容について確認を依頼し、表現の修正などを行った。なお、本研究は九州大学大学院人間環境学研究院臨床心理学講座研究倫理委員会の承諾を得た後実施した。



## 第3節 一人のゲイ (C) のナラティブ

### 1. Cの年表

ナラティブをもとに作成したCの年表を表3-4-1に示す。家族は父、母、長兄、次兄で、Cは三男で、大学まで進学した。母方に非嫡出子の兄もいた。大学は退学し、首都圏へと転居した。以降、数回居住を変えた。32歳から41歳にかけて定職につくが、ほとんどアルバイト勤務で生活していた。また、LGBTQ+当事者支援活動も行っていった。内容としては、電話相談であり、性感染症に関わる電話相談と、性感染症に限らない電話相談の二つを仕事として行っていった。両方ともこのインタビューのときには辞めていた。インタビュー当時は地方都市にてアルバイトをしながら生活していた。

### 1. Cのナラティブ

Cのナラティブのシークエンスを可視化できるようにするため、緩やかな流れを表3-4-2に示した。実際には語り直しや繰り返しなどがあつた。また、CとIntの相互性についても考察するため、語られた順、鍵になる言葉、語られた量も表3-4-2に示した。鍵になる言葉は様々であつたが、「小説」という言葉が多くみられた。内容的にひとつつながりのエピソード

表4-3-1 Cの年表

| 年齢        | ライフヒストリー                                     |
|-----------|--|
| 0歳        | C誕生  |
| 6歳        | 小学校に入学する。                                    |
| 12歳       | 小学校を卒業し、中学校に入学する。                            |
| 15歳       | 中学校を卒業し、高校に入学する。                             |
| 18歳       | 高校を卒業し、大学に入学する。単身生活を開始する。                    |
| 20代       | 学生運動を経験する。                                   |
| 22歳       | 大学を中退し、首都圏に転居する。<br>アルバイトで生計を立てる。            |
| 26歳       | 大学のあつた地方都市に転居する。                             |
| 30歳       | 再び首都圏に転居する。<br>母が亡くなる。実家に戻る。                 |
| 32歳       | 現在の居住地に転居する。就職する。                            |
| 41歳       | 退職する。LGBTQ+の性感染症に関する支援活動とアルバイトで生計を立てる。       |
| 70代<br>現在 | 一人暮らしで、アルバイトで生計を立てる。LGBTQ+の性感染症に関する支援活動を辞める。 |

表4-3-2 Cのナラティブのシーケンス

| 本論での<br>語りの順 | 内容的にひとつながりのエピソード | 語られた順 | 語られた<br>量(%) | 鍵になる言葉                   |
|--------------|------------------|-------|--------------|--------------------------|
| 1            | ゲイだと分かる          | 1     | 28           | 小説, 経験                   |
| 2            | 『アウトサイダー』に生きる    | 2     | 39           | アウトロー, アウトサイダー, 学生運動, 小説 |
| 3            | エイズパニックを生きる      | 3     | 14           | エイズ, ボランティア, 小説          |
| 4            | 高齢者である           | 4     | 19           | 高齢者, 首都圏, 小説             |

ソードは4つ得られ、ほとんど時系列通りに語った。語られた量で最も多かったのは、『アウトサイダー』に生きる」ナラティブで39%であった。表4-3-3～表4-3-6には、インタビューの逐語をできる限り示し、Cのそのままの言葉とIntとのやりとりが確認できるようにした。さらには、表からインタビューの流れが分かるよう、太字斜体で直前までの語りの要約を示した。以降、第3節と同じく、Cの言葉は『』、Intの言葉は◇、言い換えられた言葉や補足した言葉は()、逐語の省略は…で示す。

#### (1) “ゲイだと分かる” ナラティブ (表4-3-3)

Cの場合、ゲイと自認をしたのは大学生の頃であった。中学、高校時は、同性と過ごすことへの『ワクワク』や、『友情』への『憧れ』はあったが、同性愛という言葉や、同性との性接触をすることと結びついてはいなかった(語り1)。大学に入って、『三島由紀夫』や『大江健三郎』などの同性愛が描写される小説に出会って、『頭でっかち』に『自分がそう(ゲイ)だと一応わかった』。Cは自分がゲイであると分かると、『(同性との性接触や恋愛を)経験しなきゃ』と思い、ゲイの集まる映画館を見つけ、実際にセックスをした。その経験はCにとって『ガックリくる』ものであった。今までの同性との『友情』とは異なり、恋愛やセックスが加わる関係性は『別の世界』のもので、どのように他のゲイの人と関係を作っていくべきか、分からなかったためであった。

このナラティブでは、ゲイであると自認をし、葛藤するエピソードが語られた。セクシュアルアイデンティティ発達に関する研究で従来述べられてきた言及とほとんど一致する。同性愛である可能性に出会い、コミュニティに関与するが、異性愛中心主義社会とは異なる性的接触を含んだ関係性に混乱、葛藤を起こすことはこれまでも述べられてきた(Cass, 1979; 高藤・岡本, 2019)。また、同性愛が描写された小説に出会えたことが自認のきっかけになっていた。小説などでさまざまなセクシュアリティや他の当事者に触れる機会が、セクシュアルアイデンティティ発達過程の経験でみられること、それが有益であることも述べられてきている(Cass, 1979; 葛西, 2014; Matthews, 2007)。LGBであることの強みに関する語りではなかったが、当事者理解や支援で従来述べられてきた言及を具体的に

表4-3-3 “ゲイだと分かる”ナラティブ

語 **最初の語りであった。教示に沿って話された。**

り Int: Cさんはゲイであることについてどのように思っていますか。ご自由に、ゆっくりとお話し  
1 ください。

C: 野球で言ったら、メジャーに対するマイナー、マイナーリーグ。ね、まあ、なん。まあヘテロとゲイっていうか、マイノリティの違いは、多数派と少数派。数的には多いか少ないかで少ない方に属している風に、まあセクシュアリティにおいて。という、理解ですかね。…たまたま人間のセクシュアリティがちょっと多数派と少数派っていう具合であって、まあそのような捉え方で。だから質より量の違い。

Int: 質より量の違い。

C: …普段の生活は普段のセクシュアリティはそんなに意識しないけど、まあ、少数派であるっていうのはまあ、ちっちゃい頃から薄々は感じますよね。やっぱり本とか、いろいろなあの一、読んだりして、まあテレビでもドラマでも映画でもね、今までも映画から見たら、まああの少数派的な、扱いをされているわけで。どちらかっていうとアウトサイダーとして、虐げられているように描かれてますよね。悲劇性を帯びたようなイメージとして、あのそういう同性愛者っていうのがあることはあるんですよね。だからこう、どちらかっていうと頭でっかちな方で、実際の経験をする前にあの一、えーそういう頭でっかちな知識とか、そういうのが、先に入って来たんですよ、だから実際の行為をする前に。それまではだから自分その一セクシュアリティが、あの一なんかね、自分の中では解決してなかったの、んーまあ、モヤモヤとした感じだけだったんでね。だけど大学に入ってまあそういう書籍を読んだり、まあ文学でいえば例えば三島由紀夫の本を読み出したり、と大江健三郎のね、初期の小説なんかとかは結構多くあるんですよ。そういうのに影響をされたりしているうちに、頭の中では自分はそうだと一応わかったんですよ。でも実際の経験はその後に経験したんですね。…だからね、(中学高校の頃は)夢の中で出てくるシーンが、男性がよく出るシーンが比較的、まあどちらかってみたら多いわけですよ。だから夢精の時のイメージしかないわけですよ。自分が男性が好きなんだっていうのはね。あと、まあ、中学高校の頃は、まあ、女性の友達もいるけど、心がワクワクするのは男友達の方が、で女性と仲良くしているのは、なんとなくね、アリバイづくりみたいな、気がしないでもなかったですね。だから、友情の方が、すごくこう、憧れがあって、でもそれはその一全然セックスっていうのは結びついてないんですよ。

らわすエピソードであったと考えられる。

## (2) “『アウトサイダー』に生きる” ナラティブ (表 4-3-4)

Cは、大学時代には『普通』に生きる思いはなくなり、『アウトロー』、『アウトサイダー』に生きる決意をした(語り 1)。その決意の背景には、1つの時代的な出来事と、1つの逸話があった。まず、その頃の『学生運動』という出来事である。『変わった生き方』をしようとするのが流行し、その流行に則っても就職できる人がいることを知ったことが一つの支えとなった。2つ目に小説家『ジャンジュネ』の生き方に関する逸話である。監獄生活や体を売るなどの生活をしながら、小説を書く姿は、同じく小説家(後述)を志し、ゲイであるCに、『底辺にロマンあり』と思わせた。『ゲイとして生きる』ということはCにとってまさしく『アウトサイダー』に生きることであった。実際、『アウトロー』、『アウトサ

表4-3-3 (続き) "ゲイだと分かる"ナラティブ

語 表4-3-3語り1の後の語りであった。時系列でそのままCが続けて語った。

り C:でもだから、やっぱ、経験しなきゃとか、思いましたよね、そうだったらね。思いを遂げな  
2 きゃってというのはやっぱ、一回経験しなきゃってことには、ね。それもまあ映画館とかがあるん  
ですよね。(大学のあった地方都市)にね、昔。まあ今は名画座になってるけど、最初の経験し  
たんです。映画館で、誘われて、その一旅館に行くよね。まあ旅館じゃないホテルか、普通の。  
…まあ大抵そんなもんですよね。反動が来ますよねまあ次から行けばいいんだけど、例えばその  
人との付き合いも、ま、その人がね、あれー、ワンステップって言ってからね、もう一人、あ  
の、食べちゃったらすぐ次いっちゃうタイプだったからね。要するに付き合いがほら、交際を続  
けるようなタイプじゃなかったかもしれない。だから次にあった時には他の人を紹介しよう  
か?って、言われたわけですよ。自分の友達をね、同じゲイの、知り合いに。紹介するから付き  
合ってみない?言うてから。で、やっぱ自分としては、その人のことを好きになってるわけだけ  
から、

Int:あーなるほど、そういうことだったんですか。

C:ね、ガックリくるやないですか。

Int:うんうんうん。

C:でしばらく無意識にその人を後追いついてたわけですよ。最初の相手をね。タイプの的に好き  
な相手だったからほら。その人はもう、1回で十分と。まあ振られたようなもんですよね。

Int:恋愛して臆病になった、みたいな感じ?

C:恋愛っていうか、付き合いごとには臆病でしたよ、そりゃ。経験はしたけどね。こっちもほ  
ら、慣れてないわけですよ。高校までの友情みたいなのを、同性同士で勉強教えたり教えられた  
りで、お互いの家をね、行き来したりしての付き合いは、ずっと付き合える関係かもしれないけ  
ど、恋愛が、セックスが混じるようになったら、どういう風にして長く付き合えるかどうか、考え  
もしないその段階では、最初の頃はね、全然別の世界だと思っているから。

イダー』に生きることはCにポジティブな経験をもたらした。田舎の息苦しさからの解放  
や偽りなく生きていけること(語り2, 3)、カミングアウトをするかしないかの『ドキド  
キ感』の経験(語り4)、『不快なこと』は避け、『恋愛至上主義』に行動すること(語り5)  
を語った。ただし、家族に多くの金銭的な面でのサポートを受けてきたにもかかわらず、  
ゲイであることを理由に大学を辞めていた。『アウトサイダー』に生きていることの説明は  
インタビュー現在も健在の兄弟にできておらず、裏切っている気持ちにもなっていた(語  
り4)。

『アウトロー』、『アウトサイダー』という言葉で、自分の生き方や関連する経験をこの  
エピソードで語った。このナラティブは、性指向に基づく個別的経験について、特にLGB  
であることの強みに着目して明らかにするという本論の目的に有益な視点を与えてくれる。  
なぜなら、従来の規範に則って生きないことへの肯定的な評価や態度を語ったためである。  
Cは、田舎の息苦しさからの解放や偽りなく生きていけること、カミングアウトをするか  
しないかの『ドキドキ』しながら考えていること、『恋愛至上主義』に生きていることなど、  
従来のLGB研究でネガティブなものと考えられていたカミングアウトや、異性愛中心主義  
の規範、性規範に捉われることなく、文字通りアウトサイダーに生きることをポジティブ

表4-3-4 "『アウトサイダー』に生きる"ナラティブ

語 **表4-3-3語り2の後の語りであった。時系列で人生を話したCに、Intが気になったところまで**  
 り **戻って尋ねた。**

1 Int：（首都圏）はなんでいかれたんですか。

C：それはもうね、大学中退しちゃったからね。うん。僕は親には大学卒業したような嘘を言っ  
 てね。向こうに就職先が決まったみたいな感じでね。飛び出ていった。自分はもう、マイノリ  
 ティの世界、要するに、普通の、就職して、きちんとした会社に務めるっつー意識はもうなくな  
 っちゃったんですよ。とか自分はこういう世界に生きるしかないように、要するにね、みたい  
 ななんか。ヒロインじゃないけどさ、なんか。まあ劇的じゃないけど。なんか、アウトサイダー  
 みたいに生きる、

Int：アウトサイダー

C：あの頃はほら、学生運動の影響でね、今までの、常識的な生き方じゃなくて、やっぱ変わった  
 生き方をしようというのが、まあ流行だったわけ。東大闘争も経験して、日大闘争経験してで  
 も、ちゃんとしたところに就職したの、うまい人もいたよね。ジャンジュネって知ってる？フラ  
 ンスのね、評論っていうかあれを書いているんですよ。ずっと牢屋が長い、監獄にいる時間が。  
 色々、あのね、体売ったりして、男となんですけどね。で、文、詩を書いたり小説書いたり、あ  
 のいっぱい詠まれてるわけ。花のノートルダムとかね、泥棒日記とかね、有名な、フランス文学  
 とかがあるんですよ。だからああいうのもまた、チラッと読んだもんだからね、学生時代にね。  
 だからなんかその、底辺にロマンあり、じゃないけど、そういう風に、そっちの方も、できるん  
 だって、いうね、意識ができてきたんですよ。東京の喫茶店とかね、社員食堂とか、ああいうと  
 ころに、なんかね、そういうところで働いて、自分はゲイとして生きるみたいなね、あれはね、  
 持ってたんですよ。

語 **表4-3-4語り1の後の語りであった。Cが大学時代『家とは断絶してる気分だった』と言ったこと**  
 り **について、Intが尋ねた。**

2 Int：家とは、断絶してる気分だった、っていうのは、アウトローだったからですか。

C：そうね、気分がアウトローだったから。向こうは全然そんな、何も、知らないから。こっち  
 が何で、すね、世の中拗ねたような生き方してるか知らないわけでしょ、原因は。フフフ。言っ  
 てないから、今も、言っていないから。知らないんですよ、何もね。こっちは田舎で息苦しいか  
 ら、飛び出るわけですよ。

語 **表4-3-4語り2の後の語りであった。時系列で同窓会の話まで辿り着き、楽しげに話すCを見て、**  
 り **Intが尋ねた。**

3 Int：今の、生き方みたいなのに、満足されてる感じがあるん、

C：っていうかね、今は、別にあんま、誰とも干渉されないしね、一人で、ね、（現在の居住  
 地）で暮らしてるから、そんなに、幼馴染とは会うチャンスも滅多にもう今はないじゃないです  
 か、帰る以外はね。でもその、そういう友達に、カミングアウトするとどうなんだろうかと、と  
 かね、思わないでもないですよ、そりゃまあ親も亡くなったけど。兄弟たちにも。そりゃあね、  
 いつまでもあるみたいですよ、でもこれもう、ドキドキの方がかえって面白いのかな、って。  
 言ったらもうおしまいじゃないですかもう。もうそれで終わりですもん、ドキドキ感。

Int：ドキドキ感、ドキドキ感っていうか、

C：カミングアウト、

Int：機会は終わりですもんね。

C：うん。1回しかないもんね、ああいうのは。

語 **表4-3-4語り3の後の語りであった。カミングアウトについてCが続けて話した。**

4 C: 兄弟には、最後には言った方がいいのかな、って、やっぱり、なんで一応ほら、期待してたりするわけじゃないですか、兄弟はこう。末っ子だから、学資なんかもね、頑張ってくれたし。今二人いる兄は、高校までしか出てないんですよ。だから一番学資面では、相当助けてはもらったんですけど、それで裏切ってるわけですからね、卒業証書も、もらわず、ね。…そうですねあの頃はやっぱり勉強するっていう意欲がなくなってきましたもんね、自分そう(ゲイ)だと思ったら。僕たちの頃はね、勉強しても、管理職、上の方にはなれないって、要するに、ゲイであることがバレると、おそらく本能的にわかったのかもしれないですね、会社で、管理職にはなれないだろう、ってね。教師でね、子供達に教えるときに自分がゲイであったらね、やっぱりそれ、偽らなきゃいけないだろう、って意識はあったんですよ。だから、偽りなく生きようという意識から生まれたんでしょうね。そういうのは自分は耐えられないだろうと、そりゃ思ったんですよ。…あ、それがあれだね、そのアウトサイダーになる、あれなんですよ、いわゆる。説明が遅くなったけど。

Int: アウトサイダーに生きたいって思ってたのは、こう、学生運動の影響だとか、文学の影響だとかもあったけど、自分の心の中に偽らなきゃいけないっていうのが嫌だな、って思ってしまった瞬間もあったから。

C: そうそうそう、それが一番おっきいのもかもしれないですね。

語 **表4-3-4語り4の後の語りであった。時系列で人生を話したCに、Intが気になったところまで戻って尋ねた。**

5 Int: で、東京行かれた後に、戻ってきたのが(大学のあった地方都市)。 C: そうそう。

Int: それ、なんでだったって、言っていましたっけ。

C: あー戻ってきたのが? やっぱちょっとね、行き詰まりを感じたんでしょうねゲイライフを楽しめてないわけですよ。ほら、職も定まらないし。…その時にね、(大学のあった地方都市)で知り合った(のちに恋人となる人の)ところに転がり込んだんですよ。できれば(恋人の住まい)に、転がり込んで。恋人が、転勤になるんですよ。僕そこまでついていくわけなんです。 (大学のあった地方都市)に集中的に(ゲイコミュニティ)があったんですよ。そのゲイスナック、で知り合って。で(恋人の転勤先)に行って。そして夏は一緒にいて、秋頃に、飛び出たんですよ、僕。…僕は仕事も何もしてないわけですよ。ねえ、で小遣いももらえるわけでもないし。なんかやらないことにはね。そこでね、新聞に投稿、ちょこっとした投稿ですよ、普通にほら、あの一、読者の投稿欄に。ちょこっとだけお小遣いを稼いでね。あの、でちょっと電車賃の代わりにして、博多までしか電車賃稼げなかったって感じ。で、恋しちゃったんですよ。列車の中でね、タイプの子を見つけた。(笑)。ばったりあったんですよ、列車でね。話があって。で、向こうが就職が決まって、寮が決まったってことだから、ってことで、僕は、じゃあちょっと遊びに行く、ような感じで。ノンケなのにね向こうは。一緒に住まわせてもらって。そこでね、今度は仕事を探して。今度はね、警備の仕事だった、本当ガードマンですよ。ガードマンの仕事を始めたりしてね。部屋も探し、一応ね、彼がそれになったんでしょ、保証人にもなってくれてね。うん。で、部屋を探すには、保証人がいるじゃないですか。一応、まあ独立というかそこでね、別のアパートで生活するようになって。

Int: …なんか恋愛に動かされてる感。

C: そう、恋愛至上主義じゃんと思うんですよ。なんか良い人がいればほら、長く付き合いた

に評価していた。当事者支援活動に関する強みにではないが、強みに着目するという意味では、なぜこのような経験に至ったのか考察をする意義は大きいと考えられる。一方で、『裏切っている』というネガティブな経験も孕んでいた。これは、第2章で取り上げた「期待に応えられない」の具体的様相を示していた。そのため以降は、『アウトサイダー』に生きることに至った一つの背景と考えられる 1) 『学生運動』の時代を生きることと、2) 「期待に応えられない」の具体的様相についてまとめる。

### 1) 『学生運動』の時代を生きること

多くはポジティブな経験をしてきたこの『アウトロー』、『アウトサイダー』なCの人生は、Vaughan et al. (2014)の述べる「誠実性」の具体的な語りと考えられる。誠実性とは、一般的なカミングアウト観や家族観の認識を見直して、独自の人生の選択を発見し、その選択を採用して生きることを指す (Vaughan et al., 2014)。Riggle & Rostosky (2012)の「新しいルールへの創造への自由さ」にも類似する語りであったと考えられる。一方で、創造性を取り扱った研究は、Allen & Demo (1995)の、異性愛カップルに限らないレズビアン、ゲイカップルなどでの新たな家族観を創造することの意義を主張した研究以外にほとんど見当たらないとも言われている (Vaughan et al., 2014)。例えば、これまで心理的課題と捉えられてきたカミングアウトについて、Cが『ドキドキ感』として肯定的に語ったことは、LGBの生き方に新たな価値観を提供しているように考えられる。

このように生きた背景には、『学生運動』の時代を生きた影響が大きいと考えられる。まず、『ジャンジュネ』の小説の影響について、これは(1)“ゲイだとわかる”ナラティブでも指摘したように、他の当事者に本の中で出会うことの影響の考察に共通するだろう。もう一つ、『学生運動』の影響もあった。時代背景の影響が窺える。『学生運動』とは、1960年代頃に日本で盛んになった若者の抗議活動であり、多元的な考えが同時に存在していた (小杉, 2015)。『変わった生き方をしようというのがまあ流行』であったというCの言葉や、『ジャンジュネ』の本に『ロマン』を感じていたことから、『学生運動』という事象に限らず、さまざまな考え方や経験が受け入れられていた時代であったといえるだろう。ちなみに、1960年代の学生運動は複数国で盛んであったが (小杉, 2015)、少なくとも学生運動が盛んでなかった国と比較すれば、日本で同じ時代に大学生として生きたからこそ、多元的な考え方に触れることができ、独自の生き方を創造していったと考えられる。

### 2) 「期待に応えられない」の具体的様相

ただし、『アウトサイダー』で生きることは、兄弟の期待に応えられず、『裏切っている』と捉える経験にもなっていた。こちらは第2章の他者の期待や言動に配慮し、かつ、謙る経験、その中でも、他者の期待を実際に認識していたため、「期待に応えられない」グループの語りに通じる。具体的に兄弟からどのような期待を持たれていたか示せた点は意義といえるだろう。やはり、家族への孝行が行動を規定するという点で、Fukuyama & Ferguson (2000)の言及と一致し、期待に応えられないと思う気持ちには、本邦の文化・歴史的背景が直接的に関係あると考えられる。Cはさらに、その時の感情を『裏切っている』気持ち

と具体的に語った。性指向を罪や自己責任と捉えさせてしまう、『裏切っている』と思わせてしまう土壌は、国内外に見られていたが、米国での捉え方は罪と捉える文化はかつてのもので、変容していることが指摘されている (Hammack, Meyers, & Windell, 2013 ; 平田, 2014b)。すなわち、Cのこの語りから、1) [期待に応えられない] ことは、本邦の文化・歴史的背景と直接関係のある経験である可能性があることと、2) 『裏切っている』という罪や自己責任の意識を生成することがあること、さらには、3) 本邦においては未だ罪や自己責任といった捉え方が見られることの3つが示された。

### (3) “エイズパニックを生きる” ナラティブ (表4-3-5)

『アウトロー』、『アウトサイダー』に生きることのできなかつた時代として、Cは『エイズパニック』のことを語った。同性愛とエイズが結びついて捉えられている社会に (語り1), 『もうこれでおしまい』と思っていた (語り2)。ただ、『人間と、付き合いたい』と思う気持ちをなくすことはできなかつた。そこでCは『セルフヘルプの意味で』, LGBTQ+の性感染症の電話相談と、性感染症に限らない電話相談の『ボランティア』に参加した。当事者支援活動は、Cに複数の経験をもたらした。まず、同じ同性愛経験があり、小説家の『福島次郎さん』との関係を作れたことだった (語り1)。Cの志に近い相手と、自分の同性愛、性感染症に関する知識や情報を通して関わっていたが、結局Cは『単なるファン』でしかなく、『同じ土俵に立てない』ことに『苦しく』なり、連絡を絶つことになった。次に、『若い人』の相談を受けたことであつた (語り3)。C自身の若いころを振り返り、『将来、小説に役立てたい』という思いから、様々な性的経験を断らずにきたことを話し、HIV、エイズにならなかつたことを『不幸中の幸いだった』と話した。最後に、様々な相談相手や、同じ立場の相談員と出会つたことであつた (語り4)。C自身は陽性者ではないことや、『徹底された』支援活動を行う者、当事者支援活動に関連する専門職ではないことで、『相談相手になれない』、『自信がなかつた』と話した。それを理由に当事者支援活動を辞めていた。

このエピソードでは、当事者支援活動のことが語られた。Cのいう、『エイズのボランティア』、『セクマイ (支援) の方』である。エイズと結びついて同性愛が捉えられ、内在化された同性愛嫌悪 (Shidlo, 1994 ; Mohr & Kendra, 2011) やスティグマ (Ross & Roser, 1994) を経験していたCは、当事者支援活動に携わることで『セルフヘルプ』をしようとしたが、実際には上手くいかず、辞めていた。当事者支援活動を行うことを強みとして説明した先行研究のようにはならず (Riggle et al., 2014 ; Vaughan et al., 2014), Bとも異なる語りであつたように思われる。当事者支援活動を始めたことに何が関係しているのか、なぜ、これまで説明されていたような強みとなり得なかつたのか、理解を深めることは重要であるだろう。具体的には、1) 『エイズパニック』の時代を生きたこと、2) 『セルフヘルプ』のみを求めたことの2点があげられ、それらの影響を受け、Cにとって3) 自分を支えられない当事者支援活動になつていた。以降、その3点に着目し考察をまとめる。



表4-3-5 “エイズパニックを生きる”ナラティブ

語 **表4-3-4語り5の後の語りであった。Cが思い出したように話を始めた。**

り C: ねえ。そうねえ。ちょうど、あれですわ。僕は後年っていうか、ほらエイズのボラ  
1 ンティア始めた頃、前後して、福島次郎さんっていう人、ほら、一応本の中に知って、  
三島由紀夫の愛人って言われた人で。でも小説はね、一応芥川賞候補にも一つなったん  
ですよね。だからその福島次郎さんと、手紙で、最初はやりとりをしたりして。…そう  
そうそう、あれですよ。エイズのボランティアを始めたということで。もう、同性愛  
と、エイズっていうのが結びついてたでしょ？ 当時は。あの頃一番それでほら、一般の  
ボランティアも盛り上がってたんですよ。その関係で、連絡とろうとしたんだと思う。  
それから何年、しばらく電話だけで話したりして、そしたら、あの人がその小説の、発  
表しだして。芥川賞準候補に選ばれて一躍脚光を浴びて。で色々僕も資料送ったりね。  
しばらくそれをずっと続けてたんだけど、現役作家との付き合いって難しいよね。その  
方がどんどん売れっ子になってって、原稿を書くのに忙しくなるやないですか。そした  
ら今度は僕どんどん書くことがなくなるんだよね。単なるあれいいですね、これいいで  
すね、とかさ。いうのがきつくなってくる。いいこと書かなくちゃいけない、伝えなく  
ちゃいけないという風になると、苦しくなってきた。こっちは小説書くわけでも発表し  
ているわけでもないから、やっぱり同じ土俵に立てないわけだから。単なるファンだから  
ファンにすぎないから、書くことがどんどんなくなって、ちょっとしばらくね、つきあ  
いが途絶えてて。

語 **表4-3-5語り1の後の語りであった。Cが『ボランティアが盛り上がってた』と話したこ  
り についてIntが尋ねた。**

2 Int: っていうか、エイズボランティアを始めたのは流行だったから始めたみたいな感じ  
だったんですか。

C: いやいやいやいや、それはね、言わなくちゃいけないね。ちょうど40、厄年の頃。  
41。その頃にね、恐怖を感じたんですよ、感染したんじゃないかとか。あの頃エイズパ  
ニックでちょうど騒がれ始めた頃だから。もうこれでおしまいだと思った。まあね、あ  
あ騒がれ出したからでしょ。まあこれでしばらく身を慎まないとやばってね、もう  
ちょっとしばらくおとなしくしておこう、って思って猫を飼い始めたんですよ。…それ  
でね、もうエイズボランティアの方にいったのかな。要するにほら、もうそれがもう、  
切っても切り離せないようなものだから。エイズの、恐怖を打ち勝たないことには僕は  
ほら、付き合えないわけですよ、誰にもね。怖くて。そりゃ人間と、付き合いたいと思  
うときはエイズが頭にあるからもう。なんか、セルフヘルプの意味でやっぱり、もうそ  
のエイズの活動と、関わろうとおもったんですよ。

### 1) 『エイズパニック』の時代を生きること

このエピソードには、『エイズパニック』という時代背景の影響が再び登場する。エイズ  
に関連する死、事故、事件などのことであり、現在もLGBTQ+のHIV感染の支援が求められ  
ているが(小谷野, 2014)、同性愛者とエイズが一体して問題視されるCの生きた時代(広

表4-3-5 (続き) "エイズパニックを生きる"ナラティブ

語 **表4-3-5語り2の後の語りであった。Cが続けてHIV, エイズパニックのことを話した。**

リ C: だからだからね, 考えたらね, あの頃HIVが流行ってなくてね, 蔓延してなくてよ

3 かったと思うんですよ, あの頃, 蔓延してたら, 僕がほら。なんでその始めの頃が怖い  
 かっていうと, やっぱ思い切って飛び込もうとするじゃないですか。自分を開放しなく  
 ちゃいけないというか。そのときはね, なんでもいいんですよ。とりあえず経験が先。  
 経験しなくちゃいけないんだ, って思うんですよね。だからどんな人でもね, 断っちゃ  
 いけないとかね, 思うんですよ, なんかねそういう意識が働いてね。だからこちらから  
 選んでは, それはね, それはなんか, その自分の例えばあの, 色気ってというのがあった  
 のかもしれない。小説に, 将来小説に役立てたい, っていう。一応小説家志望ではあつ  
 たんですよ。若い頃ね。だから小説家, 小説書くのにね, 役立つかなって思ってなんでも  
 するんです。経験だと。だからどんな人でも断っちゃいけない。付き合おう言われたら  
 大抵若い頃はね, あんまり断らなかつた。よほどの人以外はね。映画館で例えばこ  
 う, 最初にこう, 触ってくるでしょ。モーションかけてくる人で, まあこう, みた感じ  
 でそんなにね, そんなに極端に怖いとかさ, 気持ち悪いとかさ, 思わない限り大抵ね,  
 ついて行ったりしてましたからね。断ってはいけないか思ったらね。病気もらうはず  
 ですよ。だからHIVにならかつた時って本当にね, もう, 幸い, 不幸中の幸いだった。  
 ありえるからね, 若い人でも。今多いじゃないですか, 二十代前半ですかね。電話相談  
 しながらでもね, 若い子に結構。心配しますもんね, 電話があつたりして。

語 **表4-3-5語り2の後の語りであった。Cが続けて性感染症に関するボランティアのことを**  
**話した。**

4 C: だけど, Int: はい, どうぞ。

C: だけどさっき言ったようになんかなんていうんだろうね。なんかあんまりその,  
 キャリアが, ないから, 経験がないでしょ, そんなに。もうエイズのボランティアとし  
 てだけど, あの, 陽性者の人と, あの, 話はそんなに僕は, うまく話せないのかな, と  
 か, 相談相手にはなれないのかな, とか, 思ったりしますよね。その例えば, 陽性でも  
 ないわけでしょ。陽性でもないし, そんなにしょっちゅうハッテン場に, やっぱり, 高  
 年ですよ, 要するに。信ぴょう性のあるアドバイスは, できない, ですよ。ある程度  
 のその知識であれ, 得られたあれはほら, 言えるけどね。だから, もうあれですよ徹底  
 された (LGBTQ+支援の) 活動したり, リーダーをされてる, あの人たちに比べると僕  
 なんか本当 (相談相手にはなれない)。専門的な例えば保健師, さんとか, まあ専門的  
 なほら, あの医療の従事者の方はそれ相応の知識があるでしょ。僕なんか全然専門職  
 じゃないし。全然でしょ。考えたら。自分の仕事みたいな感じだから, おこがましいで  
 しょ。

Int: おこがましい。どうなんだろう,

C: だから, だからだから, その一, あれもちょこっと僕参加したけど。(エイズに限  
 定しない) セクマイ (支援) の方。だから考えたら, 僕もそんなに真剣に, どこまで考  
 えてたのかな, って思ってね。例えばトランスジェンダーの人のをそんなに, 勉強して  
 ないしと思いつつ, 自信がなかつたんですけど。

瀬, 1993) は, とりわけ『恋愛至上主義』のCの人生を否定するような経験であったに違いない。『エイズパニック』によって, これまでの『アウトサイダー』な生き方を一変させなければならなくなり, 後述の通り, 当事者支援活動を始める背景になったと考えられる。

## 2) 『セルフヘルプ』のみを求めたこと

『エイズパニック』の時代を生きる中で, 『アウトサイダー』な生き方を一変させなければならなくなったCは, 『エイズ』と結びついたゲイであることに対するネガティブな評価を『セルフヘルプ』する一つ的手段として, 当事者支援に携わった。この『セルフヘルプ』こそが, 当事者支援活動を始めた大きな背景であったと考えられる。自分も支えられるために当事者支援活動をするのは, 第2章での〈状況への対処〉や, 第3章でBが自分自身の居場所を作ることと類似している。Bの場合は, 心理的な安全を作り出そうとする「自己コントロール」(Vaughan et al., 2012) としての目的が強かったように思われる。

Cの語りの特徴は, 『セルフヘルプ』のみを当事者支援活動に求めたことである。第2章や第3章のBでは, 【LGBであることに対する落ち着いた態度】を示すなど, ある程度同性愛への受容や, 対外的活動の意識が同時にあった上で, 〈状況への対処〉行動, 対内的活動として, 当事者支援活動に居場所を作るなどをしていった。しかし, Cはそれらの受容的態度や対外的活動の意識はほとんどなく, 自分の『セルフヘルプ』を中心の目的としたことを語った。第2章や齊藤(2019), Riggle & Rostosky(2012)で示されたような, LGBであることによるネガティブな経験を受容する経験を経て, 誰かを支援するという強みを獲得するプロセスや, 対外的活動の意識がない。第2章でいう, 〈状況への対処〉行動それ自体が, 当事者支援活動であったCのこの語りは, 一つ, 本章の新規性のある結果であったと考えられる。

## 3) 他者も自分も支えられなかった当事者支援 (図4-2)

そのように自分を支える目的のみで当事者支援活動を行う場合, 当事者支援活動に直結していた「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や, 「社会正義」(Riggle et al., 2012) という強みや, 「自己コントロール」(Vaughan et al., 2012) は実感されていなかった。

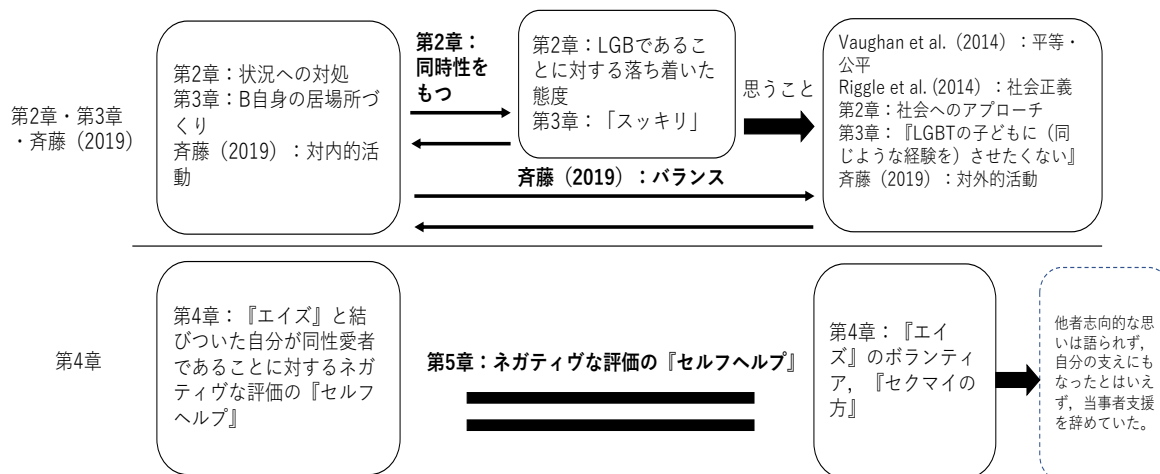


図4-2 第2章, 第3章, 齊藤(2019)と第4章の結果と考察の比較

自分が HIV, エイズにならなかったことを『不幸中の幸い』と表現した以外、小説家でない自分に『苦しく』なり、また、自身が積極的に支援を行っていないことや当事者支援に関連する専門職でないことを『おこがましい』と思うなど、ポジティブとはいえない言葉で豊富に語り、それらを理由に活動を辞めていた点からそのことが言える。性感染症の問題に限らず、トランスジェンダーの当事者への支援にも自信のなさを語っていたことから、LGBTQ+の中でも B とは異なるさまざまな人生があることを知り、自身の当事者支援活動に、上手くいかなさを感じていたように考えられる。元々の目的であった、『セルフヘルプ』としての機能を果たしたかも語らず、分からないままだった。この、当事者支援活動を行っても他者も自分も支えられた実感がなかったことも、先行研究の則った理解は難しく、新規性の語りと考えられる。C の場合は特に、『アウトサイダー』な C のこれまでのポジティブに捉えていた生き方を支える経験にならなかったのだろう。すなわち、C の語りから新たに言えることは、1) 他者を支援しようという目的はほとんどなく、〈状況への対処〉のみを目的として当事者支援活動を始めることがあるが、2) そのような目的で当事者支援活動を行う場合、先行研究で説明された当事者支援活動の強みとしての機能は実感されず、自分自身も支えられていない可能性がある。

#### (4) “高齢者である” ナラティブ (表 4-3-6)

C は、高齢者である〈今〉のことも語ってくれた。『終活しなくちゃならない』一方で、母親の非嫡出子の『アウトサイダー』な生き方を例にあげ、C 自身も『無縁仏』でも構わないから、首都圏の生活にもう一度戻って、『アウトサイダー』な生き方がしたいことを話した (語り 1)。人生を振り返り、『足跡を辿りたい』気持ちがあることも語った (語り 2)。『福島次郎』との関係がうまくいかなかったことを引き合いにだし、『引きずっている』経験も多いが、人と比べて違った人生だったとは思っているため、自分の人生を『もう一回辿って』どんな人生であったか確かめたいと言った。

高齢期の葛藤の語りであった。自分の『アウトサイダー』な生き方への満足感と、一方で『福島次郎』との関係性などのうまくいかなかった経験の両方が語られ、どんな人生であったか確かめようとする態度は、Erikson (1959/2011) の高齢期の心理的危機の言及の具体的な例であり、高齢期に再度性指向について葛藤する可能性を述べた国外の研究 (DeLamater & Sill, 2005) とも一致しているように考えられる。どちらかといえば、『アウトサイダー』な生き方を経験してみたいことを語り、自分のこれまでのポジティブであった人生を活かして過ごそうとしていたように思われる。

#### (5) インタビューにおける C と Int の相互性

方法や逐語からインタビューにおける C と Int の相互性を確認し、如何にしてこのナラティブが得られたか、考察する。多くの考察が可能だが、本研究で着目した当事者支援活動を行うに至った背景の語り that 得られたことに着目すると、1) 筆者が C の高

表4-3-6 “高齢者である”ナラティブ

- 
- 語 **表4-3-5語り3の後の語りであった。終了の時間に近づいたため、Intから尋ねた。**
- り Int：なんか今どんなことを自分に対して思っていたりとかします？
- 1 C：あー，そろそろ終活しなくちゃいけない，断捨離はしなくちゃいけない，本当はしなくちゃいけないのね。もう，あと10年かもしれないんですよ。でしょ，だからね，僕の一，兄貴の母親の，認知されない非嫡出子ですね。その人がね，いるんですよ。母親の最初の子どもがね。最後は山谷で死んじゃったんですよ。ドヤ街で。
- Int：もう一人いたってことですか。
- C：うん。その人の，生きてきたあり方が，母親の，弟の子どもとして育てられたらしいんですよ。でもそこをもう，飛び出して，まああちこち転々としたんしょうね，で最後は山谷で暮らしてて，病院で亡くなって，その時は僕も，兄とか姉が，長男を除いて，会いにいったらしいんですけどね。まあそういうちょっと，本当のアウトサイダーっていうか，でしょ。その人のね，自分をこうオーバーラップさせるようなね，僕はもうなんか最後はね，一人だし，（首都圏）にもう一回行って，あの野垂れ死にじゃないけど，最後は映画館でちょっと，触ってからね，あと殴られて，ボコボコにやられて，死んじゃうとかさ。老人の妄想（笑う），違うか。最後もう一回ね，（首都圏）にいったみたいって意識はあるんですよ。無縁仏でもいいじゃないですか，っていうあれが，根底にありますね。
- Int：最後までアウトサイダーでいたいみたいな。
- C：あー，いたいみたいなね。
- 

- 語 **表4-3-6語り1の後の語りであった。続けてCが語った。**
- り C：（福島次郎のいた町）にもまた行ってみたいな，って思うんですよ，次郎さんのと
- 2 こ尋ねてね。兄弟の方の遺族が，もう残ってるか残ってないか，そういうのはわからないですけどね。なんか，なんぼか引きずっているわけですよ。一回なんか，ああいう足跡を辿りたいというか，自分のね，もう一回辿ってみたいってのは，みんな意識にはあるみたいですね，高齢者になると，自分の人生のひとまとめっていうかさ，区切りとして。だから，うん，なんがあるかね。これが僕が現役の例えば，若い人がくる，ゲイスナック，にね，最近もよったりしたりしてさ。ああいう，活発にね，活動してる人，付き合えばまた違うかもしれないし，これが，パートナーがいて，また一緒に生活して，いたとしたらね，また意識が違うと思うんですよ。
- 

年齢であることにも関心を寄せていた点，2) インタビューの構造，の影響は大きいと考えられる。以下，この2点についてまとめる。

#### 1) 筆者がCの高齢期であることにも関心を寄せていた点

まず，筆者の関心である。性指向だけでなく，Cが高齢期であったことにも漠然と関心をもってインタビューをしたため，『学生運動』や『エイズパニック』などの時代背景のことが中心的に語られ，取り上げられたと考えられる。特に性指向とは直接的関係を持たな

かった『学生運動』ことが出てきた“『アウトサイダー』を生きる”語りは最も豊富に語られた。インタビュー全体にも影響を与えたと考えられる。

## 2) インタビューの構造

次に、構造度の低い面接で、かつCとIntの面会はまだ2回目であった点である。Cの人生についてほとんど知らないIntに伝わるように、Cは積極的に、主体的に話してくれた。さまざまな経験を主体的に話すことで、性指向ばかりが中心的な話題とならなかったため、先行研究に捉われず、『学生運動』や、『ジャンジュネ』、『福島次郎』などの『小説』の内容を話すことにつながった。『エイズ』と結びついた自分がゲイであることに対するネガティブな評価を『セルフヘルプ』するために当事者支援活動を始めたこと、当事者支援活動が従来述べられていた強みとして機能しなかった語りを得たことも、Cがゲイであること以外を語らなければ得られなかったと考えられる。性指向以外のこともCが積極的に、主体的に話そうとしてくれたことは、性指向以外のことも語られた“『アウトサイダー』に生きる”ナラティブが語られた量として最も多かったことや、『ジャンジュネ』や『福島次郎』などの『小説』の内容を、鍵になる言葉になるほど語ったことから示すことができる。Intのやりとりを見ても、例えば表3-4-3の語り2で〈恋愛して臆病になった、みたいな感じ?〉と尋ねたことや、表3-4-4の語り5で〈で、東京いかれた後に、戻ってきたのが(大学のあった地方都市)〉と話を再び戻したことなど、多くがCの語った内容の確認を行う機会となっていた(表3-4-3語り2;表3-4-4語り3,語り4,語り5;表3-4-5語り2;表3-4-6語り1)。このことから、Intが自分の意見を言うなどして遮ることはせず、Cの積極性に任せてインタビューを行っていたことが窺える。もしIntが、当事者支援活動に他者志向的な目的はあったかや、当時は他者を支援できているという強みを実感できていたのかなど、積極的にCに質問をしていけば、今回とは異なるナラティブが得られていたかもしれない。

## 第4節 Cのナラティブのまとめ

### —他者も自分も支えられなかった当事者支援活動—

本章は、1人のLGBのインタビュー(C)を対象ナラティブとしながら、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動をすることに着目しながら明らかにすることを目的とした。第2章で、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景が明らかになることが、研究の展望の一つになったことが目的を設定した理由であった。また、第2章、第3章を踏まえ、年代や当事者支援活動に寄せる思いに着目して対象ナラティブのサンプリングを行った。Cのナラティブから、主に1)『学生運動』、『エイズパニック』の時代を生きたと、2)当事者支援活動に『セルフヘルプ』のみを求めたことの、2つの特徴的な考察が得られた。結果、Cにとって当事者支援活動は先行研究の述べるような強みとなっておらず、3)他者も自分も支えられなかった当事者支援活動になった。この3点に沿って本章をまとめる。

#### (1)『学生運動』、『エイズパニック』の時代を生きること

Cが当事者支援活動を始めたことには時代背景の影響が大きかった。まず、『学生運動』の時代を生きるとは、当事者支援活動に直接関係はしていないが、重要な位置づけにあり、従来のLGB研究でネガティブなものと考えられていたカミングアウトや、異性愛中心主義の規範、性規範に捉われることなく、『アウトサイダー』に、ポジティブに生きることにつながった。多元的な考えが同時に存在していた『学生運動』の時代(小杉, 2015)を大学生として生きたことは、Cの人生に多くのポジティブな影響を与えたと考えられた。

次に、『エイズパニック』の時代を生きることがあった。エイズに関連する死、事故、事件などのことであり、同性愛者とエイズが一体して問題視される時代(広瀬, 1993)は、『アウトサイダー』なCの生き方を否定するような経験であったと捉えられた。これまでの生き方を一変させなければならなくなり、後述の通り、『セルフヘルプ』として当事者支援活動を始める背景の一つとなったと考えられた。

#### (2)当事者支援活動に『セルフヘルプ』のみを求めたこと

『エイズパニック』の時代を生きることの流れの中で、『アウトサイダー』な生き方を一変させなければならなくなったCは、一つ的手段として、『エイズ』と結びついたゲイであることに対するネガティブな評価を『セルフヘルプ』するために、当事者支援に携わった。この『セルフヘルプ』こそが、当事者支援活動を始めた大きな背景であったと考えられた。

Cの語りの特徴は、『セルフヘルプ』のみを当事者支援活動に求め、ゲイであることを受容がなかったことであった。第2章や第3章のBは、自身が【LGBであることに対する落ち着いた態度】など、ある程度同性愛への受容があることと、〈状況への対処〉行動が同時

にあった上で、「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2014) という強みとしての意味をもって当事者支援活動が行われていたが、第4章のCは、この同性愛への受容がほとんどなく、自分の『セルフヘルプ』、第2章でいう〈状況への対処〉のみを目的としていた。

### (3) 他者も自分も支えられなかった当事者支援

Cのような、自己志向的な目的のみの当事者支援活動の場合、直結していた「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2012) という強みとしての意味や、「自己コントロール」(Vaughan et al., 2012) も実感されず、自分を結局支えられていなかった。Cの場合は特に、『アウトサイダー』なCのこれまでのポジティブに捉えていた生き方を支える経験にならなかったように考えられた。すなわち、Cの語りから新たに言えることは、1) 他者を支援しようという目的はほとんどなく、〈状況への対処〉のみを目的として当事者支援活動を始めることがあるが、2) そのような目的の当事者支援活動の場合、先行研究で説明された強みとしての機能は実感されず、自分自身も支えられていない可能性があった。

第2章の他の考察の視点に基づく語りも得られた。『アウトサイダー』に生きることを、兄弟の期待に応えられないことと捉える経験は、第2章でのLGBでないコミュニティの期待や言動に配慮し、かつ、謙っている、[期待に応えられない] グループの語りをより具体的にあらわした。やはり、家族への孝行が行動を規定するという点で、Fukuyama & Ferguson (2000) と一致し、期待に応えられないと思う気持ちには、本邦の文化・歴史的背景が直接的に関係あるように考えられた。Cはさらに、その時の感情を『裏切っている』気持ちと具体的に語った。すなわち、Cの語りから、1) [期待に応えられない] ことは、本邦の文化・歴史的背景と直接関連をもった経験である可能性があることと、2) 『裏切っている』という罪や自己責任の意識を生成することがあること、さらには、3) 本邦においては未だ罪や自己責任といった捉え方が見られることが示された。

最後に、これらのナラティブが如何にして得られたか、インタビュアーとインタビューの相互性に基づいて考察した。特に、1) 筆者がCの高齢期であることに関心を寄せていた点と、2) インタビューの構造から考察を深めた。

今後の研究としては、得られた観点から新たにインタビュー協力者を得ることが考えられよう。例えば、1) 思春期以前や中年期などの他の年代の当事者や、2) 他者を支える意識はあるが、自分を支えること意識は持たない当事者、などを一つの観点として理論的サンプリングを行うことができる。



## 第5章

### 一人のレズビアンの人ラティヴ

— 『回り回って』 自分も支えられるための当事者支援活動 —

## 第1節 問題と目的

LGB であることの強みに関する研究の多くが実証主義に基づく研究で、当事者の全体性を尊重した理解に迫れていなかったこと、それは第2章の一つの課題にもなったことは、第1章や、第3章、第4章でも述べた通りである。繰り返しになるが、本章でも同じような問題意識に則り、引き続き社会構成主義の研究手法の一つである個別性を重視したナラティブ研究を用いて、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動をすることに着目しながら明らかにすることを目的とする。当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景について、主に示していく。

ただし、第2章だけでなく、第3章、第4章を踏まえた上で、対象ナラティブの理論的サンプリングを行うことにする。具体的には、1) 年代、2) 当事者支援活動に寄せる思い、の観点から、第3章とは異なる研究対象者のナラティブを選択する。

### (1) 年代

年代は第2章の課題の一つであり、第4章のサンプリングの1つの観点となった。研究対象者の年代で20代が多かったことから、他の年代であれば、第2章ではみられなかった経験が捉えられる可能性がある。第2章に限らず、これまでのLGBを対象にした本邦での当事者理解に関する研究は、青年期～成人前期の研究が多い(枝川・辻河, 2011; 石丸, 2007b; 宮腰, 2013; 高藤・岡本, 2017, 2019; 横木, 2003)。そのような課題から、第4章では高齢期の当事者であったCのインタビューを対象ナラティブとしたが、やはり時代背景の影響を受けた語りを得られたことから、Cとは異なる時代に生まれ、人生を歩んでいる、思春期以前や中年期の当事者を取り上げることに積極的意義があると考えられる。

### (2) 当事者支援活動に寄せる思い

第3章から明らかになったことの一つは、当事者支援活動を行う背景に、自分も支えられるため、という目的があった点である。具体的に言えば、第3章で取り上げたBは、自分の性について理解が深まり、『スッキリ』とした気持ちになって、『LGBTの子どもに(同じような経験を)させたくない』と思ったことだけでなく、既存のLGBTQ+コミュニティでは居場所が得られず、自分自身で居場所を作ろうとしたことも、当事者支援活動を始める背景になっていた。第4章で取り上げたCも、『エイズ』と結びついたゲイであることに対するネガティブな評価を『セルフヘルプ』するため、という目的があり、自分が支えられるようとしていた。第2章でいう同時性をもつ可能性のある〈状況への対処〉や、斉藤(2019)でいう「対内的活動と対外的活動」の両方の目的がBの当事者支援活動の大きな背景になっていると、第3章では結論づけた。では、ここでいう同時性を当事者支援活動の文脈で語らない者や、「対内的活動と対外的活動のバランス」の意識はなく当事者支援活動を行っ

ている者は、強みとして行えているのか、もしくは行えていないのか、行えているのであれば、どういった背景がみられるのか、などの疑問が生じる。そのような疑問をもとに、第4章ではCのインタビューを対象ナラティブとした。第3章、第4章で得られた結果の比較は、図4-2に示した。Cの場合、自分を支える目的のみで当事者支援活動を始めた。しかしその場合、当事者支援活動は、先行研究で説明された強みとしては実感されておらず、自分自身もほとんど支えられないことが明らかになった。強みに関する先行研究とは異なる文脈で当事者支援活動を行っている者の存在と、その場合には当事者支援活動は強みとなっていない可能性があることを明らかにした点は、本研究の意義の一つと考えられる。

B以外にも、異なる形で〈状況への対処〉の同時性を当事者支援活動の文脈で語らない者や、「対外的活動と対内的活動のバランス」の意識はなく当事者支援活動を行っている者がいるかもしれない。例えば今度は、対外的活動の実感はあるが対内的活動の実感がない者などがあげられる。未だこの観点から新たな対象ナラティブを選択することが可能である。

## 本章の目的

1人のLGBのインタビューを対象ナラティブとしながら、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動に着目しながら明らかにする。また、研究対象者の一つの経験となり、研究の限界を考察するためにも、研究者と研究対象者の相互性にも着目し、語られ方を考察する。

## 第2節 方法

### 研究対象者

第2章の研究対象者のうち、Int が強く関心を持ったLGBに、改めてインタビューを依頼し、承諾を得て、より詳細に自身のセクシュアリティに基づく経験について尋ねた。第5章の研究対象者となったHは、50代レズビアンであった。第2章のインタビューのときに知人から紹介を受け、知り合った。第2章のインタビューが初めて面会したときで、一度偶然出会い挨拶をし、本インタビューは3度目の面会となった。

Int がHにインタビューを再度依頼した理由には、Hが当事者支援活動を行っており、中年期の当事者であったことがあげられた。第1章にて取り上げた本邦のLGBを対象にした研究は、多くが青年期～成人前期の年齢を対象にしており、また、本論でも、他に第4章で高齢期のLGBを対象にしたのみである。第3章、第4章と同様、どういった経験をしているのか、その一端を知るHへのインタビューは有益になると考えた。

### 対象ナラティブ

2019年2月に行った1回のインタビューの逐語を対象ナラティブとした。第4章の対象ナラティブとして選んだ積極的意義は、中年期であったことだけではない。当事者支援活動が自分のためにあるのか、他者のためにあるのか、その思いについて話すことがHのインタビューでは多く、後述するように様々な意味を語ったことが、一つのサンプリングの理由になった。当事者支援活動に寄せる思いで、BやCとは異なっていたため、対象ナラティブとする意義があると考えた。

第2章より詳細にインタビューができるよう、2時間を目安にインタビュー時間を設定し、1時間36分となった。インタビューは、当事者が自身のセクシュアリティについて自由に語ってもらえるよう「Hさんはレズビアンであることについてどのように思っていますか。ご自由に、ゆっくりとお話ください。」と最初のみ教示し、その後はIntの関心や研究対象者のそのとき話したいことなどに基づいて進める、構造度の低い手法であった。

### インタビュー実施場所

筆者と研究対象者で協議した後、決定した貸会議室にて実施した。

### インタビューアーの属性

Intは筆者が行った。Intは20代の臨床心理学、LGBTQ+の心理と支援について学ぶ大学院生で、自身もLGBであると自認していた。

## 分析方法

竹家(2008)に倣った分析を行った。竹家(2008)は「シーケンス分析(Flick, 1995/2002)」やRosenthal (1993)を基盤とし、研究者と研究対象者の相互性も考慮に入れた分析方法を示した。同じくLGBへのインタビューを行った枝川・辻河(2011)も採用しており、本章の研究にも適していると考えた。具体的には、以下の方法によってナラティブの再構成と経験の意味づけを行った。詳細は第3章に示した通りである。

- (1) 「語られたもの」に関する精読を行った。
- (2) 「語る行為」に関する精読を行った。
- (3) 各着眼点(「語りの種類」, 「鍵になる言葉」, 語られた量)を明確にした。
- (4) 年表を作成した。
- (5) 経験の意味づけを分析した。
- (6) ナラティブを再構成した。

## 倫理的配慮

研究対象者には、研究前に個人情報の取り扱いや自由意志に基づく研究協力の原則と、具体的な協力撤回などの手続きや研究開示の方法を説明し、同意を得た(資料3)。研究開示の具体的な手続きの一つとして、公表前に研究対象者に本論の内容について確認を依頼し、表現の修正などを行った。なお、本研究は九州大学大学院人間環境学研究院臨床心理学講座研究倫理委員会の承諾を得た後、実施した。

### 第3節 一人のレズビアン (H) のナラティブ

#### 1. Hの年表

ナラティブをもとに作成したHの年表を表3-5-1に示す。Hは地方都市に生まれ、現在まで同市で生活していた。高校から大学院まで進学し、高校教師となったが、27歳で辞め、再度大学院に入学した後、新聞記者になった。6年で新聞記者を辞め、その後は出版社に勤めた。出版社は約1年経て、フリーライターになった。50歳時にNPO法人の理事になり、LGBTQ+当事者支援団体を立ち上げ、『スタッフ』となった。Hは、ライターの仕事を続けながら、当事者支援活動も現在まで継続して行っていた。当事者支援活動の内容は、主に茶話会の開催、人権啓発活動、個別の相談であった。

#### 2. Hのナラティブ

Hのナラティブのシークエンスを可視化できるようにするため、緩やかな流れを表3-5-2に示した。実際には語り直しや繰り返しなどがあった。また、HとIntの相互性についても考察するため、語られた順、鍵になる言葉、語られた量も表3-5-2に示した。鍵になる言葉は、『社会人』、『仕事』、『活動』のようなHの仕事や当事者支援活動に関連する言葉が多かった。内容的にひとつながりのエピソードは10得られたが、主には(1)当事者支援活動を始めるまでの経験か、(2)当事者支援活動に関する経験に大別できた。本論の目的に沿ってできる限り分かりやすく示すため、Hのナラティブではこの2項目に沿って再構成した。語られた量で最も多かったのは、「教育現場で若者がしんどい思いをしていた」ナラティブで18%であった。表5-3-3、5-3-4には、インタビューの逐語をできる

表5-3-1 Hの年表

| 年齢  | ライフヒストリー                 |
|-----|--------------------------|
| 0歳  | H誕生                      |
| 18歳 | 高校卒業、大学に入学する。            |
| 22歳 | 大学卒業、大学院に入学する。           |
| 24歳 | 大学院修了、高校教師になる。           |
| 27歳 | 高校教師を辞める、大学院に再入学する。      |
| 28歳 | 大学院を辞め、新聞記者になる。          |
| 33歳 | 新聞記者を辞め、出版社で勤める。         |
| 33歳 | 出版社を勤務を経て、フリーライターになる。    |
| 50歳 | NPO法人の理事になる、当事者支援活動を始める。 |
| 50代 | フリーライター、当事者支援活動を継続して続ける。 |
| 現在  | 現在まで同じ地方都市に住む。           |

表5-3-2 Hのナラティブのシーケンス

| 本論での<br>語りの順 | 内容的にひとつつながりのエピソード    | 語られた順 | 語られた<br>量(%) | 鍵になる言葉                |
|--------------|----------------------|-------|--------------|-----------------------|
| 1            | 異性を好きにならなきゃと思っていた    | 7     | 10           | 高校, 同性, 揺れ動く          |
| 2            | 異性愛者のふりをしていた         | 4     | 8            | ふり, 職, 教師             |
| 3            | 仕事に一生懸命だった           | 2     | 7            | 社会人, 仕事, 一生懸命         |
| 4            | 色んな人が手を差し伸べてくれた      | 5     | 14           | 縁, 手を差し伸べる, 大切        |
| 5            | 当事者支援が”人生の宿題”になった    | 3     | 10           | 50歳, 仕事, セクシュアルマイノリティ |
| 6            | 当事者支援で同級生と再会した       | 6     | 8            | 友人, 高校, 縁             |
| 7            | 教育現場で若者がしんどい思いをしていた  | 8     | 18           | 活動, しんどい, 今           |
| 8            | 今の自分も”しんどい思い”をしていた   | 9     | 7            | 活動, 自分, しんどい          |
| 9            | レズビアンであることに肯定的である    | 1     | 2            | 肯定, 自分, 活動            |
| 10           | これからも当事者支援に向き合っていきたい | 10    | 15           | 向き合う, 自分, 活動          |

限り示し、Hのそのままの言葉とIntとのやりとりが確認できるようにした。さらには、表からインタビューの流れが分かるよう、太字斜体で直前までの語りの要約を示した。以降第3節、4節に同じく、Hの言葉は『』、Intの言葉は◇、言い換えられた言葉や補足した言葉は(), 逐語の省略は…で示す。

### (1) Hが当事者支援活動を始めるまでのナラティブ (表5-3-3)

Hは高校時代、同性に対する特別な感情を認識しながらも、それが何か分からず、『異性を好きにならなきゃ』と思っていた(語り1)。社会人になってからのHにはレズビアンである認識があり、パートナーもいたが、異性愛が当たり前の職場での会話、テレビ番組に、Hは『多数派のふり』をして過ごしていた(語り2)。また、Hにとってはレズビアンであることよりも仕事の方が重要であった。教員時代に『燃え尽き症候群のよう』になったことや、新聞記者時代に権力闘争に巻き込まれたこと、フリーランスのライターになったことなどから、まずは仕事で『成功』することに『一生懸命』で、Hはレズビアンであることについてあまり『考えてこなかった』(語り3)。仕事を中心にあったとき、Hは様々な人に助けられてきた。言葉をかけてくれる人、仕事を紹介してくれる『元同僚』や『飲み友達』の存在から、Hは『どんな縁でも、大切にしないと』と思っていた(語り4)。人生を『振り返る』50歳のとき、Hは社会人としての自立もある程度達成し、パートナーもいて、今度はH自身が『何か社会とか地域とかそういったことに貢献できたり恩返しができたり』すること、『人生の宿題』は何かないかと考えた。『脇に置いて突っ走ってきた』ものが『セクシュアルマイノリティ』のことであり、『自分自身も見つめ』ることができるLGBTQ+当事者支援活動こそ、Hが行うべきことだと考えた。その頃の仕事で社会的な課題に向き合っている人達と出会ったこともきっかけになり、Hは当事者支援団体を立ち上げた(語り

表5-3-3 Hが当事者支援を行うまでのナラティブ

|   |  |
|---|--|
| 語 | 表5-3-4語り1の後の語りであった。高校時代の友達の話が出てきたため、Intが尋ねた。   |
| り | Int：さっき、高校時代の友達、っておっしゃってましたっけ。高校時代っていうのは、どんな   |
| 1 | 生活だったんですか。   |
|   | H：うん。性指向は、これも今考えてみたらですけど、分かってたけど揺れ動いてたのか、やっぱり揺れ動いてましたね。同性に対して自分の気持ちが、特別な感情が向くっていうのが、分かっている、とてつもなく同性に魅かれるんだけど、やっぱりその当時のことっていうか、今もそうなのかもしれないですけどあの一、異性を好きにならなきゃ、異性とお付き合いしなきゃ、みたいな。   |
| 語 | 表5-3-3語り5の後の語りであった。当事者支援を始めた理由について、Intが詳細に尋ねた。   |
| り | Int：分かってたくせに（向き合ってこなかった）みたいな、その前までの経験ってどんな部分   |
| 2 | なんですか。   |
|   | H：それはやっぱり、社会人になって、その時敢えて意識化してなかったのかもしれないけれど、自分は多分レズビアンだということには分かっているし、その認識があってパートナーもいたし、そういう、だったにもかかわらず、教師で、当事者で、レズビアンで、ってそれはやっぱり職場では言えなかったし、まあ異性愛者のふりっていうか、そういうのに話も合わせていたし、今から30年前の話なんですけど、私が教員してた頃っていうのは、プライベートな話なんかのときでも、当然そう、必然だ、異性愛が当たり前、で、それ以外は、ま、おかしいっていうか、多分そういう認識があったろうし、生徒にも、そのように教えられていて、笑われる存在で。（LGBTQ+差別のあったテレビ番組）がオンタイムで流れてて、自分が一緒に笑ってた、っていう、時代、でしたよね。…そういう当事者がいっぱいいたと思うんですよ。自分ごとじゃない、敢えて自分のことじゃないって、切り離して。その時の自分っていうのは、多数派のふりをしている。   |
| 語 | 表5-3-4語り4の後の語りであった。『生きていくことに必死だった』と話したことについて、  |
| り | Intが詳細に尋ねた。  |
| 3 | Int：んー。生きていくことに必死だったことについてもうちょっと詳しくきかせてもらっても   |
|   | 良いですか。   |
|   | H：あー。高校の教師を3年したんですが、ずっと燃え尽き症候群のような形になって、高校の教師を3年で辞めて、大学院に戻ったんですよ。結局1年行ったんだけど、そこから色々考えて職を転じて、自分は新聞記者になったんですよ。6年ほど、そこは結構すごく、自分にこう、ピタッときて、とても楽しく仕事をする時期だったというか、仕事をした時期であり、パートナーもできたりしてですね。一生懸命仕事してたんだけど、まあ良くあるんだけど、社内の権力闘争みたいなものに巻き込まれて、その新聞社を辞めてまた出版社みたいなところに移ったんですよ。ところが移ってすぐぐらいが、話がなかなか違ってお給料が出ない時期があり、そもそも自分は組織の中でこう、やるの向いて、なんとなくしんどいな、って思ってる。すぐ、独立したんですよ。給料が出なくなったっていうこともあるんだけど、フリーランスのライターとして、独立したのが33の時だったのかな。だからまあフリーランスなんで、とりあえずどのぐらい食べていけるんだろう、っていうのがあったんですよ。独立して、成功するっていうか、ちゃんとやっていけるんだろうか、っていうのもあったし、食べていけるかっていうのが実際あったので、そっからはもう本当に、必死というか、だけど本当にラッキーなことにこれが、まあそれまでの人の、教師時代だったり、新聞社時代だったりの、人間的な縁だったりだとか、いう風なこともあって、トントン拍子とは言わないね。…本当に、とにかく自分が食べていくっていうことを、このライターで食べていくっていうことをやっていくのに、仕事に一生懸命だったっていうのもあり、まああんまり、その時に、向き合わなかったこともないけどまあそうだなー、あんまりレズビアンレズビアンって考えてこなかったかなー、っていうか、うん。 |



語 **表5-3-3語り2の後の語りであった。表5-3-3語り3など、『縁』という言葉をもHから複数回聞いたIntから感想を伝えた。**

4 Int: さっきからすごい、縁という言葉がよく出て来るな、っていうふうに、思ってたんですけど、

H: 縁っていうか、自分がこれはやばい、自分生きていけないって、思うようなときに、今まで色んな人に助けられて来て、そのおかげで今があるっていう風に本当に思うんですよ。…私その(フリーランスになった)とき、失業保険をもらいながら半年ぐらい食いつないだんですけど、例えばそのときって本当に、ここはちょっと大ピンチだな、人生の仕事もないし、困ったな、ハローワークでも通ってずっと失業保険をもらいながらね、そういう時期だったんだけど、色んな人が手を差し伸べてくれて、自分の元会社、前にいた新聞社の同僚であったりだとか、あるいは本当に単純に飲み友達としか付き合ってた人が、本当に困ってるんだったら、うちにきて電話番してくれたら給料だすよとか、そういう風な思ってもみなかった人から、救いの手が差し伸べられたりとか、で、陳腐な表現なんですけど、本当にこの人間順風満帆じゃないけど、うまくいっているときに色んな人がよって来るっていうか、知り合ったりだとか、そういうときにできた友達であったりとか知り合っているのは印象に残らないんだけど。やっぱり自分がしんどい時とか辛い時とか、ギリギリっていうようなときに、わざわざそこに行こうって手を差し伸べてくれて、一言でも本当にほっとさせてくれたりだとか、実際それだけじゃなくて本当に手を差し伸べてくれたり、まあ経済的なことであったりとか、色々あるじゃないですか、困りごとがね。そういうときに本当に助けてくれた人って、まあ自分にとって忘れられないし、あの一、本当の真の友じゃないけどそんな感じ? そういう人に私はなんか、自分あーもうダメだとかしんどいとかあったときに、本当にラッキーなことに、色んな人に手を差し伸べられてここまで来たな、っていう思いが強くて、そのそこでこう繋がった縁っていうか手を差し伸べてくれた、その人との、出会いというか。だからどんな縁でも、大切にしないとな、って。

語 **表5-3-3語り3の後の語りであった。仕事に一生懸命であったその後の人生をHが続けて話した。**

5 H: パートナーができて、自分自身も50(歳)前ぐらいになってきて、社会人としての自立しているということもある程度達成して、実績をむしろ積み重ねていき、で、そうやってこう取材、執筆活動とかをする中で自分のセクシュアルマイノリティに関わるだけでなく、社会の色んな課題を、こう手弁当で一生懸命やってる、名も無い人たちの取材であったりとか、地域の課題であったりだとか、そういうのを取材して書く機会が多かったのも、それをやっていく中で、そういうことをしていることがいっぱい実はあったけど見えてなかったな、けどそういうことがいっぱいあるんだな、ってことに気づいて、そういうことが積み重なって大きいきっかけになって、50歳を前にした時に、ちょっと自分自身の人生を、50歳ってやっぱ、振り返る頃なので、忘れてきた、人生の宿題をちょっと忘れてきたんじゃないか、っていう思いがふと、50歳を前にした頃に、頭の中をよぎって、それが、実はその一、セクシュアルマイノリティに関わることであり、自分の中の、ずっと、押し殺してきたというか、自分の中を貫く、本当に、芯みたいなものを、なんか脇に置いて突っ走ってきたなーみたいなのところがあって、私が何か社会とか地域とかそういうことに貢献できたり恩返しができたりだとか、何かできることとあって、自分が一番できることって、これだったんじゃないだろうか、っていう、色んなことを取材してきて色んな課題があることは分かってるけど例えばセクシュアルマイノリティの人、の人権であったりだとか、差別されてきたりだとか、あの一、そういったことが見て見ないふりされてきたりだとか、っていう風なことに対して、それがこう自分に対して自分自身も見つめ、また社会のそういった、あり様みたいなものを見つめた時に、なんかできること、って、んー、そのことじゃないだろうか、って思って始めたのが、地元での、その一、(Hが行うLGBTQ+支援団体)っていうその、活動だったので。

5)。

H の同性愛感情の認識から当事者支援活動を始めるまでの経験が語られた。H はいくつかの性指向に関する経験と、それ以外の経験について、関係を示しながら話してくれ、それらの経験が最終的に当事者支援活動につながっていた。性指向に限らない経験の影響をひもとき、具体的な様相を明らかにしてしていくことは、本章が取り扱うべきことではないか。どのような経験が関係をしていたか、1) 仕事の内容、2) 『縁』、3) 50 歳になったこと、4) レズビアンである『自分自身も見つめ』ることの3つにまとめて詳述する。

### 1) 仕事の内容

H はレズビアンであることに対し、20 代ごろまで、学校、職場でネガティブな経験をしてきた。『異性を好きにならなきゃ』と思ったことや、『多数派のふり』をして生きてきた語りは、アイデンティティの混乱 (Cass, 1979) や、「困難なプロセス」(Mohr & Kendra, 2011) で示されたような経験をしてきたことを示していると考えられる。しかしながら、そのような自己へのネガティブな経験は『脇に置いて』過ごされていた。それほどHにとって重要なアイデンティティではなかったようである。このことは、LGB アイデンティティのみを扱った先行研究では理解しづらい。

H にとっては、仕事内容の影響が大きかった。『燃え尽き症候群』のような体験や、権力闘争に巻き込まれたこと、フリーランスになったことなど、『成功』することに『一生懸命』とHが語ったように、仕事はHにとって最も重要で危機的であったのだろう。やはり性指向以外の側面の交差性を考慮に入れながら、当事者の経験の様相を捉える必要がある (Crenshaw, 1989 ; Galliher et al., 2017)。特に、仕事が人生の中心的役割、経験になりやすいことはいくつかの文献で指摘されている (McLean et al., 2016 ; Skorikov & Vondracek, 1998)。LGB であることばかりに捉われすぎず、当事者の全体性を尊重する重要性を、Hの語りも示してくれている。

### 2) 『縁』

そのような仕事が重要であったHの人生から、当事者支援活動やレズビアンであることがHの人生の中心になってくるまでにどのような経験があったのか、さらに物語を時系列的に進めると、大きくは二つの経験があったようだ。

まず、人間関係の『縁』である。主には仕事で苦しいときに様々な人に『助けられてきた』ことを語り、その『縁』によって、仕事内容の一定の落ち着きを得ていた。後述するが、そのような『縁』を経験してきたことが、地域、社会への『恩返し』として当事者支援活動を始める理由になっている。『元同僚』から仕事を紹介してもらったことから、仕事の内容と関係する経験といえるが、『飲み友達』からも仕事を紹介してもらっていた。今回のインタビューでは語られなかったが、仕事やレズビアンであること以外の、Hのアイデンティティや他のコミュニティなどの影響があったかもしれない。

### 3) 50 歳になったこと

当事者支援活動やレズビアンであることがHの人生中心になってくるまでにどのような

経験があったのか、もう一つの経験として、50歳になったことが語られた。『人生を振り返る』年齢になったことの影響を受け、社会、地域に『貢献』、『恩返し』をしたいと思うようになり、それが当事者支援活動を始める一つの背景になっていた。中年期は誰かを育てる「世代性」(Erikson, 1959/2011)の時期にあり、アメリカやイタリアでは、中年期の当事者が若年層のLGBやLGBTQ+コミュニティに貢献をする傾向が見られると示されてきた(Rosati, Pistella, Giovanardi, & Baiocco, 2021; Rosebrough, 2003)。そのような傾向と類似する語りであったように思われる。また、LGBであることの強みに着目してインタビュー内容を示したRiggle & Rostosky (2012)は、当事者支援活動は、LGBTQ+であることの経験に限らず、他のアイデンティティやコミュニティでの経験も関与して発揮されることがあると指摘している。仕事での危機的な経験や、50歳という年齢を経て、今度はLGBTQ+コミュニティを対象に当事者支援活動に至ったHの語りは、これらの先行研究の具体的様相を示していると思われる。

#### 4) レズビアンである『自分自身も見つめ』ること

レズビアンであることによって経験してきたネガティブな出来事について、Hは『脇に置いてきた』だけで、決して受け入れることやポジティブに内在化してきたわけではなかった。そのような『自分自身も見つめ』、自分の生き方について考える機会としても当事者支援活動は機能しようとしていた。社会、地域への『貢献』、『恩返し』だけではなかったことは、確かに「平等・公平」(Vaughan et al., 2012)や、「社会正義」(Riggle et al., 2014)では十分な理解を得られないが、第3章のBの語りや、斉藤(2019)、Riggle & Rostosky (2012)が参照できる。すなわち、Bの人生やこれらの先行研究と同じように、Hにとっても当事者支援活動が自分も支えられることも目的としていたと考えられる。

#### (2) Hの当事者支援活動に関するナラティブ (表3-5-4)

Hは当事者支援活動の中でも『縁』に恵まれていると思うことがあった。支援活動の一環で偶然高校の同級生に会ったとき、その同級生はHがレズビアンであることに理解のある態度で関わった(語り1)。Hはその経験を通し、元々周囲には『理解のある、造詣の深い』人が多かったのではないかと、思っていた。また、茶話会に参加する10代、20代の声と、自身が教員であった過去の経験を比較して、Hは当事者にとって『しんどい』状況が教育現場に依然あることを知り、まず教育現場でのLGBTQ+理解を『なんとかしていきなきゃ』と思うようになった(語り2)。ただし、当事者支援活動はH自身にネガティブな思いにもさせた(語り3)。偏見や差別がなくなることを、当事者支援活動をするからこそHは理解し、それを自分自身のこととして向き合うことは『しんどい』と思っていた。さらには、Hは地元で支援活動を強く求められていた。そのため、当事者支援活動を『受け入れざるを得ない』役割とHは考えていた。Hは結局、『すぐ社会とか人の問題にすり替え』て、当事者支援活動を通して『自分自身も見つめ』るというそもそも求めていた自分にとっての意味は、実際には『今は、周りの人っていった意識の方が強い』、自分とは『向

表5-3-4 Hの当事者支援に関するナラティブ

語 **表5-3-3語り4の後の語りであった。縁に恵まれた話をHが続けて話した。**

り H：こないだも、男女共同参画議会っていうのに、当事者色々話ききたいから来てください、って行ったんです。でそこにやっぱり高校時代の、男性の同級生が、仲の良かった。もう今（同級生が勤める事務所）の所長してる。あー久しぶり、元気してた？、って言って、本当もう三十数年ぶりの再会だったんですけど、その場で男女共同参画審議会で色々ちょっと、審議委員の中から色々失礼な発言がでたりとか、なんだこれとかいう発言があったりして。かなりちょっと抑えてたんですけどエキサイトして色々意見を言った部分がありまして。でも、その友人はずっと聞いてて最後まできて。で同級生、今まで当事者の人とたくさん会ってきたけど、こういう風にしてきた、みたいなのを本当に私の援護射撃じゃないけど、淡々と話をして私がああ、そういう当事者だってこともそのときまで知らなかったけど。次の日もわざわざ電話をくれて、色々話をしたんですけど。そんなようなこともあったりだとか。…私の周りにそういう人が多かったのかな、っていう感じですね。理解があったりだとか、実は、そのこと私が表に出さなかったから、みんな話題にしなくて、そう。自分が、表にだして意識化して活動を始めると、自分の周りにはみんな、理解のある、造詣の深い、まあ言ってみたらこうそういう人たちが多かったんだ、実は、みたいな。

語 **表5-3-3語り1の後の語りであった。インタビューの冒頭（表5-3-3語り2、語り5）に戻ってIntりが尋ねた。**

2 Int：最初、得意としてどうしたいか分かってたのにやってこなかったことをやってるっておっしゃってたじゃないですか。その中で社会問題と向き合わなきゃいけないなくなったって。どういう、その向き合わなきゃいけない経験ってどういうものがありました、この、活動を通して。

H：向き合わなきゃいけないって自分が個人的に何か直面化してきたっていうわけじゃないんですよ。私ね、やっぱり私自身はすごい恵まれて来た、ラッキーな人生だったって。…やっぱり、大きかったのは茶話会を主催するようになって、…（茶話会に来るメンバーの何人かは）10代、20代の若者なんですよ。やっぱりね、その経験が大きかったです。経験、その一茶話会で、とにかく話をきいたり、まあ、時には自らロールモデルになったりだとかあるいはアドバイスしたりとか、色々ありますよね。あれきかされたり、相談受けたり。まあそこで見聞きしたこと、うん。これはやっぱりなんとかしていかなきゃな、みたいな。ありましたね、この活動を始めたからには。これをほっといちゃいけない。まず最初が教育に関わることだったんですよ。10代、20代の子が、あ、学校生活でやっぱりしんどい思いをしてる、それを私教師だったからすごく良くわかるんだけど、教員は知らないんですね、全然。また意識も全く乖離してるから。それは今になってもそうなんだ、って、実はあって、自分が教員していた30年前と、今とそんなに、教員自体が勉強しているわけでも何でもないから、全然変わってないと。で、子どもたちのしんどい思いっていうのは、そのまんまだわ、みたいな。そこに改めて気づいたみたいな。

き合えてない』、『向き合うことがしんどい』と意識されづらくなっていた。今、Hは周囲にカミングアウトし、当事者支援活動をしていることも理由に、レズビアンであることを『肯定的』に捉えていた（語り4）。当事者支援活動には、確かにネガティブな側面もあり、『こだわりがない』ので、『やってくれる人がいたらやってくれたら良いよ』と、その役割を辞める考えもあることを話した（語り5）。一方で、今は『ライフワーク』にもなってお

語 **表5-3-4語り2の後の語りであった。インタビュー時間が少なくなってきたため、Intから漠然と**  
 り **尋ねた。**

3 Int: 今、考えていることとか、これからどうするかとか、って、考えていることがあるんですか。

H: 今はねー、結構この自分自身が携わっているこの活動が、以前は確実に仕事、重きをおいてただけど、半々ぐらいのウェイトになってきたんですよ。これは自分の、ライフワークかな、と。その活動のほうね、セクシュアルマイノリティの、自助啓発活動みたいなのが、自分のライフワークかな、と思いながらも、やっぱりね、自分自身に向き合わなきゃいけないっていう、のが、それってね、いくつになってもしんどいよな。自分自身に向き合うっていうのは、できたら向き合いたくないっていうか、向き合っていないっていう人はいっぱいいるし、向き合わないでいられるっていうのはとても楽なことなんだけど、自分自身に向き合うのって、若い頃からそうなんですけど、もうこの歳になっても、多分そして歳をとってもすごくしんどいことだと思うんですよ。…まあ、地元ではね、(Hが行うLGBTQ+支援団体)が注目をされたりだとか、いろんなオファーがあったりだとか、当てにされたりがある中で、まあ、受け入れざるを得ないっていうか、自分の役割を。意見を求められたり、相談きたりとか、あるんで、めんどくささ、しんどさみたいなのはあるんですが、でもまあこれは、やっぱり、自分がしなきゃ、みたいな。まだ、しばらくは、これって、やっていかなきゃ、何にも、偏見とか差別とか、なくならないし、人々の意見ってそう簡単に変わるわけがないんだけど、やっぱりそこ変えていかなきゃ。自分とパートナーが、将来、本当に、かつてのパートナーも含めてですけど、私たち結婚するのよ、とか、付き合ってるのよ、というのがもう本当に普通に自然に。あーそうなんだおめでとうって、なるような。そういう社会が自分が生きているうちに自分がくればいいと思うんですけど。まあそれはまだまだ、なかなか、っていう面が見えるので今の社会では…。

Int: 今の発言っていうのは、Hさん自身にとっての発言、思いなのか、それとも周りの人に対する思いなのか。誰に対しての思いなんでしょう。

H: あー。本当は自分自身にとっても周りの人にとってもって言いたいところだけど、まあ私はやっぱり今は、周りの人っていった意識の方が強いのかな。まあじゃあ、そこが私自分と向き合えてないっていうか、向き合うのがしんどいと、常に思っているところなのかな。すぐ社会とか人の問題にすり替えちゃうっていうか、じゃああなたはどうなのとか、あなたの人生にとってどうなのとか、言われると、んー、って参っちゃうかな。

語 **最初の語りであった。教示に沿って話された。**

り Int: Hさんは、レズビアンであることについてどのように思っていますか。ご自由にゆっくりと  
 4 お話ください。

H: どう思っているかですよ。

Int: はい。

H: 今は、どのように、まあ、これが自分だな、っていうか、はい。今(50代)になって、とても肯定的に捉えてるというか。レズビアンっていう風に自分はまああの一周囲言っているし。性自認とか、性的指向に関して、まあ活動をしているので。…自分にとって、んー。一義的な、第一義的なすごく重要なことではなくて、まあ、重要は重要だけど、そうだな。それよりもまずは生きていくのに必死みたいな。生きていくのっていうか、仕事をしていったりとか。…

表5-3-4 (続き2) Hの当事者支援に関するナラティブ

---

|   |   |
|---|---|
| 語 | <b>表3-3-3語り3の後の語りであった。『しんどい』思いをしながら行う当事者支援の今後についてHが続けて語った。</b>  |
| 5 | H: まあ先は見えないけどできるところまで、やっていきたいのもあるし、もしかしたらこれが自分のライフワーク、かも、に、なるかもしれない、って感じですかね。だけど本当に、私将来にこだわりがない方なので、誰か、若い人が出て来て運営してくれてそれがすごくうまくいきましたら、まあ、やってくれる人がいたらやってくれたら良いよ、って感じで。うん。そんな思いもありますね。  |
|   | Int: こだわりがないって?   |
|   | H: こだわりが、ないことはないけど、こうでなきゃっていうのは、案外、人任せで、自分で決めたことはあんまりないっていうか。譲らなかつたこととか、あー。結構頑固だとか、譲らないとか言われるから、譲ってないのかな。…それは結局、自分のセクシュアリティっていうのが、この歳になって、結びついてるっていうか、うん。なんか遠回りをしてきたっていうか、やっぱり、し忘れた宿題、であったのかな、っていう。人生において。自分がこう、20代、30代、40代の間に、しなきゃいけなかつたことなんだけど、し忘れていた宿題だな、っていう思いですかね。…                                  |
|   | Int: あー、そういう活動ですもんね。  |
|   | H: うん、そうなんですよ。  |
|   | Int: なかなか自分の意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、わからないもんな。  |
|   | H: うん。今本当に、相談も多くて、相談とかそれこそ今いろんなオファーがあって、それを一生懸命やっていると、それは確かに人のため世のため、って感じなんだけど、だけど、本当は、それだけじゃない、な、やっぱり。それをやることで、結局自分が救われたりだとか、自分、そうね。究極的には自分に返ってきてるって感じがしますね。まあそれはまあ、何にもおいてもそう、そうといえばそうなんだけどね。仕事もそうだし。お客さんのためとか、人のためとか、世のためとか言いながら、まあ結局、そうやって一生懸命やることが、結局最終的に回り回って自分のため、まあ、自分のためだわな。まあおんなじ、構図なのかもしれないけれど。 |

---

り、確かな根拠はないが、『人のため世のため』、他者の支援を『一生懸命』やっていることが『究極的には自分に返ってきてるって感じ』や、『結局自分が救われたり』している印象も抱いていた。他者のために『一生懸命』に当事者支援活動を行うことで、『回り回って』自分も『救われる』ために、これからも当事者支援活動を続けていこうとしていた。

多くの語りに、当事者支援活動の内容が含まれた。当事者支援活動が、他のLGBTQ+を支え、H自身の支えにもなっているのか、いないのか、複雑で、ここまで比較対象となってきたBやCの語り、斉藤(2019)の事例からも理解は難しい。どのような経験が関係し、Hは結局、当事者支援活動をどのように捉えているのか、ひもとく必要がある。ひとまずは、1) 当事者支援活動を始めるまでの経験、2) 10代、20代の声、3) 差別や偏見がなくなる事、4) 地域からの期待の4つを取り上げ、最後に、Hにとっての、4) 自分を十分に支えられない当事者支援活動について整理する。

#### 1) 当事者支援活動を始めるまでの経験

当事者支援活動を始めるまでの経験はHの支援活動を支えていた。例えば『縁』について、支援活動の一環で偶然高校の同級生に会ったとき、その同級生はHがレズビアンであることに理解のある態度で関わったことが、その当事者支援活動の支えになっていた。レズビアンであることだけでなく、元々周囲には『理解のある、造詣の深い』人が多かったのではないかと人間関係に恵まれてきたことに気づききっかけとなっていた。教員という仕事に就いていたことも、後述するように現在の教育分野におけるLGBTQ+理解の状況と比較することにつながっていた。強みには注意と思考を拓ける役割があり (Fredrickson, 2004)、実際にHは当事者支援活動の中で様々な気づきを得ていったことが窺える。

## 2) 10代、20代の当事者と出会うこと

Hは、自身が教員であった頃の状況と、現在の教育現場でのLGBTQ+理解を比較したとき、ほとんど状況が変わってないと思った。それが、より教育現場での理解や当事者支援を『なんとかしていかなきゃ』と思うことにつながったと語った。実際に当事者に出会うことで、「平等・公平」(Vaughan et al., 2014) や、「社会正義」(Riggle et al., 2014) という強みを発揮していたと言える。

## 3) 地域からの期待

Hは地元で支援活動を強く求められていた。地域性に関して多くは語られなかったが、『受け入れざるを得ない』と、当事者支援活動を継続する理由にはなっているようだった。

## 4) 差別や偏見がなくなること

ここまでに示した複数の経験の多くは、当事者支援活動は他者も、自分も支えられるものと意味づけられる出来事であったと理解できるが、その当事者支援活動をHは『しんどい』と語ったこともあった。それは、差別や偏見がなくなること、支援者を担うからこそ理解しているため、であった。また、本来当事者支援活動に求めていた『自分自身も見つめ』る機会として機能すること、自分を支えることは、『向き合えてない』と十分に行われていなかった。周りのためという意識の方が強くなり、当事者支援活動を辞めることも考えにいられているほどであったことから、『しんどい』気持ちの重大さにつながっていることが窺える。

## 5) 自分を十分に支えられない当事者支援活動 (図5-1)

Hの当事者支援活動への背景と評価をまとめると、図5-1のようになる。図5-1では、他者を支える意識の方が自分も支えられる意識よりも強く、自分も支えられる意識がほとんどなくなっていることを不統合で表現した。本来の目的であった『自分自身も見つめ』る機会とはならなかっただけでなく、当事者支援活動を辞める選択も出ており、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」やRiggle et al. (2014)のいう「社会正義」で述べられる強みとしても、経験されづらくなっているようだった。斉藤(2019)の研究でも、当事者支援活動で「内面のホモフォビアから目を背けちゃう」、「傷の広げあい」になると、ネガティブな側面が孕むことと、それが意識しづらくなっている当事者の語りは得られていた。同様の経験をHもしていたが、他者も支えるという強みも実感されづらくなっていること

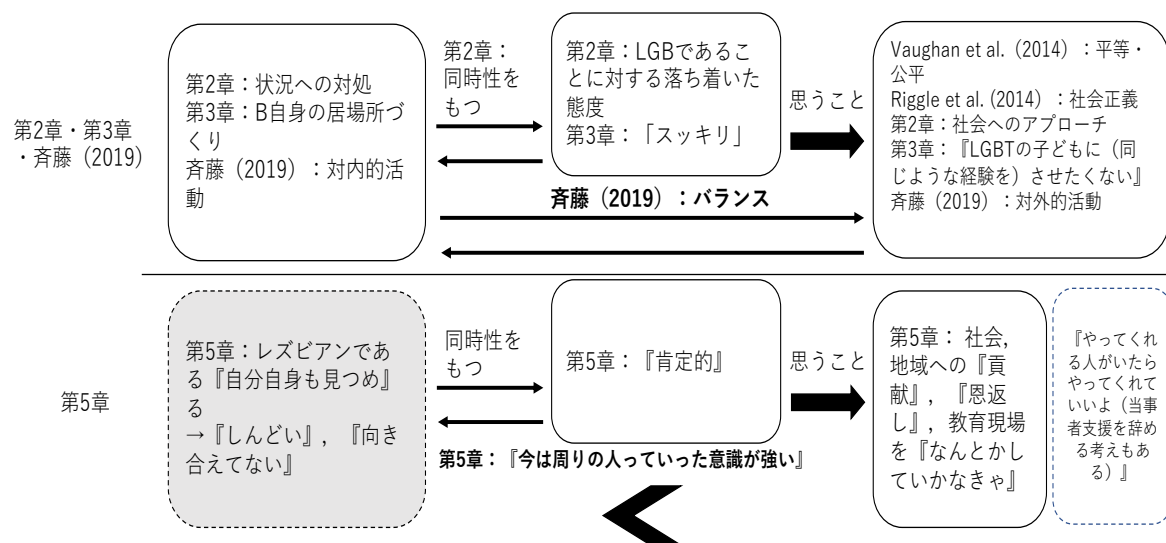


図5-1 第2章, 第3章, 齊藤 (2019) と第5章の結果と考察の比較

はHの語りの特徴であったと思われる。

ここまでのHのナラティブから、1) 第3章, 第4章と同じように、当事者支援活動にはやはり自分も支えられるため、という目的が込められること、しかし、2) 当事者支援活動をするからこそ、差別や偏見がなくならないことを実感し、自分は十分に支えられないと感じること、同時に、3) 当事者支援活動を辞める選択が出るほど、他者を支援するという強みも実感されづらくなることが示された。第4章のCのナラティブとあわせて考えると、自分も支えられている実感がなければ、当事者支援活動は先行研究で示されているような強みとしても実感されづらいのかもしれない。しかしながらHは、確かな根拠はないが『回り回って』自分自身が『救われ』ようとしていることも語った。当事者支援活動はネガティブな経験でもあるが、将来的に他者にとっても自分にとっても役立つと思っているHの様相が窺える。このようなインタビュー中に語りを変容したことは、齊藤 (2019) や第2章の研究でも捉えることは難しい。どのようにしてこのような評価を当事者支援活動に寄せたのか、それはこのインタビューにおけるHとIntの相互性によるものと考えられるため、後述することとする。

### (3) インタビューにおけるHとIntの相互性

方法や逐語からインタビューにおけるHとIntの相互性を確認し、如何にしてこのナラティブが得られたか、考察する。多くの考察が可能だが、本研究で着目した当事者支援活動に至った背景の語りが得られたことに着目すると、1) Intの属性の影響は大きいと考えられる。これによって、本章で特徴的であると述べた、2) 『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動の語りが得られたと考えられる。また、3) インタビューの構造の影響もあった。以下、この3点についてまとめる。

#### 1) Intの属性-同じLGBであり、対外的活動を行う者とのインタビュー

まず、Intの属性についてである。IntはHと同じLGBであり、支援者と研究者という立



場は異なっていたが、LGBTQ+をキーワードに対外的な活動を行っている点でも共通していた。共有できる経験も多いことによってこのナラティブが生成されやすくなったと考えられる。例えば、「教育現場で若者がしんどい思いをしていた」語りが豊富に得られたことは、同じ対外的な活動に関わっていたからこそ、Int が、H が他のLGBTQ+当事者に出会ったときに感じた経験への理解をしやすかったことが一つの理由として考えられる。

特に着目すべきは、表3-5-4の語り5で、Int自身の経験に関する言葉を踏まえてHは新たな語りを生成した点である。Hが『自分自身も見つめ』ることが当事者支援活動で難しく、『しんどい』思いをしていたと語っていたことに対して、Intは〈自分に意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、わからないもんな〉と感想を述べた。その後、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動を行おうとしていることをHが語った。これまでのネガティブな経験が、ポジティブで未来志向な意味に変容したこのインタビューの経験はHにとって重要な価値を持ったと考えられる。Winslade & Monk (1991/2001)は、新たなストーリーを生成するためには、そのストーリーを聴き、支持し、発展に貢献する聴衆がいることが求められるとされる。偶然ではあるが、IntがHと同じくLGBで、対外的活動を行っていたために、その経験の理解ができ、Hのストーリーを支持し、感想を述べる形で発展に貢献する聴衆になったのではないかと考えられる。

## 2) 『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動 (図5-2)

先ほどの図5-1との比較を図5-2に示しながら、Hにとっての当事者支援活動の意味は結局IntとHの相互性(Intの属性)の影響を受けてどのように語り直されたか、を示す。大きくは、当事者支援活動は自分にとっては『しんどい』、『向き合えてない』、と思っていたことが『究極的には自分に返ってきてるって感じ』や『結局自分が救われたり』していることになり、『周りのため、っていった意識が強い』と思っていたことが、他者のために『一生懸命』やることが『回り回って自分のため』になるという、意識に変容していた。

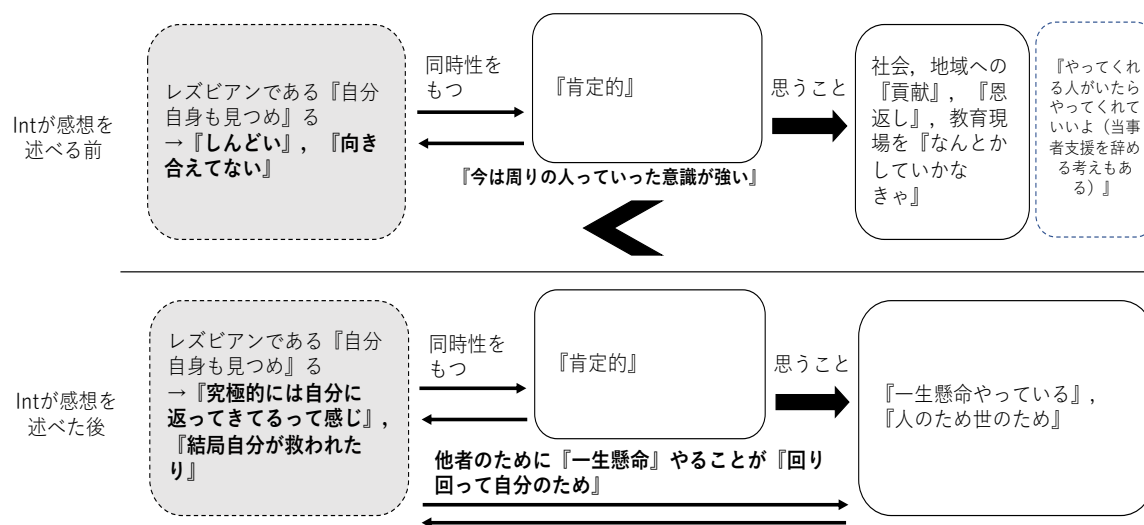


図5-2 第5章におけるIntとHの相互性(Intの属性)の影響による当事者支援に関する語りの変化

すなわち、第3章のBや、斉藤（2019）の事例のように、当事者支援活動が他者も自分も支えられるものという認識に変容したといえる。本論で取り上げられた他のナラティブなどとの比較を経て、このHの語りの考察から言及できる意義をまとめると、やはり自分も支えられている実感が、先行研究で述べられてきた強みとして必要であることを言えるが、同じLGBで対外的活動を行っているような、Hの人生を支持し、発展に貢献できる者と話し合える場があることで、当事者支援活動が改めて他者も自分も支えられるという強みとして実感されることにつながる、ことも考えられる。ただし、本来は差別や偏見がなくなることの方が望ましいのかもしれない。

### 3) インタビューの構造

HとIntの相互性に関する考察に戻ると、インタビューの構造についてもあげられる。構造度が低く、本来のインタビューの目的であったH自身のセクシュアリティへの思い以外も話しやすい状況にあったことが、社会、地域への『貢献』や『恩返し』で表現される他者志向的な語りや、それに影響を与えた職業や年齢に関する語りが豊富に生成されることにつながったと考えられる。例えば、表3-5-2の鍵になる言葉から、仕事や活動に関する内容が頻出したことや、逐語から、IntがHのレズビアンである側面以外を詳しく尋ねていたこと（表3-5-3語り3、語り4）からその考察ができる。一方で、唯一構造化されていた点である、H自身がレズビアンであることをどのように思っているか、自分自身の思いを尋ねるインタビューであったことも影響を与え、『今は周りの人っていった意識が強い』語りにつながったと考えられる。Intが、インタビューの教示に沿った語り生成されるよう、今の自分に対する思いや今後について、特にインタビューの後半で積極的に尋ねていたことから（表3-5-4語り2、語り3）、その考察ができる。インタビューの機会が1回であったことにも留意しなければならない。Hのナラティブで特徴的であるとあげた、『回り回って』自分自身も『救われ』るために今後も当事者支援活動を行うと語り直したことについて、実際に『救われ』た経験になっているのか、この点を語る時間を設けなかったことは、本研究の限界といえる。その後どのように当事者支援活動が自分にとっての意味をもたらしたか、筆者は関心を持っており、次のインタビューで新たな語り生成されることが期待できる。

## 第4節 Hのナラティブのまとめ

### —『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動—

本章は、1人のLGBのインタビュー(H)を対象ナラティブとしながら、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動をすることに着目しながら明らかにすることを目的とした。第2章で、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景が明らかになることが、研究の展望の一つになったことが目的を設定した理由であった。また、第2章～第4章を踏まえ、年代や当事者支援活動に寄せる思いに着目して対象ナラティブのサンプリングを行った。Hのナラティブの考察で着目した点は、1) 仕事や人間関係、年齢の影響と、2) レズビアンである『自分自身も見つめ』ること、3) 当事者支援活動での出会いや期待されたこと、4) 差別や偏見がなくなること、5) 同じLGBであり、対外的活動を行う者とのインタビューでの相互性であった。それらの影響を受け、Hは、6) 『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動について語った。この6点に沿って本章をまとめる。

#### (1) 仕事や人間関係、年齢の影響

Hが当事者支援活動を始めた背景には、レズビアンであること以外も複数関係していた。仕事の内容や人間関係の『縁』、50歳になったことがあげられた。『燃え尽き症候群』のような経験など、重要で危機的であった仕事を行う中、様々な人との『縁』に『助けられてきた』ことで、人生を振り返る50歳になったときに、社会、地域への『貢献』、『恩返し』として当事者支援活動を始めた。このようなレズビアンであること以外の経験が、「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2014) という強みとしての意味をもって当事者支援活動を始める背景になっていた。また、これらのレズビアンであること以外の背景は、当事者支援活動を始めた後も、Hのその支援活動を支える役割を果たしていた。

#### (2) レズビアンである『自分自身も見つめ』ること

レズビアンであることによって経験してきたネガティブな出来事について、Hは上述のような仕事内容の影響で『脇に置いてき』ており、50歳で当事者支援活動を始めるときまでに、それらを決して受け入れることやポジティブに内在化してきたわけではなかった。Hにとって、そのような『自分自身も見つめ』、自分の生き方について考える機会としても当事者支援活動は機能しているようであった。Vaughan et al. (2012) や、Riggle et al. (2014) の説明では十分な理解を得られないが、第3章のBの語りで述べたように、斉藤(2019)などの研究が参照できた。すなわち、Bの人生やこれらの先行研究と同じように、Hにとっても当事者支援活動が自分も支えられるために機能しようとしていたと考えられ

た。

### (3) 当事者支援活動での出会いや期待されたこと

実際に当事者支援活動で10代、20代の当事者の話を聞いたことや、地元で活動を強く求められていたことも、強みとして当事者支援活動を行う理由になっていたかは定かではないが、少なくとも、継続して行う理由にはなっていた。

### (4) 差別や偏見がなくなること

ここまで示した経験で捉えれば、当事者支援活動は概ね他者も自分も支えられるものと意味づけられる出来事であったと理解できるが、その当事者支援活動を『しんどい』と語ったこともあった。それは、差別や偏見がなくなること、支援者を担うからこそ理解しているため、であった。本来当事者支援活動に求めていた『自分自身も見つめ』る機会として機能すること、自分を支えることは、実際には『向き合えてない』と十分に実感されていなかったことも語った。周りのためという意識の方が強くなり、当事者支援活動を辞めることも考えにいれているほどであったことから、この差別や偏見がなくなることへの直面は、それほどHを『しんどい』気持ちにさせていることが窺えた。

### (5) 同じLGBであり、対外的活動を行う者とのインタビューでの相互性

最後に、インタビューにおけるHとIntの相互性、特に、Hと同じLGBであり、対外的活動を行っていたIntと話をした経験の影響があげられた。上述の通り、Hは当事者支援活動を辞めることも考えにいれるほど、『自分自身も見つめ』ることが難しく、『しんどい』思いをしていた。しかし、Hのそのような語りに対して、Intは〈自分に意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、分からないもんな〉と感想を述べた。その後、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動を行おうとしていることをHが語った。これまでのネガティブな経験が、ポジティブで未来志向な意味に変容したこのインタビューの経験はHにとって重要な価値を持ったと考えられた。Winslade & Monk (1991/2001)は、新たなストーリーを生成するためには、そのストーリーを聴き、支持し、発展に貢献する聴衆がいることが求められるとされる。偶然ではあるが、IntがHと同じくLGBで、対外的活動を行っていたために、その経験の理解ができ、Hのストーリーを支持し、感想を述べる形で発展に貢献する聴衆になったのではないかと考察された。

### (6) 『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動

Hにとっての当事者支援活動は、インタビューにおけるIntとの相互性を経て、最終的には他者も自分も支えられるという強みとしての意味を持って機能しようとしていた。第3章のBや斉藤(2019)の事例のような認識であった。第6章で着目した考察からまとめられるHの語りを取り上げた意義は、1) 第3章、第4章と同じように、当事者支援活動にはやはり自分も支えられるため、という目的が込められること、しかし、2) 当事者支援活動を行うからこそ、差別や偏見がなくなることを実感し、自分は十分に支えられないと感じること、同時に、3) 当事者支援活動を辞める選択が出るほど、先行研究で述べられたような他者を支援するという強みも実感されづらくなること、ただし、4) Hの人生を支

持し、発展に貢献できる、同じLGBで対外的活動を行っているような者と話し合える場が、当事者支援活動が他者も自分も支えられるという強みとしての意味を持って再び実感されることにつながることを、とされた。

他にも、これらのナラティブが如何にして得られたか、インタビュアーとインタビュイーの相互性に基づいて考察された。特に、インタビューの構造について、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動を行おうと、Hは語り直したが、実際に『救われ』た経験になっているのか、この点を語る時間を設けなかった。その後当事者支援活動がHにとってどのような意味をもつようになったか、筆者は関心を持っているが、時間を設けなかった点は、本研究の限界といえた。

今後の研究として、得られた観点から新たにインタビュー協力者にインタビューを行うことが考えられよう。例えば、1)年代、2)職業経験、3)人間関係、4)地域性を一つの観点として理論的サンプリングを行うことができる。また、インタビュアーとインタビュイーの相互性から、Hへのインタビューを再度実施することも、研究の展望としてあげられた。

## 第6章

LGBの当事者支援活動と強みに着目したナラティブに関する考察

-自分も支えられることについて-

## 第1節 3人のLGBのナラティブ

第3章～第5章では、性指向に基づく個別的経験について、3人のLGBのインタビューを対象ナラティブとしながら、特にLGBであることの強みに着目して明らかにすることを目的とした研究を行った。どのような強みに着目すべきかは、先行研究から見出すことも可能であったが、本邦のLGBを対象に、「客観的」、「一般的」知見を目指す立場から、今一度当事者の経験の様相を整理した上で定めても良いように考えられた。そのため、まずは第2章でポスト実証主義の研究を行い、どのような経験、現象に着目すべきか、整理した。

その第2章の研究で取り上げた考察の一つに、支援的態度や行動にLGBの中で差が生じることがあげられた。具体的には、【社会へのアプローチ】内にある、[当事者として役に立ちたい]や、[社会に変化を求める]グループであった。これらはVaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」の因子に類似する語りで構成されたが、[当事者として役に立ちたい]と実際に当事者支援団体に所属するか、立ち上げるかなどしてアクティヴィストになる、もしくは、当事者支援を生業としている当事者の語りと、[社会に変化を求める]が、実際の活動はなく、変容に賛同する当事者の語りにグループが分けられた。この差にどのような背景があるのかは、第2章では明らかにならなかったが、[当事者として役に立ちたい]のグループのように、より他者志向的な経験の方が、当事者にとって自分の強みとして認識されやすく、ポジティブに作用しているのではないかと考えた。Vaughan et al. (2014)も、これまで当事者支援活動をする者を研究対象にしても、差別偏見の認識やLGBTQ+を擁護したい願望が反映され、ネガティブな側面が多く扱われたため、強みとしてその経験が着目されることが少なかったことを問題としてあげていた。

そのために、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景が明らかになることを主の目的とし、当事者支援活動をするLGBであった、バイセクシュアルのB、ゲイのC、レズビアンのHに再度インタビューを行い、そのインタビューの逐語を対象としたナラティブ研究を行った。それぞれに個別性の高い経験をしていることが明らかとなったが、共通して、当事者支援活動で自分も支えられようとしていた点が一つの背景となっていた。そのため、本章ではまず、1) 3人のナラティブのLGBであることの強みに関する考察をもう一度見直し、共通して考察された2) 自分も支えられるための当事者支援活動に着目して、先行研究との差異や本研究の意義を言及する。最後に、3) 研究の展望について述べる。

### 1. Bのナラティブ—自分も支えられるための当事者支援活動—

第3章では、バイセクシュアルでトランスジェンダーのBのインタビューを対象ナラテ

イヴとした。主に、1) B のジェンダーと LGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観と、2) B 自身が支えられる必要のあったこと、3) “性と他の側面の関連は分からない” ことの、3 つの考察に着目した。

### (1) B のジェンダーと LGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観

B が当事者支援活動を始めた一つの背景に、ジェンダーでも出生時性別や身体的性別に違和感を感じていたことと、それに基づく経験があげられた。B は LGBTQ+コミュニティの中にも性役割の二項対立的価値観がみられ、ネガティブな経験をしていた。そのことが、『LGBT の子どもに (同じような経験を) させたくない』と、そして、レズビアンやトランスジェンダーコミュニティに『なじまなかった』ため、B 自身の居場所を作ろうと、当事者支援活動を始めることにつながっていた。

### (2) B 自身が支えられる必要のあったこと

B のジェンダーと LGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観にも関連するが、当事者支援活動で B 自身の居場所を作ろうとしたことは、特徴的であった。他者ではなく、自分が支えられようとしていた点は、Vaughan et al. (2014) の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014) の「社会正義」に類する言及とは一致しないためであった。一方で近年は、この当事者支援活動を行う者自身がその活動の中で支えられる場合があることについて、斉藤 (2019) の「対内的活動」に関する言及など、わずかながら事例が見られる状況になった。

### (3) “性と他の側面の関連は分からない” こと

ジェンダー以外の側面も影響を与えている可能性があった。例えば、元々『正義感』を持っていたかもしれないこと、『他の人がなんと言おうとも、僕は自分が好き』である話があげられた。ただし、このようなセクシュアリティ、ジェンダー以外の自分の評価や態度が、どの程度バイセクシュアルであることと関わりを持っているかは明らかにならなかった。当事者支援活動の全てを、B 自身も明確にしないまま経験していたことが推察された。

## 2. C のナラティブ—他者も自分も支えられなかった当事者支援活動—

第 4 章では、ゲイの C のインタビューを対象ナラティブとした。B のナラティブから、自分も支え、他者も支えることの“バランス”の意識がない当事者の存在を推察し、対象ナラティブを選定する一つの観点とした。主に、1) 『学生運動』、『エイズパニック』の時代を生きたことと、2) 当事者支援活動に『セルフヘルプ』のみを求めたこと、3) 他者も自分も支えられなかった当事者支援活動の 3 つに着目し、考察した。

### (1) 『学生運動』、『エイズパニック』の時代を生きたこと

C が当事者支援活動を始めたことには時代背景の影響が大きかった。まず、『学生運動』の時代を生きたことは、当事者支援活動に直接関係はしていないが、重要な位置づけにあり、従来の LGB 研究でネガティブなものと考えられていたカミングアウトや、異性愛中心主義の規範、性規範に捉われることなく、『アウトサイダー』に、ポジティブに生きることにつながった。多元的な考えが同時に存在していた『学生運動』の時代 (小杉, 2015) を



大学生として生きたことは、Cの人生に多くのポジティブな影響を与えたと考えられた。

次に、『エイズパニック』の時代を生きたことがあった。エイズに関連する死、事故、事件等のことであり、同性愛者とエイズが一体して問題視される時代（広瀬，1993）は、『アウトサイダー』なCの生き方を否定するような経験であったと捉えられた。これまでの生き方を一変させなければならなくなり、後述の通り、『セルフヘルプ』として当事者支援活動を始める背景の一つとなったと考えられた。

### (2) 当事者支援活動に『セルフヘルプ』のみを求めたこと

『エイズパニック』の時代を生きたことの流れの中で、『アウトサイダー』な生き方を一変させなければならなくなったCは、一つ的手段として、『エイズ』と結びついたゲイであることに対するネガティブな評価を『セルフヘルプ』するために、当事者支援に携わった。この『セルフヘルプ』こそが、当事者支援活動を始めた大きな背景であったと考えられた。

Cの語りの特徴は、『セルフヘルプ』のみを当事者支援活動に求め、ゲイであることを受容がなかったことであった。第2章や第3章のBは、【LGBであることに対する落ち着いた態度】を示すなど、ある程度同性愛への受容があることと、〈状況への対処〉行動が同時にあった上で、「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2014) という強みとしての意味をもって当事者支援活動が行われていたが、第4章のCは、この同性愛への受容がほとんどなく、自分の『セルフヘルプ』、第2章でいう〈状況への対処〉のみを目的としていた。

### (3) 他者も自分も支えられなかった当事者支援

Cのような、自己志向的な目的のみの当事者支援活動の場合、直結していた「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2012) という強みとしての意味や、「自己コントロール」(Vaughan et al., 2012) も実感されず、自分を結局支えられていなかった。Cの場合は特に、『アウトサイダー』なCのこれまでのポジティブに捉えていた生き方を支える経験にならなかったように考えられた。すなわち、Cの語りから新たに言えることは、1) 他者を支援しようという目的はほとんどなく、〈状況への対処〉のみを目的として当事者支援活動を始めることがあるが、2) そのような目的の当事者支援活動の場合、先行研究で説明された強みとしての機能は実感されず、自分自身も支えられてない可能性があった。

## 3. Hのナラティブ—『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動

第5章では、レズビアンHのインタビューを対象ナラティブとした。第4章に引き続き、Bのナラティブから、自分も支え、他者も支えることの“バランス”の意識がない当事者の存在を推察し、対象ナラティブを選定する一つの観点とした。主に、1) 仕事や人間関係、年齢の影響と、2) レズビアンである『自分自身も見つめ』ること、3) 当事者支援活動での出会いや期待されたこと、4) 差別や偏見がなくなること、5) 同じLGBであ

り、対外的活動を行う者とのインタビューでの相互性、6)『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動について、の6つに着目し、考察した。

#### (1) 仕事や人間関係、年齢の影響

Hが当事者支援活動を始めた背景には、レズビアンであること以外も複数関係していた。仕事の内容や人間関係の『縁』、50歳になったことがあげられた。『燃え尽き症候群』のような経験など、重要で危機的であった仕事を行う中、様々な人との『縁』に『助けられてきた』ことで、人生を振り返る50歳になったときに、社会、地域への『貢献』、『恩返し』として当事者支援活動を始めた。このようなレズビアンであること以外の経験が、「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2014) という強みとしての意味をもって当事者支援活動を始める背景になっていた。また、これらのレズビアンであること以外の背景は、当事者支援活動を始めた後も、Hのその支援活動を支える役割を果たしていた。

#### (2) レズビアンである『自分自身も見つめ』ること

レズビアンであることによって経験してきたネガティブな出来事について、Hは上述のような仕事内容の影響で『脇に置いてき』ており、50歳で当事者支援活動を始めるときまでに、それらを決して受け入れることやポジティブに内在化してきたわけではなかった。Hにとって、そのような『自分自身も見つめ』、自分の生き方について考える機会としても当事者支援活動は機能しているようであった。Vaughan et al. (2012) や、Riggle et al. (2014) の説明では十分な理解を得られないが、第3章のBの語りで述べたように、斉藤(2019)などの研究が参照できた。すなわち、Bの人生やこれらの先行研究と同じように、Hにとっても当事者支援活動が自分も支えられるために機能しようとしていたと考えられた。

#### (3) 当事者支援活動での出会いや期待されたこと

実際に当事者支援活動で10代、20代の当事者の話を聴いたことや、地元で活動を強く求められていたことも、強みとして当事者支援活動を行う理由になっていたかは定かではないが、少なくとも、継続して行う理由にはなっていた。

#### (4) 差別や偏見がなくなること

ここまでに示した経験で捉えれば、当事者支援活動は概ね他者も自分も支えられるものと意味づけられる出来事であったと理解できるが、その当事者支援活動を『しんどい』と語ったこともあった。それは、差別や偏見がなくなること、支援者を担うからこそ理解しているため、であった。本来当事者支援活動に求めていた『自分自身も見つめ』る機会として機能すること、自分を支えることは、実際には『向き合えてない』と十分に実感されていなかったことも語った。周りのためという意識の方が強くなり、当事者支援活動を辞めることも考えにいれているほどであったことから、この差別や偏見がなくなることへの直面は、それほどHを『しんどい』気持ちにさせていることが窺えた。

#### (5) 同じLGBであり、対外的活動を行う者とのインタビューでの相互性

最後に、インタビューにおけるHとIntの相互性、特に、Hと同じLGBであり、対外的活動を行っていたIntと話をした経験の影響があげられた。上述の通り、Hは当事者支援活動を辞めることも考えにいれるほど、『自分自身も見つめ』ることが難しく、『しんどい』思いをしていた。しかし、Hのそのような語りに対して、Intは〈自分に意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、分からないもんな〉と感想を述べた。その後、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動を行おうとしていることをHが語った。これまでのネガティブな経験が、ポジティブで未来志向な意味に変容したこのインタビューの経験はHにとって重要な価値を持ったと考えられた。Winslade & Monk (1991/2001)は、新たなストーリーを生成するためには、そのストーリーを聴き、支持し、発展に貢献する聴衆がいることが求められるとされる。偶然ではあるが、IntがHと同じくLGBで、対外的活動を行っていたために、その経験の理解ができ、Hのストーリーを支持し、感想を述べる形で発展に貢献する聴衆になったのではないかと考察された。

#### (6) 『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動

Hにとっての当事者支援活動は、インタビューにおけるIntとの相互性を経て、最終的には他者も自分も支えられるという強みとしての意味を持って機能しようとしていた。第3章のBや斉藤(2019)の事例のような認識であった。第6章で着目した考察からまとめられるHの語りを取り上げた意義は、1) 第3章、第4章と同じように、当事者支援活動にはやはり自分も支えられるため、という目的が込められること、しかし、2) 当事者支援活動を行うからこそ、差別や偏見がなくならないことを実感し、自分は十分に支えられないと感じること、同時に、3) 当事者支援活動を辞める選択が出るほど、先行研究で述べられたような他者を支援するという強みも実感されづらくなること、ただし、4) Hの人生を支持し、発展に貢献できる、同じLGBで対外的活動を行っているような者と話し合える場が、当事者支援活動が他者も自分も支えられるという強みとしての意味を持って再び実感されることにつながることに、とされた。

## 第2節 自分も支えられるための当事者支援活動

本研究の3人のナラティブはそれぞれ個別的なものであり、示された当事者支援活動の背景が一つでも欠ければ、実際には行っていなかったかもしれない。しかしながら、自分も支えられるために当事者支援活動をしていたことは共通していた。Bは自分の居場所づくりのために、Cは『セルフヘルプ』のために、Hはレズビアンであったことでネガティブな経験をしてきた『自分自身も見つめ』るために、当事者支援活動を始めた。3人の当事者は、LGB アイデンティティ発達に関する研究が発展する当初から示されてきた、セクシュアリティへの混乱 (Cass, 1979 ; Troiden, 1989) や、孤独感 (高藤・岡本, 2017)、内在化された同性愛嫌悪に関する研究の中で示されてきた、自己への嫌悪感 (Shidlo, 1994) やスティグマ (Ross & Roser, 1996) など一部抱えながら、その対処として、当事者支援活動に臨んでいたのである。Mohr & Kendra (2011)のLGBISでいえば、Bは「受容懸念」、Cは「内在化された同性愛嫌悪」、Hは「困難なプロセス」に近いかもしれない。Vaughan et al. (2012)や、Riggle et al. (2012)のような実証主義の研究では見出せなかった視点といえる。

ただし、自分が支えられることを当事者支援活動に求める可能性はいくつかの研究から言及できた。斉藤 (2019) は特定の当事者支援団体のフィールド調査から、団体内の問題や葛藤について取り上げ、支援者側に立つ者が、その活動の中で、「対外的活動と対内的活動」を「バランス」をもって行うことが必要である、と語っていたことを示した。他者の支援をしながらも、自分が当事者として受けてきたネガティブな側面について支えられる機会も求めているということであった。第2章の研究でも、当事者支援活動を始めようと思うにあたって、一定の【LGBであることに対する落ち着いた態度】が必要であったが、〈状況への対処〉が同時性をもつことが認められていた。LGBであることの強みに関する質的研究を行ったRiggle & Rostosky (2012)も、各強みは相互作用する関係にあることを指摘していた。Riggle & Rostosky (2012)の述べる、「メンター、ロールモデル、アクティヴィスト」としての強みを発揮し、他者の支援をしながらも、同時に「自覚、洞察、成長」や「自己コントロール」として自分にとっての強みとなるということはある。

第3章～第5章から述べることができる本研究独自の意義は、1) 自分も支えられることの実感を得ていることが、先行研究で述べられるような強みとして当事者支援活動が行われるために必要であったという点と、2) その者の人生を支持し、発展に貢献できる者と話し合える場があることで、改めて自分も支えられているという強みを実感できる、ということである。以下、この2点に沿って本研究の意義をまとめる。

### 1. 自分も支えられていることの実感

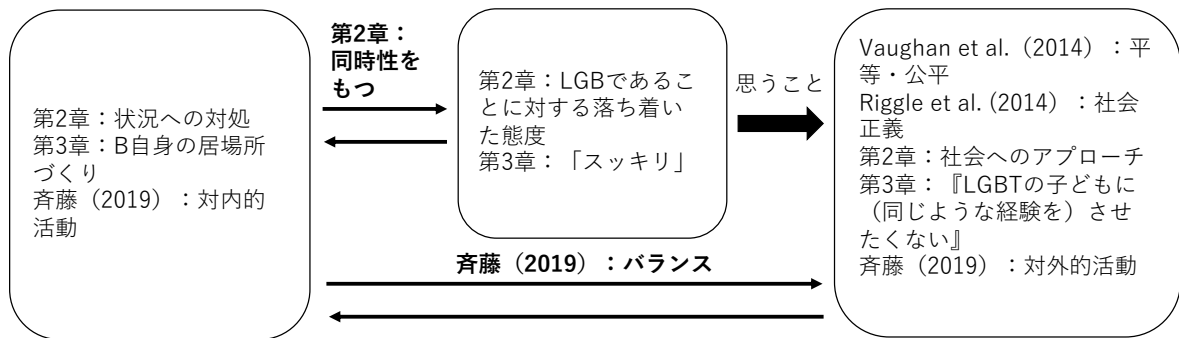


図4-1（再掲） 第2章，第3章，斉藤（2019）の結果と考察の簡略

まず，自分も支えられることの実感の必要性についてである。Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」やRiggle et al. (2014)の「社会正義」で述べられるような強みとして当事者支援活動が行われるためには，他者だけでなく，自分も支えられるという目的があり，さらには，「実際に自分も支えられていることが当事者支援活動の中で実感されていることが重要」であったことが本研究で示された。斉藤（2019）の言及に則って本研究の意義を述べれば，「対外的活動と対内的活動のバランス」が取れないとどうなるのか，について，斉藤（2019）では十分に説明されていなかったが，“当事者支援活動がその者にとっての強みでなくなってしまう”ということが，本研究で新たに明らかになった，となる。

当事者支援活動に他者も自分も支えられる目的があり，実際の活動の中でも自分も支えられていることが実感されていると考えられたのはBであった（図4-1）。自分の性への理解に『スッキリ』したと，ある程度の受容的態度を持ちながらも，『LGBTの子どもに（同じような経験を）させたくない』という気持ちと，B自身の居場所を作りたい気持ちの両方を持って，当事者支援活動にインタビュー現在まで臨んでいた。他者も自分も支えられる機会になっていたと思われる。

Cの場合は，当事者支援活動に『セルフヘルプ』のみを求めた（図4-2）。第2章や第3章のBは，【LGBであることに対する落ち着いた態度】を示すなど，ある程度同性愛への受容や，対外的活動の意識が同時にあった上で，〈状況への対処〉行動として居場所づくりを行うことなどを当事者支援活動の目的としていたが，CはLGBである自分の『セルフヘルプ』，第2章でいう〈状況への対処〉のみを目的としたことを語った。そのようなCの場合は，当事者支援活動を辞めており，直結して捉えられていた「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や，「社会正義」(Riggle et al., 2012) という強みや，『セルフヘルプ』とCが語ったものに近い「自己コントロール」(Vaughan et al., 2012) の強みも実感されていなかった。

Hの場合は，自分も他者も支えられることを当事者支援活動の目的にはしていたが，実際に行ってみると自分も支えられている実感はあまり得られていなかった（図5-1）。支援者を担うからこそ差別や偏見がなくなることを確かに気づき，当初目的としていた『自

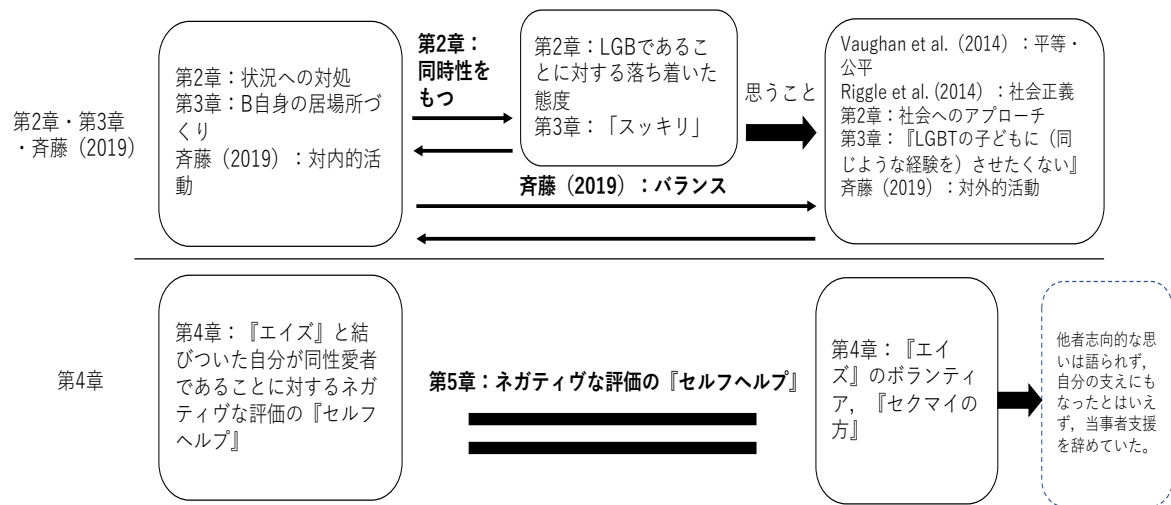


図4-2 (再掲) 第2章, 第3章, 齊藤 (2019) と第4章の結果と考察の比較

分自身も見つめ』る機会に当事者支援活動になることは難しく、『しんどい』思いをしていた。さらには、当事者支援活動を辞める選択も出ており、H自身の中では、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」やRiggle et al. (2014)のいう「社会正義」で述べられる強みも経験されづらくなっているようだった。

以上より、この他者だけでなく自分も支えられている、という実感が、先行研究で述べられるような強みとして当事者支援活動を行う重要な背景になっていると考えられた。このような実感の必要性は、石丸 (2001, 2007a) やRiggle & Rostosky (2012)の述べるような、LGBの独自性に関連する内容とは言えず、他のマイノリティにも共通するかもしれない。例えば、セルフヘルプグループ (以下、SHG) に関する研究が参考になる。白田 (2013) は、実際の当事者の声からではないが、これまでのセルフヘルプグループ (以下、SHG) の

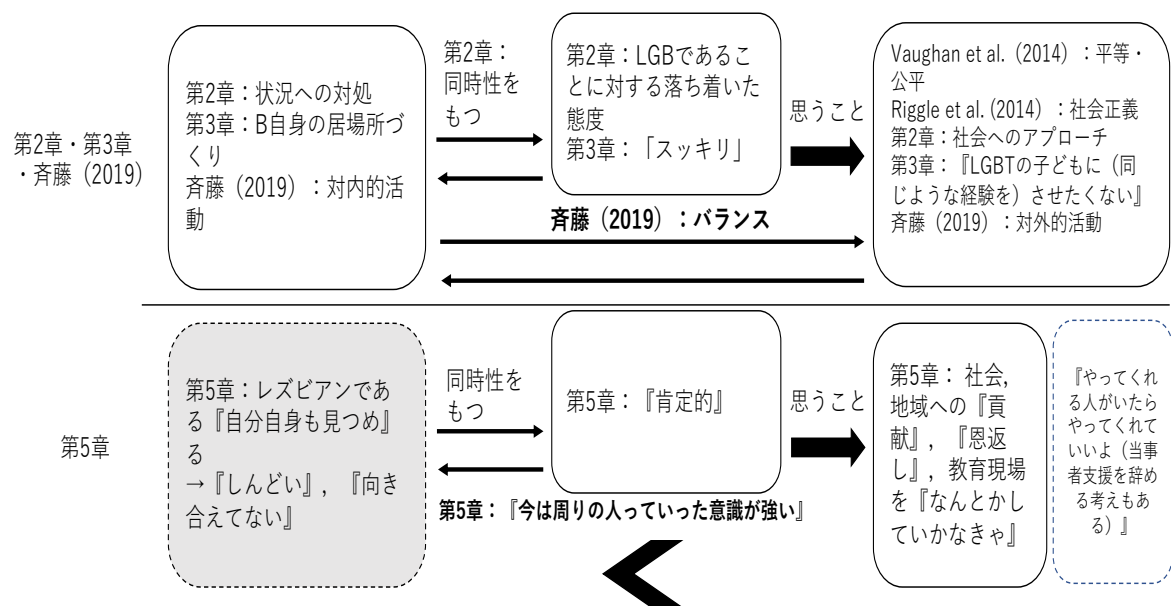


図5-1 (再掲) 第2章, 第3章, 齊藤 (2019) と第5章の結果と考察の比較

言論から、SHGには、相互の支え合いという構造はあまりみられず、実際には支援者-被支援者関係があること、一方で、支援者側と捉えられている者も特有の生きづらさを有していたからこそ、SHGを始めたわけで、自己利益がなければSHGは成立しないのではないかと、ということの問題提起した。川田(2017)は、自身で「ひきこもりサミット」という活動を立ち上げたが、社会的通説や研究者が創り上げてきた「共通の問題を持つ人たちによる、相互援助」というSHG像に惑わされ、ひきこもりという共通性だけで、様々な背景を持った当事者が集まってきてしまい、「運営の困難さ」を感じていたことについて言及した。さらには、「自分自身を生きたい!」という価値観のもと、改めて活動することで「運営の困難さ」は感じなくなったことも述べた(川田, 2017)。本論で取り上げた3人の当事者は、『スタッフ』、講師、電話相談の仕事としての活動を行っており、SHGではなく、支援者役割を担っていたことは明確であった。しかし、他者を支援しながら、自分のニーズにも応えられる活動であることの重要性を指摘した点で川田(2017)の事例は本論と一致する。他のマイノリティにも当てはまる可能性がある。

## 2. その者の人生を支持し、発展に貢献できる者と話し合える場

Hは前述の通り、自分も支えられているという実感はあまり得られず、当事者支援活動で『しんどい』思いをしていたが、この研究のインタビューでのIntとの相互性を通し、当事者支援活動が他者も自分も支えられるという強みとしての意味を持って再び実感していたように考えられた(図5-2)。Hの自分自身に向き合えていない語りに対して、Intは〈自分に意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、分からないもんな〉と感想を述べた。その後、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動をしようとしていることをHが語った。これまでのネガティブな経験が、ポ

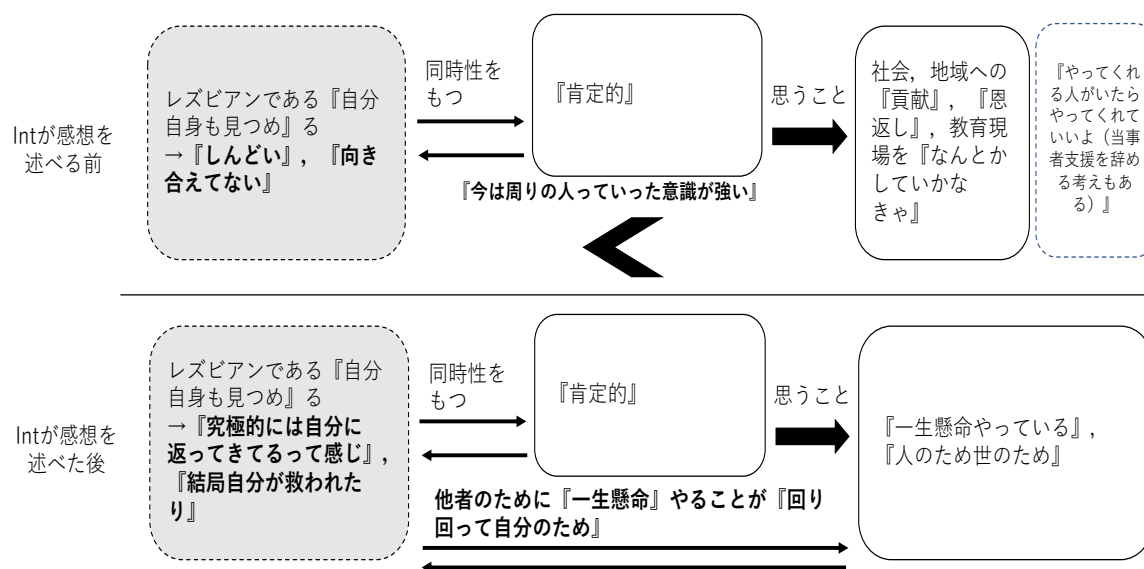


図5-2 (再掲) 第5章におけるIntとHの相互性(Intの属性)の影響による当事者支援に関する語りの変化

ジティヴで未来志向な意味に変容したこのインタビューの経験はHにとって重要な価値を持ったと考えられた。Winslade & Monk (1991/2001)は、新たなストーリーを生成するためには、そのストーリーを聴き、支持し、発展に貢献する聴衆がいることが求められると述べた。偶然ではあるが、Int がHと同じくLGBで、対外的活動を行っていたために、その経験の理解ができ、Hのストーリーを支持し、感想を述べる形で発展に貢献する聴衆になったと考えられた。



## 第3節 研究の展望

第3章～第5章をもとにした今後の研究の展望について、1) 3人の当事者への新たなインタビュー、2) 他の当事者へのインタビュー、3) 他の方法を用いた研究の3点をあげる。

### (1) 3人の当事者への新たなインタビュー

まず、インタビュアーとインタビューイの相互性の考察から、インタビューの構造を再考し、3人に再度インタビューを行うことがあげられる。各章で示したように、本インタビューであったからこそ得られた語りも多かったが、性指向についての思いを話すことは決められていたため、例えばBのように、『正義感』や『自分が好き』などの他の側面との関連について、重要であったにも関わらず、語ることを難しくさせた可能性がある。本研究で特筆した、Hの『回り回って』自分自身も『救われ』ようとしているという語りも、その後の経験について筆者は強く関心を持っているが、この点を語る時間を設けなかった。LGBであることや当事者支援活動について尋ねる姿勢は維持しつつ、より人生全般を自由に語れる構造で新たなインタビューを行うことは、今後の研究展望の一つとしてあげられる。

### (2) 他の当事者へのインタビュー

2点目に、理論的サンプリングの観点から、他の当事者へのインタビューを行うことが考えられる。第3章から第5章にかけて得られた知見から、1) ジェンダー、2) 年代、3) 職業経験、4) 人間関係、5) 地域性を一つの観点として、理論的サンプリングを行うことができる。

### 思春期以前のLGBを対象にした研究の必要性と倫理的配慮に基づく課題

特に、年代を観点とし、思春期以前のLGBを対象にした研究は強く求められる。なぜなら、国内外で当事者の声に基づいた研究は少ないためである。少ない理由の一つに、倫理的配慮に基づく課題があげられる。未成年のLGBを対象にした場合、親や法定代理人（親と法定代理人の両方を指すとき保護者とする）から同意を得ることをめぐって、研究を実施できない事態が生じやすい。LGBの場合、LGBアイデンティティや同性間性交渉の経験を親に話しておらず、カミングアウトを恐れることが多いことは高藤・岡本（2017）や、石丸（2001, 2007b）で示された通りである。一方で研究者は、未成年を対象にした研究を行うために、保護者から研究の同意を得るといった一般的な倫理的配慮も重要であると考え（Mustanski, 2011）。研究者は、この課題と配慮の間で葛藤し、結局、研究計画の変更や断念を行っているという（Miller, Forte, Wilson, & Greene, 2006; Mustanski, 2011）。実際にMiller et al. (2006) は、未成年で黒人のMSM（男性同士の性交渉を行う者）への

疫学研究を試みたが、研究審査で研究対象者の保護者の同意を求められたため、断念した事例を示した。潜在的ニーズはあるかもしれないが、この倫理的配慮を理由にそもそも研究を実施できない状況にあると考えられる。

この保護者の同意をめぐる葛藤に関して、国外では、一定の視座が示された。後述の通り、保護者の同意を得ず研究を実施する方法が提案された (Council for International Organizations of Medical Sciences, 以下, CIOMS と略記, 2016/2018; Mustanski, 2011)。

「CIOMS 生物医学指針 (CIOMS, 2016/2018)」では、薬物、性感染症、虐待、ドメスティックバイオレンス、妊娠、中絶と並んで、セクシュアリティに関する意識や行動の研究を、保護者の同意の免除を認める可能性がある研究の一つと明記されている。Mustanski (2011) は、保護者の同意の代替としてどのような倫理的手続きを行うべきか具体的に示し、1) 研究対象者の保護機能を強化するために、保護者以外の権利擁護者の許可を得ること、2) 人権を尊重するために、同意形成能力を評価し、本人の同意を有効とみなすこと、3) リスクに備え独立したサポート体制を提供すること、をあげた。

実際に Mustanski (2011) の示した倫理的配慮は、複数のフィールドで利用され、思春期以前を対象にした研究が行われている。2020 年であれば、主に、Gender and Sexuality Alliances (GSA, 学校内に設置された LGBTQ+ 権利擁護組織) をフィールドにした研究 (Calzo, Poteat, Yoshikawa, Russell, & Bogart, 2020 ; Ceccolini, Poteat, Calzo, Yoshikawa, & Meyer, 2020 ; Poteat, Godfrey, Brion-Meisel, & Calzo, 2020) と、インターネット上で協力を募った研究 (Anhalt, Toomey, & Shramko, 2020 ; Moskowitz, Macapagal, Mongrella, Perez-Cardona, Newcomb, & Mustanski, 2020 ; Mustanski, Moskowitz, Moran, Newcomb, Macapagal, Rodriguez-Diaz, Rendine, Laver, Li, Maston, Talan, & Cabril, 2020 ; Porta, Gower, Brown, Wood, & Eisenberg, 2020 ; Visser, 2020) があげられる。前者は、GSA の代表者の許可のみを手続きとし、後者は同意能力の評価のみを手続きとしていたことから、研究フィールドによって Mustanski (2011) の倫理手続きも選択されて行われているのが現状のようだった。また、Mustanski (2011) 以上の手続きを行っていた研究もあった。Pickles (2020) は、「憎しみ (hate)」を研究テーマとし、インタビューを用いることになったため、ネガティブな感情が喚起されるリスクの高さを懸念し、インタビューの場に支援者を同席されることや研究協力撤回のタイミングを複数回設けることなどをしていった。リクルートのあり方や研究テーマ、調査方法の構造度などの観点から、倫理的配慮を独自に検討することも求められていた。

以上より、本邦でも思春期以前の LGB を対象にした研究を行うことが可能になってきたため、とりわけ今後実施されるべきと考えられる。ただし、10 歳未満を対象に、保護者の同意なしに行われた研究は現状見当たらない。未成年の LGB が研究対象となる正当性を示すことが研究実施の前提にあることは、どの年齢においても同様であるが (CIOMS, 2016/2018), とりわけ 10 歳未満の研究は、研究実施の是非から慎重に検討されるべきである。

### (3) 他の方法を用いた研究

最後に、他の手法の研究を用いていくことである。第3章～第5章は、主として当事者の個別性を尊重する社会構成主義に立った研究を行い、その結果得られた知見も多かったが、ありのままを捉えるあまりに結果の明瞭さには欠けた。当事者支援活動をする多くのLGBが、自分も支えられることを求めているのか、当事者支援活動を行っていない者との比較をしたときどのように経験の様相は異なるか、自分も支えられることの両方の実感がないと、従来の当事者支援活動の強みの機能は本当に発揮されないのか、などを実証主義の立場から明らかにすることも、一つの研究の展開として行っても良いかもしれない。

## 第7章

### 総合考察

## 第1節 各章の要約

### 1. 本研究の目的の整理

本研究では、本邦のLGBが、自身の性指向にどのような経験をしているか、特に「LGBであることの強み」に着目し、個別性を尊重して明らかにすることを目的とした。本研究の構成は図1-1に示した通りであった。

第2章では、本邦のLGBの性指向に基づく経験と、その経験に影響を与える要因について探索し、モデルを示すこととした。個別性の尊重を一つの問題意識としていたが、第1章における先行研究のレビューから、そもそも本邦では、文化・歴史的背景を考慮に入れた上での客観的知見が得られていないことが明らかになった。どのような強みに着目すべきか、先行研究から見出すことも可能であったが、本邦のLGBを対象に、「客観的」、「一般的」知見を目指す立場から、今一度当事者の経験の様相を整理した上で定めても良いように考えられた。そのため、まずは客観的理解を目指そうとするポスト実証主義の立場で、LGBの性指向に基づく経験と、その経験に影響を与える要因の関係性を示す、一モデルを生成することを目的に研究を行った。具体的には、先行研究に捉われない発想を得るために、本邦の17名のLGBに低構造度のインタビューを実施し、その逐語をKJ法(川喜田, 1986)を用いて分析した。考察では、得られた結果と、Mohr & Kendra (2011)の研究をはじめとする、様々な国外の先行研究と比較し、新しく得られたと考えられる経験、特に第3章以降で着目すべきLGBの経験を見出した。その経験に影響を与える要因についても、文化・歴史的背景の影響について言及したいいくつかの文献との比較を通して検討した。

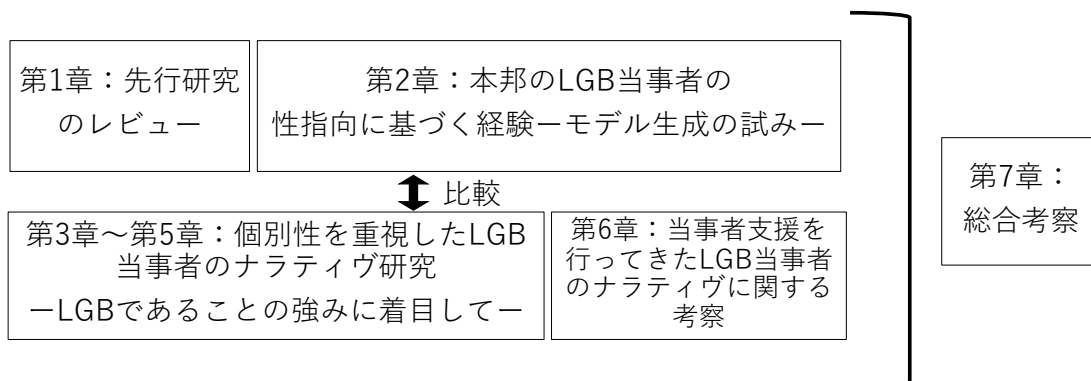


図1-1 (再掲) 本研究の構成

第3章～第5章では、新たに3人のLGBにインタビューを行い、その逐語を対象ナラティブとしながら、LGBであることの強みで着目されていることがどのように経験されているかを明らかにした。先行研究や第2章で示されたモデルと比較をしながら、文化・歴史的背景以外にも様々な側面を持つ当事者の個別性を尊重した理解を試みた。第2章の研究から、第3章以降は、強みの中でも特に、LGBが当事者支援活動に着目した。Vaughan et al. (2014)の示した「平等・公平」、「チームワーク」や、Riggle et al. (2014)の尺度における「社会正義」の特徴は、どのような背景から獲得することになったのか、より詳細な検討が必要と考えられたためであった。そのため第6章では、第3章～第5章の研究対象となった当事者支援活動にのみ着目し、考察をまとめた。

以下、本研究の意義を述べる前に、それぞれの章における研究結果と考察をもう一度整理して示す。

## 2. 各章の要約

### (1) 第2章の要約：本邦のLGBの性指向に基づく経験-KJ法を用いて-

第2章は、LGB17名への半構造化インタビューを実施し、KJ法で分析をすることで、本邦のLGBが性指向に基づいてどのような経験をしているか、当事者へのインタビューから探索的に明らかにした。結果では、LGBへの評価や態度の語りで構成されたグループ編成の一覧と、性指向に基づく経験と影響を与える要因について、図もあわせて示した。

本研究のLGBへの評価や態度の語りで構成されたグループとMohr & Kendra (2011)のLGBISの各因子との比較をすると、多くはMohr & Kendra (2011)を代表する先行研究で説明できる経験であった。このことから、Mohr & Kendra (2011)などの国外の当事者を対象にした研究は、本邦の当事者理解にも有用と思われた。

Mohr & Kendra (2011)とは異なるが、他の先行研究で示されてきた知見と類似するグループも示された。具体的には、【社会へのアプローチ】内にある、[当事者として役に立ちたい]や、[社会に変化を求める]グループがあげられる。これらはVaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」の因子に類似する語りで構成された。第3章にも通じる結果で、本邦でも、正義感を持って当事者支援活動を行う者や、変化を求める者がいるといえた。

ただし、LGBによって、支援的態度や実際の行動に差があったことは特筆すべき点となった。[当事者として役に立ちたい]と実際に当事者支援団体に所属するか、立ち上げるかなどしてアクティビストになる、もしくは、当事者支援を生業としている当事者の語りや、[社会に変化を求める]が、実際の活動はなく、変容に賛同する当事者の語りやグループが分けられた。Vaughan et al. (2014)や、Riggle et al. (2014)では一まとめになっており、尺度作成の参考とされたRiggle & Rostosky (2012)の質的研究でも、他者に貢献するレベルに差はあることを認めつつも、「メンター、ロールモデル、アクティビスト」と最終的に集約された。この差にどのような背景があるのかは本研究では明らかにならな

かったが、[当事者として役に立ちたい]のグループのように、より他者志向的な経験の方が、当事者にとって自分の強みとして認識されやすく、ポジティブに作用しうるのではないかと考えられたため、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景が明らかになることが、研究の展望の一つになった。

Mohr & Kendra (2011)とは異なる知見として、[LGBで申し訳ない]、[期待に応えられない]、[LGBでいられてありがたい]というグループもあげられた。どれも自分自身の性指向への評価や態度ではあるが、ポジティブにもネガティブにも他者の期待や言動に配慮し、かつ、「謙っていた(自分の立場を低くした態度をとっていた)」点でその他のグループとは別と捉えられ、一次グループのまま残された。これらの語りは類似する言及が見られそのような国外の家族との関係性に関する研究(D'Augelli, 1998; Savin-Williams, 2001; Newman & Muzzonigro, 1993)や、アイデンティティの「世代性(Erikson, 1959/2011)」に関する研究(Rostati et al., 2021; Rosebrough, 2003)とも、異なる結果のように思われた。すなわち、他者の期待や言動に配慮し、かつ、謙る経験も、新たに得られた知見であった可能性が十分に考えられた。

これらの評価や態度に与えた影響として、図解化、叙述化の結果から、他者とのつながりを重視する傾向、特に、家系のつながりや家族内の伝統的価値観重視の根強さがあつたと考えられた。LGBアイデンティティに影響を与えた経験や社会的背景の中で、[古い「家」]というグループが得られた。現在の家族から問われる態度だけではなく、古くからあつた家族観が自分の性指向に基づく経験に影響を与えていると、LGBが評価していることを示していた。古くからあつた家族観について、アジア文化圏民族が、他民族と比較し家族集団との繋がりを重視し、家族孝行が行動を規定する可能性は、これまでも指摘されている(Fukuyama & Ferguson, 2000)。すなわちアジアに含まれる本邦でも、欧米研究と比較して家系のつながりや家族内の伝統的価値観の重視が根強いため、特に、他者の期待や言動に配慮し、謙る経験を作つたと考えられた。

課題の一つとして、本研究がポスト実証主義の立場での研究であつたことがあげられた。一部に当事者の実際のインタビューを提示したが、客観的知見を目指し、性指向に基づく経験とそれに影響を与える要因について、一モデルを生成する研究であつたために、LGBの個別的経験に迫ることが難しかった。例えば、支援的態度や行動にLGBの中で差が生じる背景が明らかにならなかつた点や、他者に配慮し、謙る経験と[古い「家」]グループの直接的関係が示せなかつた点があげられた。ナラティブ研究などの手法でLGBの個別性を尊重しながら、理解を深めることが求められた。

## (2) 第3章の要約：一人のバイセクシュアルのナラティブ-自分も支えられるための当事者支援活動-

第3章は、一人のバイセクシュアル(B)へのインタビューを対象ナラティブとしながら、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動に

着目しながら明らかにすることを目的とした。第2章から、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景が明らかになることが、研究の展望の一つになったことが目的を設定した理由であった。Bのナラティブから考察されたことは、主に1) BのジェンダーとLGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観と、2) B自身が支えられる必要のあったこと、3) “性と他の側面の関連は分からない”ことの、3つの特徴的な考察が得られた。

### 1) BのジェンダーとLGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観

Bが当事者支援活動を始めた一つの背景に、ジェンダーでも出生時性別や身体的性別に違和感を感じていたことと、それに基づく経験があげられた。BはLGBTQ+コミュニティの中にも性役割の二項対立的価値観がみられ、ネガティブな経験をしていた。そのことが、『LGBTの子どもに(同じような経験を)させたくない』と、そして、レズビアンやトランスジェンダーコミュニティに『なじまなかった』ため、B自身の居場所を作ろうと、当事者支援を始めることにつながっていた。

### 2) B自身が支えられる必要のあったこと

BのジェンダーとLGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観にも関連するが、当事者支援活動でB自身の居場所を作ろうとしたことは、特徴的であった。他者ではなく、自分が支えられようとしていた点は、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」に類する語りとは一致しないためであった。一方で近年は、この当事者支援活動を行う者自身がその活動の中で支えられる場合があることについて、斉藤(2019)の「対内的活動」に関する言及など、わずかながら事例が見られる状況になった。

### 3) “性と他の側面の関連は分からない”こと

ジェンダー以外の側面も影響を与えている可能性があった。例えば、元々『正義感』を持っていたかもしれないこと、『他の人がなんと言おうとも、僕は自分が好き』である話があげられた。ただし、このようなセクシュアリティ、ジェンダー以外の自分の評価や態度が、どの程度バイセクシュアルであることと関わりを持っているかは明らかにならなかった。当事者支援活動の全てを、B自身も明確にしないまま経験していたことが推察された。

他に、第2章で特筆した[LGBで申し訳ない]に類する話もBは語った。“自分を『化け物』と思っていた”ナラティブでの、『土下座して謝りたい気持ち』や『ごめんなさい』という言葉であった。Bにとっては、それほどまでに大きくネガティブな経験であると考えられたが、家族関係や文化・歴史的背景など、その他の側面の影響があったか、については迫ることができなかった。

最後に、これらのナラティブが如何にして得られたか、インタビュアーとインタビューの相互性に基づいて考察した。特に、1) 筆者がジェンダーに関心を寄せていた点と、インタビューの構造から考察を深めた。

### (3) 第4章の要約：一人のゲイのナラティブ-他者も自分も支えられなかった当事者支援



## 活動

第4章では、一人のゲイ（C）のインタビューを対象ナラティブとしながら、第3章に引き続き、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動に着目しながら明らかにすることを目的とした。Cのナラティブから得られた特徴的な考察として、1)『学生運動』、『エイズパニック』の時代を生きたと、2)当事者支援活動に『セルフヘルプ』のみを求めたことの、2つがあげられた。これらの影響を受け、Cにとって当事者支援活動は先行研究の述べるような強みとなっておらず、3)他者も自分も支えられなかった当事者支援活動になった。この3点に沿って第4章を要約する。

### 1) 『学生運動』、『エイズパニック』の時代を生きること

Cが当事者支援活動を始めたことには時代背景の影響が大きかった。まず、『学生運動』の時代を生きたことは、当事者支援活動に直接関係はしていないが、重要な位置づけにあり、従来のLGB研究でネガティブなものと考えられていたカミングアウトや、異性愛中心主義の規範、性規範に捉われることなく、『アウトサイダー』に、ポジティブに生きることにつながった。多元的な考えが同時に存在していた『学生運動』の時代（小杉，2015）を大学生として生きたことは、Cの人生に多くのポジティブな影響を与えたと考えられた。

次に、『エイズパニック』の時代を生きることがあった。エイズに関連する死、事故、事件などのことであり、同性愛者とエイズが一体して問題視される時代（広瀬，1993）は、『アウトサイダー』なCの生き方を否定するような経験であったと捉えられた。これまでの生き方を一変させなければならなくなり、後述の通り、『セルフヘルプ』として当事者支援活動を始める背景の一つとなったと考えられた。

### 2) 当事者支援活動に『セルフヘルプ』のみを求めたこと

『エイズパニック』の時代を生きたことの流れの中で、『アウトサイダー』な生き方を一変させなければならなくなったCは、一つ的手段として、『エイズ』と結びついたゲイであることに対するネガティブな評価を『セルフヘルプ』するために、当事者支援に携わった。この『セルフヘルプ』こそが、当事者支援活動を始めた大きな背景であったと考えられた。

Cの語りの特徴は、『セルフヘルプ』のみを当事者支援活動に求め、ゲイであることを受容がなかったことであった。第2章や第3章のBは、【LGBであることに対する落ち着いた態度】を示すなど、ある程度同性愛への受容があることと、〈状況への対処〉行動が同時にあった上で、「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2014) という強みとしての意味をもって当事者支援活動が行われていたが、第4章のCは、この同性愛への受容がほとんどなく、自分の『セルフヘルプ』、第2章でいう〈状況への対処〉のみを目的としていた。

### 3) 他者も自分も支えられなかった当事者支援

Cのような、自己志向的な目的のみの当事者支援活動の場合、当事者支援と直結していた「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2012) という強みとしての意味や、「自己コントロール」(Vaughan et al., 2012) も実感されず、自

分を結局支えられていなかった。Cの場合は特に、『アウトサイダー』なCのこれまでのポジティブに捉えていた生き方を支える経験にならなかったように考えられた。すなわち、Cの語りから新たに言えることは、1) 他者を支援しようという目的はほとんどなく、〈状況への対処〉のみを目的として当事者支援活動を始めることがあるが、2) そのような目的の当事者支援活動の場合、先行研究で説明された強みとしての機能は実感されず、自分自身も支えられてない可能性があった。

第2章の他の考察の視点に基づく語りも得られた。『アウトサイダー』に生きることを、兄弟の期待に応えられないことと捉える経験は、第2章でのLGBでないコミュニティの期待や言動に配慮し、かつ、謙っている、[期待に応えられない]グループの語りをより具体的にあらわした。やはり、家族への孝行が行動を規定するという点で、Fukuyama & Ferguson (2000)と一致し、期待に応えられないと思う気持ちには、本邦の文化・歴史的背景が直接的に関係あるように考えられた。Cはさらに、その時の感情を『裏切っている』気持ちと具体的に語った。すなわち、Cの語りから、1) [期待に応えられない]ことは、本邦の文化・歴史的背景と直接関連をもった経験である可能性があることと、2) 『裏切っている』という罪や自己責任の意識を生成することがあること、さらには、3) 本邦においては未だ罪や自己責任といった捉え方が見られることが示された。

最後に、これらのナラティブが如何にして得られたか、インタビュアーとインタビューの相互性に基づいて考察した。特に、1) 筆者がCの高齢期であることに関心を寄せていた点と、2) インタビューの構造から考察を深めた。

#### (4) 第5章の要約：一人のレズビアンのナラティブ『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動

第5章では、一人のレズビアン(H)のインタビューを対象ナラティブとしながら、引き続き、性指向に基づく個別的経験について、特にLGBであることの強み、当事者支援活動を行うことに着目しながら明らかにすることを目的とした。Hのナラティブで着目した点は、1) 仕事や人間関係、年齢の影響と、2) レズビアンである『自分自身も見つめ』ること、3) 当事者支援活動での出会いや期待されたこと、4) 差別や偏見がなくなること、5) 同じLGBであり、対外的活動を行う者とのインタビューでの相互性であった。それらの影響を受け、Hは、6) 『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動について語った。この6点に沿って第5章を要約する。

##### 1) 仕事や人間関係、年齢の影響

Hが当事者支援活動を始めた背景には、レズビアンであること以外も複数関係していた。仕事の内容や人間関係の『縁』、50歳になったことがあげられた。『燃え尽き症候群』のような経験など、重要で危機的であった仕事を行う中、様々な人との『縁』に『助けられてきた』ことで、人生を振り返る50歳になったときに、社会、地域への『貢献』、『恩返し』

として当事者支援活動を始めた。このようなレズビアンであること以外の経験が、「平等・公平」(Vaughan et al., 2012) や、「社会正義」(Riggle et al., 2014) という強みとしての意味をもって当事者支援活動を始める背景になっていた。また、これらのレズビアンであること以外の背景は、当事者支援活動を始めた後も、H のその支援活動を支える役割を果たしていた。

## 2) レズビアンである『自分自身も見つめ』ること

レズビアンであることによって経験してきたネガティブな出来事について、H は仕事の影響で『脇に置いてき』ており、50歳で当事者支援活動を始めるときまでに、それらを決して受け入れることやポジティブに内在化してきたわけではなかった。H にとって、そのような『自分自身も見つめ』、自分の生き方について考える機会としても当事者支援活動は機能しているようであった。Vaughan et al. (2012) や、Riggle et al. (2014) の説明では十分な理解を得られないが、第3章のBの語りで述べたように、斉藤(2019)などの研究が参照できた。すなわち、Bの人生やこれらの先行研究と同じように、Hにとっても当事者支援活動が自分も支えられるために機能しようとしていた。

## 3) 当事者支援活動での出会いや期待されたこと

実際に当事者支援活動で10代、20代の当事者の話を聴いたことや、地元で活動を強く求められていたことも、強みとして当事者支援活動を行う理由になっていたかは定かではないが、少なくとも、継続して行う理由にはなっていた。

## 4) 差別や偏見がなくなること

ここまで示した経験で捉えれば、当事者支援活動は概ね他者も自分も支えられるものと意味づけられる出来事であったと理解できるが、その当事者支援活動を『しんどい』と語ったこともあった。それは、差別や偏見がなくなること、支援者を担うからこそ理解しているため、であった。本来当事者支援活動に求めていた『自分自身も見つめ』る機会として機能すること、自分を支えることは、実際には『向き合えてない』と十分に実感されていなかったことも語った。周りのためという意識の方が強くなり、当事者支援活動を辞めることも考えにいれているほどであったことから、この差別や偏見がなくなることへの直面は、それほどHを『しんどい』気持ちにさせていることが窺えた。

## 5) 同じLGBであり、対外的活動を行う者とのインタビューでの相互性

最後に、インタビューにおけるHとIntの相互性、特に、Hと同じLGBであり、対外的活動を行っていたIntと話をした経験の影響があげられた。上述の通り、Hは当事者支援活動を辞めることも考えにいれるほど、『自分自身も見つめ』ることが難しく、『しんどい』思いをしていた。しかし、Hのそのような語りに対して、Intは〈自分に意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、分からないもんな〉と感想を述べた。その後、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動を行おうとしていることをHが語った。これまでのネガティブな経験が、ポジティブで未来志向な意味に変容したこのインタビューの経験はHにとって重要な価値を持ったと考えられた。Winslade

& Monk (1991/2001)は、新たなストーリーを生成するためには、そのストーリーを聴き、支持し、発展に貢献する聴衆がいることが求められるとされる。偶然ではあるが、Int がHと同じくLGBで、対外的活動を行っていたために、その経験の理解ができ、Hのストーリーを支持し、感想を述べる形で発展に貢献する聴衆になったのではないかと考察された。

#### 6) 『回り回って』自分も支えられるための当事者支援活動

Hにとっての当事者支援活動は、インタビューにおけるIntとの相互性を経て、最終的には他者も自分も支えられるという強みとしての意味を持って機能しようとしていた。第3章のBや斉藤(2019)の事例のような認識であった。第6章で着目した考察からまとめられるHの語りを取り上げた意義は、1) 第3章、第4章と同じように、当事者支援活動にはやはり自分も支えられるため、という目的が込められること、しかし、2) 当事者支援活動を行うからこそ、差別や偏見がなくならないことを実感し、自分は十分に支えられないと感じること、同時に、3) 当事者支援活動を辞める選択が出るほど、先行研究で述べられたような他者を支援するという強みも実感されづらくなること、ただし、4) Hの人生を支持し、発展に貢献できる、同じLGBで対外的活動を行っているような者と話し合える場が、当事者支援活動が他者も自分も支えられるという強みとしての意味を持って再び実感されることにつながることを、とされた。

他にも、これらのナラティブが如何にして得られたか、インタビュアーとインタビューの相互性に基づいて考察された。特に、インタビューの構造について、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動を行おうと、Hは語り直したが、実際に『救われ』た経験になっているのか、この点を語る時間を設けなかった。その後当事者支援活動がHにとってどのような意味をもつようになったか、筆者は関心を持っているが、時間を設けなかった点は、本研究の限界といえた。

#### (5) 第6章の要約：LGBの当事者支援活動と強みに着目したナラティブに関する考察-自分も支えられることについて-

第6章では、第3章～第5章にかけて共通して考察された、自分も支えられるために当事者支援活動を行っていたことに主に着目し、先行研究や第2章との差異、本研究の意義をまとめた。本研究の3人のナラティブはそれぞれ個別的なものであるが、共通して、自分も支えられるために当事者支援活動をしていた。Bは自分の居場所づくりのために、Cは『セルフヘルプ』のために、Hはレズビアンであったことでネガティブな経験をしてきた『自分自身も見つめ』るために、当事者支援活動を始めた。3人の当事者は、LGBを対象にした研究が発展する当初から示されてきた、セクシュアリティへの混乱(Cass, 1979; Mohr & Kendra, 2011; Troiden, 1989) や、孤独感(Mohr & Kendra, 2011; 高藤・岡本, 2017)、自己への嫌悪感(Mohr & Kendra, 2011; Shidlo, 1994)、スティグマ(Ross & Roser, 1996)などを一部抱えながら、その対処としても、当事者支援に臨んでいたのであった。Vaughan

et al. (2012)や, Riggle et al. (2012)のような実証主義の研究では見出せなかった視点といえた。

ただし、自分が支えられることを当事者支援活動に求める可能性はいくつかの研究から言及できた。斉藤 (2019) は特定の当事者支援団体のフィールド調査から、団体内の問題や葛藤について取り上げ、支援者側に立つ者が、その活動の中で、「対外的活動と対内的活動」を「バランス」をもって行うことが必要である、と語っていたことを示した。他者の支援をしながらも、自分が当事者として受けてきたネガティブな側面について支えられる機会も求めているということであった。第2章の研究でも、当事者支援活動を始めようと思うにあたって、一定の【LGB であることに対する落ち着いた態度】が必要であったが、〈状況への対処〉行動が同時性をもつことが認められていた。LGB であることの強みに関する質的研究を行った Riggle & Rostosky (2012) も、各強みは相互作用する関係にあることを指摘していた。Riggle & Rostosky (2012) の述べる、「メンター、ロールモデル、アクティヴィスト」としての強みを発揮し、他者の支援をしながらも、同時に「自覚、洞察、成長」や「自己コントロール」として自分にとっての強みとなるということがあり得た。

第3章～第5章から述べることができる本研究独自の意義は、1) 自分も支えられることの実感を得ていることが、先行研究で述べられるような強みとして当事者支援活動が行われるために必要であったという点と、2) その者の人生を支持し、発展に貢献できる者と話し合える場があることで、改めて自分も支えられているという強みを実感できる、ということであった。

### 1) 自分も支えられていることの実感

まず、Vaughan et al. (2014) の「平等・公平」や Riggle et al. (2014) の「社会正義」で述べられるような強みとして当事者支援活動が行われるためには、他者だけでなく、自分も支えられるという目的があり、さらには、「実際に自分も支えられていることが当事者支援活動の中で実感されていることが重要」であったことが本研究で示された。当事者支援活動に他者も自分も支えられる目的があり、実際に活動の中でも自分も支えられていることが実感されていると考えられたのはBであった。自分の性への理解に『スッキリ』したと、ある程度受容的態度を持った後、『LGBT の子どもに (同じような経験を) させたくない』という気持ちと、B 自身の居場所を作りたい気持ちの両方を持って、当事者支援活動にインタビュー現在まで臨んでいた。他者も自分も支えられる機会になっていたと思われた。

C の場合は、当事者支援に『セルフヘルプ』のみを求めた。第2章や第3章のBは、【LGB であることに対する落ち着いた態度】を示すなど、ある程度自身の同性愛への受容や、対外的活動の意識が同時にあった上で、〈状況への対処〉行動として居場所づくりを行うことなどを当事者支援活動の目的としていたが、CはLGBでの自分の『セルフヘルプ』、第2章でいう〈状況への対処〉のみを目的としたことを語った。そのようなCの場合は、当事者支援活動を辞めており、直結して捉えられていた「平等・公平」(Vaughan et al., 2012)

や、「社会正義」(Riggle et al., 2012) という強みや、『セルフヘルプ』とCが語ったものに近い「自己コントロール」(Vaughan et al., 2012) の強みも実感されていなかった。

H の場合は、自分も他者も支えられることを当事者支援活動の目的にはしていたが、実際に行ってみると自分も支えられている実感はあまり得られていなかった。支援者を担うからこそ差別や偏見がなくならないことを確かに気づき、当初目的としていた『自分自身も見つめ』る機会に当事者支援活動になることは難しく、『しんどい』思いをしていた。さらには、当事者支援活動を辞める選択も出ており、H 自身の中では、Vaughan et al. (2014) の「平等・公平」やRiggle et al. (2014) のいう「社会正義」で述べられる強みも経験されづらくなっているようだった。

以上より、この他者だけでなく自分も支えられている、という実感が、先行研究で述べられるような強みとして当事者支援活動を行う重要な背景になっていると考えられた。このような実感の必要性は、セルフヘルプグループ (以下、SHG) に関する研究から (川田, 2017 ; 白田, 2013), 他のマイノリティにも当てはまる可能性もあると考えられた。

## 2) その者の人生を支持し、発展に貢献できる者と話し合える場

上述の通り、他者だけでなく自分も支えられているという実感が、強みとして当事者支援活動が行われるにあたり重要であったが、その実感を得ていない中でも、当事者支援を行う者の人生を支持し、発展に貢献できる者と話し合える場があることで、再び先行研究で述べられるような強みとして当事者支援活動が機能する可能性が考えられたことも、第5章で新たに考察された点であった。H は前述の通り、自分も支えられているという実感はあまり得られず、当事者支援活動で『しんどい』思いをしていたが、この研究のインタビューでの Int との相互性を通し、当事者支援活動が他者も自分も支えられるという強みとしての意味を持って再び実感していたように考えられた。具体的には、H の自分自身に向き合えていない語りに対して、Int は〈自分に意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、分からないもんな〉と感想を述べた後、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動をしようとしていることをH が語った点を取り上げた。Winslade & Monk (1991/2001) は、新たなストーリーを生成するためには、そのストーリーを聴き、支持し、発展に貢献する聴衆がいることが求められると述べた。偶然ではあるが、Int がH と同じくLGB で、対外的活動を行っていたために、その経験の理解ができ、H のストーリーを支持し、感想を述べる形で発展に貢献する聴衆になったと考えられた。

## 第2節 本研究の意義

本研究の主な意義について、先行研究と一致する結果が得られたことに加え、いくつかの結果と考察が得られた。それらの意義について、(1) 学術的意義、(2) 社会的意義、(3) 臨床的意義、の3点に基づいて本邦の文化・歴史的背景の影響を中心に得られたこと、が特筆すべき点であるだろう。以下、各項目に沿って詳述する。

### 1. 学術的意義

本研究の目的は、本邦のLGBが、自身の性指向にどのような経験をしているか、特に「LGBであることの強み」に着目し、個別性を尊重して明らかにすること、であった。LGBであることの強みに関する研究が、本邦の当事者を対象にしていなかったこと、ほとんど実証主義であったことの2点を課題とし、行われてきた。ちなみに本邦の当事者を対象にした研究については、強みに焦点を当てた研究のみならず、ネガティブな側面も含めたさまざまな経験でもほとんど見られなかった。

このような課題に、本研究はどのような意義をもたらしたのか、1) 強みとして当事者支援活動を行うことに自分も支えられている実感が必要であったことと、2) 他者の期待や言動に配慮し、謙る経験を見出したこと、の2点に沿ってまとめる。

#### (1) 強みとして当事者支援活動を行うことに自分も支えられている実感が必要であったこと

強みの中でも、本論では、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景に着目した。着目した理由についてまず述べると、第2章の結果と考察によるものであった。本邦のLGB特有の強みではなかったが、【社会へのアプローチ】内に、[当事者として役に立ちたい] や、[社会に変化を求める] グループが見られた。これらは Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」や、Riggle et al. (2014)の「社会正義」の因子に類似する語りで構成されたが、[当事者として役に立ちたい] と実際に当事者支援団体に所属するか、立ち上げるかなどしてアクティヴィストになる、もしくは、当事者支援を生業としている当事者の語り、[社会に変化を求める] が、実際の活動はなく、変容に賛同する当事者の語りにグループが分けられた点は特徴的であった。この差にどのような背景があるのかは、第2章の研究では明らかにならなかったが、[当事者として役に立ちたい]のグループのように、より他者志向的な経験の方が、当事者にとって自分の強みとして認識されやすく、ポジティブに作用しうるのではないかと考えた。そのため、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景が明らかになることが、第3章以降の個別性を尊重したナラティブ研究の主たる目的となった。

その第3章以降の研究で新たに明らかになったことの 하나가、強みとして当事者支援活

動を行う背景に、自分も支えられるという目的や実感が必要であったことであった。先行研究では得られなかった内容も含まれ、新奇性のある知見を見出した点で学術的意義があったといえる。本論でナラティブ研究の対象となった3人のLGBは、当事者支援活動にあたってさまざまな背景を有しており、個別性の高い経験をしてきたが、自分も支えられるために当事者支援活動を始めたことは共通していた。本章の第1節(5)第6章の要約で示したように、B(第3章)は自分の居場所づくりのために、C(第4章)は『セルフヘルプ』のために、H(第5章)はレズビアンであったことでネガティブな経験をしてきた『自分自身も見つめ』るために、当事者支援を行っていた。3人の当事者は、LGBを対象にした研究が発展する当初から示されてきた、セクシュアリティへの混乱(Cass, 1979; Mohr & Kendra, 2011; Troiden, 1989)や、孤独感(Mohr & Kendra, 2011; 高藤・岡本, 2017)、自己への嫌悪感(Mohr & Kendra, 2011; Shidlo, 1994)、スティグマ(Ross & Roser, 1996)なども一部抱えながら、その対処として、当事者支援活動に臨んでいたのであった。Vaughan et al. (2012)や、Riggle et al. (2012)のような実証主義の研究では見出せなかった視点といえた。

当事者支援活動に自分も支えられるという目的や実感が存在しうることは、斉藤(2019)などからも見出せるが、第3章以降の研究では、先行研究で述べられるような強みとしての当事者支援行動が生じるには、「実際に自分も支えられていることが当事者支援活動の中で実感されていることが重要」であったことが新たに示された。具体的には第4章のCや、第5章のHの結果と考察があげられた。Cの場合は、当事者支援活動に『セルフヘルプ』のみを求めた。第2章や第3章のBでは、【LGBであることに対する落ち着いた態度】を示すなど、ある程度同性愛への受容や、対外的活動の意識が同時にあった上で、〈状況への対処〉行動として居場所づくりを行うことなどを当事者支援活動の目的としていたが、Cは自分の『セルフヘルプ』、第2章でいう〈状況への対処〉のみを目的としたことを語った。そのようなCの場合は、当事者支援活動を辞めており、直結して捉えられていた「平等・公平」(Vaughan et al., 2012)や、「社会正義」(Riggle et al., 2012)という強みや、『セルフヘルプ』とCが語ったものに近い「自己コントロール」(Vaughan et al., 2012)の強みも実感されていなかった。Hの場合は、自分も他者も支えられることを当事者支援活動に求めたが、自分も支えられている実感はあまり得られていなかった。支援者を担うからこそ差別や偏見がなくならないことを確かに気づき、本来の目的であった『自分自身も見つめ』る機会とはなりづらく、『しんどい』思いをしていた。さらには、当事者支援活動を辞める選択も出ており、H自身の中では、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」やRiggle et al. (2014)のいう「社会正義」で述べられる強みも経験されづらくなっているようだった。以上より、この他者だけでなく自分も支えられている、という実感が、先行研究で述べられるような強みとして当事者支援活動を行う重要な背景になっていると考えられた。



## (2) 他者の期待や言動に配慮し、謙る経験

次に、本邦のLGBに、他者の期待や言動に配慮し、謙る経験が新たに見られたことも、本研究の意義であった。Mohr & Kendra (2011)とは異なる知見として、[LGBで申し訳ない]、[期待に応えられない]、[LGBでいられてありがたい]というグループもあげられた。どれも自分自身の性指向への評価や態度ではあるが、ポジティブにもネガティブにも他者の期待や言動に配慮し、かつ、「謙っていた(自分の立場を低くした態度をとっていた)」点でその他のグループとは別と捉えられ、一次グループのまま残された。これらの語りは類似する言及が見られそうな国外の家族との関係性に関する研究(D'Augelli, 1998; Savin-Williams, 2001; Newman & Muzzonigro, 1993)や、アイデンティティの「世代性(Erikson, 1959/2011)」に関する研究(Rostati et al., 2021; Rosebrough, 2003)とも、異なる結果のように思われた。すなわち、他者の期待や言動に配慮し、かつ、謙る経験も、新たに得られた知見であった可能性が十分に考えられた。

これらの評価や態度に与えた影響として、図解化、叙述化の結果から、他者とのつながりを重視する傾向、特に、家系のつながりや家族内の伝統的価値観重視の根強さがあったと考えられた。LGBアイデンティティに影響を与えた経験や社会的背景の中で、[古い「家」]というグループが得られた。現在の家族から問われる態度だけではなく、古くからあった家族観が自分の性指向に基づく経験に影響を与えていると、LGBが評価していることを示していた。古くからあった家族観、という影響に関する言及は先行研究と比較しても少なかった。しかしながら、アジア文化圏民族が、他民族と比較し家族集団との繋がりを重視し、家族孝行が行動を規定する可能性は、これまでも指摘されている(Fukuyama & Ferguson, 2000)。すなわちアジアに含まれる本邦でも、欧米研究と比較して家系のつながりや家族内の伝統的価値観の重視が根強いいため、他者の期待や言動に配慮し、かつ、謙る経験を作ったと考えられた。

実際に、第4章のCのナラティブから、家族内の伝統的価値観の直接的影響と、他者の期待や言動に配慮し、謙る経験の具体的様相を見出すことができた。『アウトサイダー』に生きることを、兄弟の期待に応えられないことと捉える経験は、第2章でのLGBでないコミュニティの期待や言動に配慮し、かつ、謙っている、[期待に応えられない]グループの語りをより具体的にあらわした。やはり、家族への孝行が行動を規定するという点で、Fukuyama & Ferguson (2000)と一致し、期待に応えられないと思う気持ちには、本邦の文化・歴史的背景が直接的に関係あるように考えられた。Cはさらに、その時の感情を『裏切っている』気持ちと具体的に語った。すなわち、Cの語りから、1) [期待に応えられない]ことは、本邦の文化・歴史的背景と直接関連をもった経験である可能性があることと、2) 『裏切っている』という罪や自己責任の意識を生成することがあること、さらには、3) 本邦においては未だ罪や自己責任といった捉え方が見られることが示された。

## 2. 社会的意義

次に、本研究で見出された知見が社会にどのような有益性をもたらすか、について言及する。ただし、心理的支援などにおける有益性は、3. 臨床的意義の方で詳述する。具体的には、1) 当事者支援活動を行うLGBへの理解の変容、2) 国外の先行研究や一般的知見で本邦のLGBを理解することの問題に基づいて詳述する。

#### (1) 当事者支援活動を行うLGBへの理解の変容

まず、当事者支援活動を行うLGBへの理解の社会的変容の必要性に言及できた点は、本論の意義といえる。確かに、当事者支援活動を行うことは実際に他者を支えることにつながり、Vaughan et al. (2014)の「平等・公平」やRiggle et al. (2014)の「社会正義」で述べられているように、当事者として他の当事者を支える活動を行うことが強みとして実感されている場合もあった。一方で、Cのように、そもそも自分が支えられることのみを当事者支援活動の目的としている者がいた。Hのように、自分も支えられている実感が得られなければ、他者を支える意識もしづらい者もいた。周囲が強みを生かそうとして、他者を支援する機会を単純に提供することになれば、Cのように当事者支援活動を辞めていくことや、Hのように『受け入れざるを得ない』役割と「正義」の強みとしての実感が得らづらくなること、活動を辞めることが選択肢に入ることにつながるかもしれない。このことは、ひきこもり当事者の活動を始めた川田(2017)にも類似する言及が見られ、LGBに限った問題ではないようにも考えられる。以上より、当事者支援活動は、他者を支えるだけでなく、自分も支えられる強みであるという理解の方がより適切であると考えられ、その理解の変容に言及できたことは本論の大きな意義と考えられる。

#### (2) 国外の先行研究や一般的知見で本邦のLGBを理解することの問題

次に、国内のLGBが独自の経験をしていることから、国外の先行研究や一般的知見が必ずしも理解に繋がるとは限らないことが明らかになった点は、臨床心理学に限らず、一般社会にも広められるべきことと思われる。第2章の考察における、本邦の当事者が、他者の期待や言動に配慮し、謙るという経験をしている可能性から、文化・歴史的背景の交差を考慮に入れ、LGBの経験の国内外の差異に関する研究が行われるべきである。このような文化・歴史的背景の交差についてはGhabrial(2017)やGhabrial & Anderson(2021)の研究で示された、有色人種のLGBTQ+への理解に関する言及と一致する。ただし、他者の期待や言動に配慮し、謙るという経験が理解されていないことでどのような影響を及ぼすのか、具体的に言及するには本論の知見では不十分で、この点は研究課題といえる。

### 3. 臨床的意義

特に、心理的支援などの臨床心理学分野に限定して社会的意義を述べると、当事者支援活動を先行研究で述べられているような強みとして実感できないときに、その者の人生を支持し、発展に貢献できる者と話し合える場を提供することが有益であることを示せたこ

とがあげられる。本研究、第5章で新たに考察された点であった。Hは、他者も自分も支えられているという実感が当事者支援活動の中で得られづらくなり、『しんどい』思いをしていたが、この研究のインタビューでのIntとの相互性が、当事者支援活動を行うことに再びポジティブな意味をもたらしたと考えられた。具体的には、Hの自分自身に向き合っていない語りに対して、Intは〈自分に意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、わからないもんな〉と感想を述べた後、『回り回って』自分が『救われるために』今後も当事者支援活動をしようとしていることをHが語った点を取り上げた。Winslade & Monk (1991/2001)は、新たなストーリーを生成するためには、そのストーリーを聴き、支持し、発展に貢献する聴衆がいることが求められると述べた。偶然ではあるが、IntがHと同じくLGBで、対外的活動を行っていたために、その経験の理解ができ、Hのストーリーを支持し、感想を述べる形で発展に貢献する聴衆になったと考えられた。このような自分にとっての意味を見出す機会をつくることや、聴衆になることは、心理師、心理士にできることではないだろうか。

### 第3節 本研究の課題と展望

最後に本節では、本研究の理論的および方法論的限界を確認し、残された課題と研究の展望について述べる。今後の研究の展望は主に、他者の期待や言動に配慮し、謙ることに着目した研究、研究課題や理論的サンプリングに基づくナラティブ研究の更なる実施、自分も支えられることに関する他の手法を用いた研究の実施、の3つにまとめられる。以下、それぞれについて詳述する。

#### 他者の期待や言動に配慮し、謙ることに着目した研究

第2章の研究から明らかになった、本邦のLGBの他者の期待や言動に配慮し、謙る経験について、本研究がLGBであることの強みに着目したため、第3章以降での言及はわずかになった。特に、第2章はポスト実証主義の研究のため、客観的事実となることを目指し、今後より大多数のLGBを対象にし、現象を正確に予測できる量的研究などの実証研究を行うことが求められるだろう。[LGBで申し訳ない]、[期待に応えられない]、[LGBでいられてありがたい]といった態度や評価は、他のLGBにも経験され、精神的健康などに影響を与えるものなのか、[古い「家」]のような家系のつながりや家族内の伝統的価値観と直接関連を持っているのかなどを明確にする必要がある。多文化圏のLGBとの比較も求められる。

#### 研究課題や理論的サンプリングに基づくナラティブ研究の更なる実施

インタビュアーとインタビュー어의相互性の考察から、インタビューの構造を再考し、第3章～第5章の対象となった3人に再度インタビューを行うことも研究の展望としてあげられる。各章で示したように、本インタビューであったからこそ得られた語りも多かったが、性指向についての思いを話すことは決められていたため、例えばBのように、『正義感』や『自分が好き』などの他の側面との関連について、重要であったにも関わらず、語ることを難しくさせた可能性がある。本研究で特筆した、Hの『回り回って』自分自身も『救われ』ようとしているという語りも、その後の経験について筆者は強く関心を持っているが、この点を語る時間を設けなかった。LGBであることや当事者支援活動について尋ねる姿勢は維持しつつ、より人生全般を自由に語れる構造で新たなインタビューを行うことは、今後の研究展望の一つとしてあげられる。

理論的サンプリングの観点から、他の当事者へのインタビューを行うことが考えられる。第3章から第5章にかけて、理論的サンプリングで対象ナラティブを選定してきたが、1) ジェンダー、2) 年代、3) 職業経験、4) 人間関係、5) 地域性を一つの観点として、まだサンプリングを行うことができる。特に、思春期以前のLGBを対象にした研究は、保護者

の同意の必要性という倫理的配慮に基づく課題からほとんど行われてこなかったが、近年、保護者の同意に代替する手続きが示され、研究が行われるようになってきた。本論の問題意識に沿って、思春期以前のLGBを対象にした研究が行われていく必要があるだろう。

### **自分も支えられることに関する他の手法を用いた研究の実施**

最後に、他の手法の研究を用いていくことである。本研究は、主として当事者の個別性を尊重する社会構成主義に立った研究を行い、その結果得られた知見も多かったが、ありのままを捉えるあまりに結果の明瞭さには欠けた。当事者支援活動を行う多くのLGBが、自分も支えられることを求めているのか、当事者支援活動を行っていない者との比較したときどのように経験の様相は異なるか、自分も支えられることの実感がないと、本当に従来の当事者支援活動の強みの機能は発揮されないのか、などを実証主義の立場から明らかにすることも、一つの研究の展開として行っても良いかもしれない。

## 文献

- 阿部望・岸田広平・石川信一 (2021). 強み介入が中学生の精神的健康に及ぼす効果に感吸える検討. 教育心理学研究, 69, 64-78.
- Allen, K. R. & Demo, D. H. (1995). The families of lesbians and gay men: A new frontier in family research. *Journal of Marriage and the Family*, 57, 111-127.
- American Psychological Association (2009). Appropriate Therapeutic Responses to Sexual Orientation. Retrieved from <http://www.apa.org/pi/lgbc/publications/therapeutic-resp.html> (2022年5月27日閲覧)
- Amola, O., & Grimmer, M. A. (2015). Sexual identity, mental health, HIV risk behaviors, and internalized homophobia among black men who have sex with men. *Journal of Counseling & Development*, 93(2), 236-246.
- Anhalt, K., Toomey, R. B., & Shramko, M. (2020). Latinx sexual minority youth adjustment in the context of discrimination and internalized homonegativity: The moderating role of cultural orientation processes. *Journal of Latine Psychology*, 8(1), 41-57.
- 朝日新聞 (2016). 「同性愛漏らされ」院生転落死, 提訴 遺族, 同級生・大学を東京地裁朝日新聞 8月6日朝刊, 37.
- Barnes, L. B., Christensen, C. R., & Hansen, A. J. (1994). *Teaching and the Case Method: Text, Cases, and Readings*. Boston: Harvard Business School Press.
- Benedict, R. (1946). *The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture—*. Mariner Books. 角田安正 (2008). 菊と刀. 光文社.
- Blumstein, P. W. & Schwartz, P. (1977). Bisexuality: some social psychological issues. *Journal of Social Issues*, 33 (2), 30-45.
- Bruner, J. (1990). *Acts of meaning: four lectures on mind and culture*. Harvard University Press. 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 (訳) (2016). 意味の復権 [新装版]: フォークサイコロジーに向けて. ミネルヴァ書房.
- Campbell, D. T. (1975). Degrees of freedom and the case study. *Comparative Political Studies*, 8(1), 178-191.
- Cass, V. C. (1979). Homosexual identity formation: A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, 4, 219-235.
- Calzo, J. P., Poteat, V. P., Yoshikawa, H., Russell, S. T., Bogart, L. (2020). Person-environment fit and positive youth development in the context of high school Gay-Straight Alliances. *Journal of Research on Adolescence*, 30(S1), 158-176.
- Ceccolini, C. J., Poteat, V. P., Calzo, J. P., Yoshikawa, H., & Meyer, K. (2020). A mixed-methods examination of the unique associations of gender-sexuality

- alliance involvement and family support on bravery in sexual and gender minority youth. *Journal of Adolescent Research*, 36(2)154-182.
- Council for International Organizations of Medical Sciences (2016). *International Ethical Guidelines for Health-related Research Involving Humans*, Fourth Edition. Geneva. (栗原千絵子・齊尾武郎 (訳)・渡邊裕司 (監修) (2018). 人間を対象とする健康関連研究の国際的倫理指針 臨床評価, 45(4), 745-862.)
- Crenshaw, K. (1989). Demarginalizing the intersection of race and sex: A black feminist critique of antidiscrimination doctrine, feminist theory and antiracist politics. *University of Chicago Legal Forum*, 8, 139-167.
- D' Augelli, A. R. (1994). Identity development and sexual orientation: Toward a model of lesbian, gay and bisexual development. In E. J. Trickett, R. J. Watts, & D. Birman (Eds.), *Human diversity: Perspectives on people in context* (pp. 312-333). San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- D' Augelli, A. R., Hershberger, S. L., & Pilkington, N. W. (1998). Lesbian, gay, and bisexual youth and their families: Disclosure of sexual orientation and its consequences. *American Journal of Orthopsychiatry*, 63, 361-371.
- DeLamater, J. D., & Sill, M. (2005). Sexual Desire in Later Life. *Journal of Sex Research*, 42(2), 138-149.
- Denzin, N. K. (1970). *The Research Act: A Theoretical Introduction to Sociological Methods*. Rondon & New York; Routledge.
- Diamond, L. M. (2007). A dynamical systems approach to the development and expression of female same-sex sexuality. *Perspectives on Psychological Science*, 2(2), 142-161.
- Dogan, M. & Pelassy, D. (1990). *How to compare nations: Strategies in comparative politics* (2nd ed.). Chatham, UK: Chatham House.
- 土居健郎 (2007). 「甘え」の構造 [増補普及版]. 弘文堂.
- 同性婚人権救済弁護団 (編) (2016). *同性婚 だれもが自由に結婚する権利*. 明石書店.
- 枝川京子 (2019). LGBTQ+の家族支援. 葛西真記子 (編). *LGBTQ+の児童・生徒・学生への支援* (pp. 85-106). 誠信書房.
- 枝川京子・辻河昌登 (2011). LGBT 当事者の理解にナラティブ生成が果たす役割. *心理臨床学研究*, 29, 85-96.
- 遠藤利彦 (2002). 問いを発することと確かめること-心理学の方法論をめぐる一試論・私論-. 下山晴彦・子安増生 (編). *心理学の新しいかたち-方法への意識-* (pp. 38-72). 誠信書房.
- Erikson, E. (1959). *Identity and the life cycle*. Selected Papers. New York: International Universities Press. 西平直・中島由恵 (訳) (2011). *アイデンティ*



- ティとライフサイクル. 誠心書房.
- Flick, U. (2007). *Qualitative Sozialforschung*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag.
- 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) (2011). 新版 質的研究入門<人間の科学>のための方法論. 春秋社.
- Fredrickson, B. L. (1998). What goof are positive emotions? *Review of General Psychology*, **2**(3), 300-319.
- Fredrickson, B. L. (2004). The broaden-and-build theory of positive emotion. *The Royal Society*, **359**, 1367-1377.
- Fredrickson, B. L., Levenson, R. W. (1998). Positive emotions speed recovery from the cardiovascular sequelae of negative emotions. *Cognition and Emotion*, **24**(4), 237-258.
- Fredrickson, B. L., Mancuso, R. A., Branigan, C., & Tugade, M. M. (2000). The undoing effect of positive emotions. *Motivation and Emotion*, **24**(4), 237-258.
- Fukuyama, M. A., & Ferguson, A. D. (2000). Lesbian, gay, and bisexual people of color: Understanding cultural complexity and managing multiple oppressions. In R. M. Perez, K. A. DeBord, & K. J. Bieschke (Eds.), *Handbook of counseling and psychotherapy with lesbian, gay, and bisexual clients* (pp. 81-105). Washington, DC, US: American Psychological Association.
- 古田雅明 (2016). KJ法の臨床応用-実践的な指針の探索. 福島哲夫 (編). 臨床現場で役立つ質的研究法-臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで- (pp. 21-32). 新曜社.
- Frost, D. M., & Meyer, I. H. (2009). Internalized homophobia and relationship quality among lesbians, gay men, and bisexuals. *Journal of Counseling Psychology*, **56**(1), 97-109.
- Flyvbjerg, B. (2001). *Making Social Science Matter: Why Social Inquiry Fails and How it Can Succeed Again (Context, Values and Power in Social and Political Inquiry)*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Flyvbjerg, B. (2006). Five misunderstandings about case-study research. *Qualitative Inquiry*, **12**(2), 219-245.
- Galliher, R. V., McLean, K. C., & Syed, M. (2017). An integrated developmental model for studying identity content in context. *Developmental Psychology*, **53**(11), 2011-2022.
- Gergen, K. J. (1999). *An Invitation to Social Construction*. London: SAGE Publication Ltd. 東村知子 (訳) (2004). あなたへの社会構成主義. ナカニシヤ出版.
- Ghabrial, M. A. (2017). "Trying to figure out where we belong": Narratives of racialized sexual minorities on community, identity, discrimination, and health. *Sexual Research and Social Policy*, **14**, 42-55.

- Ghabrial, M. A., & Andersen, J. P. (2021). Development and initial validation of the queer people of color identity affirmation scale. *Journal of Counseling Psychology*, **68**(1), 38-53.
- Ghielen, S. T. S., Woerkom, M., & Meyers, M. C. (2017). Promoting positive outcomes through strengths interventions: A literature review. *The Journal of Positive Psychology*, **13**(6), 573-585.
- Gibson, P. (1989). Gay male and lesbian youth suicide. *Prevention and Intervention in Youth Suicide (Report to the Secretary's Task Force on Youth Suicide)*, **3**, 115-147.
- Glaser, G. B. & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory; Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine. 後藤勝・大出春江・水野節夫 (訳) (1996). *データ対話型理論の発見*. 新曜社.
- Goldfried, M. R., & Goldfried, A. P. (2001). The importance of parental support in the lives of gay, lesbian, and bisexual individuals. *Journal of Clinical Psychology*, **57**, 681-693.
- Hamaguchi, E. (1985). A contextual model of the Japanese: Toward a methodological innovation in Japan studies. *Journal of Japanese Studies*, **11**, 289-321.
- Hermanns, H. (1995). Narrative Interview. In Flick, U., Kardorff, E., Keupp, H., Rosenstiel, L., & Wolff, S. (Eds). *Handbuch Qualitative Sozialforschung* (pp.182-185). Weinheim: Psychologie Velags Union.
- 羽田野花美・多久島寛孝・永末芳子・大坪昌喜 (2020). 大学における性的マイノリティ学生支援の取り組み-中国・四国, 九州・沖縄の大学・短期大学の調査結果. *熊本保健科学大学研究誌*, **17**, 115-121.
- Hammack, P. L., Mayers, L., & Windell, E. P. (2013). Narrative, psychology and the politics of sexual identity in the United States: from 'sickness' to 'species' to 'subject. *Psychology & Sexuality*, **4**(3), 219-243.
- Heatherington, L. & Lavner, J. (2008). Coming to terms with coming out: Review and recommendations for family systems-focused research. *Journal of Family Psychology*, **22**(3), 329-343.
- Herek, G. M. (2003). The psychology of sexual prejudice. In Garnets L., & Kimmel D. (Eds.), *Psychological Perspectives on Gay, Lesbian and Bisexual Experiences* (pp.157-164). New York, NY: Columbia University Press.
- Herek, G. M., Cogan, J. C., Gillis, J. R., & Glunt, E. K. (1998). Correlates of internalized homophobia in a community sample of lesbians and gay men. *Journal of the Gay & Lesbian Medical Association*, **2**(1), 17-25.
- 日高庸晴 (2021). 多様性があたりまえの未来へ国内最大規模のLGBTs 調査結果から-LGBTs

- の学齢期におけるいじめ被害・自傷行為・自殺未遂経験の現状-。助産雑誌, 75(5), 370-375.
- 平田 俊明 (2014a). レズビアン, ゲイ, バイセクシュアル支援のための基本知識. 針間 克己・平田 俊明 (編). セクシュアル・マイノリティへの心理的支援—同性愛, 性同一性障害を理解する— (pp. 26-38). 岩崎学術出版社.
- 平田 俊明 (2014b). 日本における「同性愛」の歴史. 針間 克己・平田 俊明 (編). セクシュアル・マイノリティへの心理的支援—同性愛, 性同一性障害を理解する— (pp. 73-82). 岩崎学術出版社.
- 広瀬 弘忠 (1993). エイズの認知過程—イメージと偏見のダイナミズム 武田 敏・松岡 弘 (編) 現代のエスプリ—エイズと教育— (pp. 93-103). 至文堂.
- Holstein, J. A., & Gubrium, J. E. (1995). *The Active Interview*. Thousand Oaks, CA: Sage. 山田富秋・金子一・倉石一郎・矢原隆行(訳) (2004). *アクティブ・インタビュー 相互行為としての社会調査*. せりか書房.
- 堀田香織 (1998). 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成. 学生相談研究, 19(1), 13-21.
- 一柳貴博 (2021). 周囲児は自閉スペクトラム症が疑われる児童にどのように関わっているのか-小学校教諭から見た周囲児の行動メカニズム-. 教育心理学研究, 69, 79-94.
- 井出智博・玉井紀子・鎌塚優子・山元薫・松尾由希子・細川知子 (2019). セクシュアルマイノリティ児童生徒へのスクールカウンセラーによる支援の現状と課題: 肯定的カウンセリング効力感に着目して. 静岡大学教育学部研究報告人文・社会・自然科学篇, 70, 79-93.
- 今井多樹子・岡田麻里・高瀬美由紀 (2020). 新人看護師が複数の患者を同時に受け持つ体制下で直面する多重課題対応不全を生み出す因子-KJ法を活用した新人看護師の面接内容の構造化から. 質的心理学研究, 19, 141-157.
- 石丸径一郎 (2001). マイノリティ・グループ・アイデンティティ—人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか-. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 283-290.
- 石丸径一郎 (2007a). レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルと他のマイノリティ・グループとの比較. 石丸 径一郎 (編)・下山 晴彦 (監修). シリーズ・臨床心理学研究の最前線① 同性愛者における他者からの拒絶と受容—ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ— (pp. 19-40). ミネルヴァ書房.
- 石丸径一郎 (2007b). レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの日常生活における受容体験・拒絶体験の実際. 石丸 径一郎 (編)・下山 晴彦 (監修). シリーズ・臨床心理学研究の最前線① 同性愛者における他者からの拒絶と受容—ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ— (pp. 61-98). ミネルヴァ書房.
- 岩壁茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究. 岩崎学術出版社.
- Johnson, C. W. (2000). *Living the game of hide and seek: Leisure in the lives of*

- gay and lesbian young adults. *Leisure*, 24(3/4), 255-278.
- 葛西真記子・岡橋陽子 (2011). LGB Sensitive カウンセラー養成プログラムの実践. *心理臨床学研究*, 29(3), 257-268.
- 葛西真記子 (2019). 教育現場におけるLGBTQ+. 葛西真記子 (編). *LGBTQ+の児童・生徒・学生への支援* (pp.3-16). 誠信書房.
- Kaung, M. F. (2005). Mental health and sexual orientation of females in Japan: Using the Internet as a research tool. *心理臨床学研究*, 23(2), 256-260.
- 河合隼雄 (2001). 事例研究の意義. *臨床心理学*, 1, 4-9.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために. 中央公論社.
- 川喜田二郎 (1986). KJ 法—混沌をして語らしめる. 中央公論社.
- 風間孝・北仲千里・釜野さおり・林夏生・藤原直子 (2021). 大学における性的指向・性自認 (SOGI) に関する施策及び取り組みに関する全国調査報告. *社会科学研究*, 41(2), 181-230.
- 川田八空 (2017). セルフヘルプグループ (SHG) 論の批判的検討—ひきこもりサミットの「当事者研究」を通じて—. 2017 年度東京都立大学卒業論文.
- 木場安莉沙 (2019). バイセクシュアル・アイデンティティのナラティブ分析—アイデンティティの共時的構築を中心に—. *社会言語科学*, 22, 157-171.
- 小杉亮子 (2015). 日本の一九六〇年代学生運動における多元性—文化的アプローチによる事例分析から—. *社会学研究*, 96, 165-191.
- 小谷野淳子 (2014). HIV 感染症とゲイ・バイセクシュアル男性への心理臨床. 針間 克己・平田 俊明 (編). *セクシュアル・マイノリティへの心理的支援—同性愛, 性同一性障害を理解する—* (pp.170-182). 岩崎学術出版社.
- Liang, J. Y., Tan, S., & O' Halloran, K. (2017). Representing sexuality and morality in sex education picture books in contemporary China. *Social Semiotics*, 27(1), 107-126.
- Liu, F., Chui, H., & Chung, M. C. (2022). Clients' experience of LGBQ affirmative and nonaffirmative practice in China: An interpretative phenomenological analysis. *Psychotherapy*, 59(1), 1-12.
- Matthews, R. C. (2007). Affirmative lesbian, gay, and bisexual counseling with all clients. In R. M. Perez, K. A. Debord & K. J. Bieschke (Eds.). *Handbook of Counseling and Psychotherapy with Lesbian, Gay, and Bisexual Clients*, second edition (pp.201-219). Washington, DC: American Psychological Association.
- McCarn, S. R., & Fassinger, R. E. (1996). Revisioning sexual minority identity formation: A new model of lesbian identity and its implications for counseling and research. *The Counseling Psychologist*, 24, 508-543.

- McLean, K. C., Syed, M., Yoder, A., & Greenhoot, A. F. (2016). The role of domain content in understanding identity development processes. *Journal of Research on Adolescence*, **26**(1), 60-75.
- Meyer, I. H. (1995). Minority stress and mental health in gay men. *Journal of Health and Social Behavior*, **36**, 38-56.
- 宮腰 辰男 (2013). セクシュアルマイノリティを生きるということ-カミングアウトとコミュニティをめぐる危機と回復について-. 大正大学カウンセリング研究所紀要, **36**, 39-52.
- 三好真人・堀川聡司・高岸百合子 (2021). 心理学を専攻する大学生が抱く「アルコール依存症」のイメージ. *心理臨床学研究*, **39**(5), 454-460.
- Mohr, J. J. & Fassinger, R. E. (2000). Measuring dimensions of lesbian and gay male experiences. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **33**, 66-90.
- Mohr, J. J. & Kendra, M. S. (2011). Revision and extension of a multidimensional measure of sexual minority identity: The Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale. *Journal of Counseling Psychology*, **58**(2), 234-245.
- 森岡正芳 (2015). ナラティブとは. 森岡正芳 (編). *臨床ナラティブアプローチ* (pp. 3-17). ミネルヴァ書房.
- Mustanski, B. (2011). Ethical and regulatory issues with conducting sexuality research with LGBT adolescents: A call to action for a scientifically informed approach. *Archives of Sexual Behavior*, **40**(4), 673-686.
- Mustanski, B., Moskowitz, D. A., Moran, K. O., Newcomb, M. E., Macapagal, K., Rodriguez-Diaz, C., Rendina, H. J., Laber, E. B., Li, D. H., Matson, M, Talan, A. K., & Cabril, C. (2020). Evaluation of a stepped-care Health HIV prevention program for diverse adolescent men who have sex with men: Protocol for a hybrid type 1 effectiveness implementation trial of SMART. *JMIR Research Protocols*, **9**(8). DOI: 10.2196/19701
- Newman, B. S., & Muzzonigro, P. G. (1993). The effects of traditional family values on the coming out process of gay male adolescents. *Adolescence*, **28**, 213-227.
- 野村晴夫 (2005). 構造的-一貫性に着目したナラティブ分析-高齢者の人生転機の語りに基づく方法論的検討-. *発達心理学研究*, **16**, 109-121.
- 野村晴夫 (2014). 語りからデータを得て実証する. 森岡正芳・大山泰宏 (編). *臨床心理職のための「研究論文の教室」 研究論文の読み方・書き方ガイド* (pp. 66-72). 金剛出版.
- 大竹恵子・島井哲志・池見 陽・宇津木成介・ピーター ソン, クリストファー・セリグマ

- ン, マーティン E. P. (2005). 日本版生き方の原則調査票(VIA-IS: Values in Action Inventory of Strengths)作成の試み 心理学研究, 76(5), 461-467.
- 大塚隆史・城戸健太郎 (編) (2017). LGBT のひろば. 日本評論社.
- Peterson, C., & Seligman, M. E. (2004). Character strengths and virtues: A handbook and classification. Oxford University Press.
- Pickles, J. (2020). Including and involving young people (under 18' s) in hate research without the consent of parents. *Qualitative Research*, 20(1), 22-38.
- Ponterotto, J. G. (2002). Qualitative research in counseling psychology: A primer on research paradigms and philosophy of science. *Journal of Counseling Psychology*, 52, 126-136.
- Porta C. M., Gower, A. L., Brown, C., Wood, B., & Eisenberg, M. E. (2020). Perceptions of sexual orientation and gender identity minority adolescents about labels. *Western Journal of Nursing Research*, 42(2), 81-89.
- Poteat, V. P., Calzo, J. P., Yoshikawa, H., Lipkin, A., Ceccolini, C. J., Rosenbach, S. B., O' Brien, M. D., Marx, R. A., Murchison, G. R., & Burson, E. (2020). Greater engagement in Gender-Sexuality Alliances (GSAs) and GSA characteristics predict youth empowerment and reduced mental health concerns. *Child Development*, 91(5), 1509-1528.
- Poteat, V. P., Godfrey, E. B., Brion-Meisels, G., Calzo, J. P. (2020). Development of youth advocacy and sociopolitical efficacy as dimensions of critical consciousness within gender-sexuality alliances. *Developmental Psychology*, 56(6), 1207-1219.
- Riggle, E. D., Mohr, J. J., Rostosky, S. S., & Fingerhut A. W. (2014). A multifactor lesbian, gay, and bisexual positive identity measure (LGB-PIM). *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, 1(4), 398-411.
- Riggle, E. D. B., & Rostosky, S. S. (2012). A positive view of LGBTQ: Embracing identity and cultivating well-being. Lanham, MD: Rowman & Littlefield.
- Rosario, M., Schrimshaw, E.W., & Hunter, J. (2008). Predicting different patterns of sexual identity development over time among lesbian, gay, and bisexual youths: A cluster analytic approach. *American Journal of Community Psychology*, 42(3-4), 266-282.
- Ross, M. W., & Roser, B. R. (1996). Measurement and correlates of internalized homophobia: A factor analytic study. *Journal of Clinical Psychology*, 52(1), 15-21.
- Roseborough, D. (2003). Conceptions of gay male life-span development: Past and present. *Human Behavior in the Social Environment*, 8(2-3), 29-53.

- Rostati, F., Pistella, J., Giovanardi, G., & Baiocco, R. (2021). Queer generativity in lesbian, gay, and bisexual older adults: Personal, relational, and political/social behaviours. *Journal of Community & Applied Social Psychology*, **31**, 673-689.
- Rust, P. C. (2000). Bisexuality: a contemporary paradox for women. *Journal of Social Issues*, **56**(2), 205-221.
- Said, E. W. (1979). *Orientalism*. Vintage. 板垣雄三・杉田秀明 (監修)・今沢紀子 (訳) (1993). *オリエンタリズム*. 平凡社.
- 桜井厚 (2005a). インタビュー・テキストを解釈する. 桜井厚・小林多寿子 (編). *ライフストーリーインタビュー—質的研究入門—* (pp. 129-208). せりか書房.
- 桜井厚 (2005b). ライフストーリーインタビューをはじめ. 桜井厚・小林多寿子 (編). *ライフストーリーインタビュー—質的研究入門—* (pp. 11-61). せりか書房.
- 桜井厚 (2006). ライフストーリーの社会的文脈. 能智正博 (編). *〈語り〉と出会う—室的研究の新たな展開に向けて—* (pp. 73-115). ミネルヴァ書房.
- Savin-Williams, R. C. (2001). Mom, dad. I'm gay. How families negotiate coming out. American Psychological Association.
- Schutte, N. S. & Malouff, J. M. (2019). The impact of signature character strengths interventions: A meta-analysis. *Journal of Happiness Studies*, **20**, 1179-1196.
- Schwandt, T. A. (1994). Constructivist, interpretivist approaches to human inquiry. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.). *Handbook of qualitative research* (pp. 118-137). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Seligman, M. E. P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, **55**, 5-14.
- Seligman, M. E. P., Steen, T. A., Park, N., & Peterson, C. (2005). Positive psychology progress: Empirical validation of interventions. *American Psychologist*, **60**(5), 410-421.
- Shapiro, D. N., Rios, D., & Stewart, A. J. (2010). Conceptualizing lesbian sexual identity development: Narrative accounts of socializing structures and individual decisions and actions. *Feminism & Psychology*, **20**(4), 491-510.
- Shidlo, A. (1994). Internalized Homophobia: Conceptual and empirical issues in measurement. In Greene, B., & Herek, G.M. (Eds.), *Lesbian and gay psychology: Theory, research and clinical applications* (pp. 176-205). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 白田幸治 (2013). 人は他者を支えるためにセルフヘルプグループに参加するのか?—交換理論で読み解くセルフヘルプグループ—. *Core Ethics*, **9**, 105-115.
- Skorikov, V. & Vondracek, F. W. (1998). Vocational identity development: Its

- relationship to other identity domains and to overall identity development. *Journal of Career Assessment*, **6**, 13-35.
- 荘島幸子 (2008). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程-自らを「性同一性障害」と語らなくなった A の事例の質的検討-. *パーソナリティ研究* **16**(3), 265-278.
- Szymanski, D. M., & Chung, Y. B. (2001). The lesbian internalized homophobia scale: A rational/theoretical approach. *Journal of Homosexuality*, **41**, 37-52.
- 高藤真作・岡本祐子 (2017). 青年期の男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示に至るプロセス. *心理臨床学研究*, **35**(3), 297-303.
- 高藤真作・岡本祐子 (2019). 青年期・成人初期の男性同性愛者の同性愛嫌悪の内在化とその変容の検討. *心理臨床学研究*, **37**(5), 468- 480.
- 高野陽太郎・櫻坂英子 (1997). “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”通説の再検討. *心理学研究*, **68**(4), 312-327.
- 竹家一美 (2008). ある不妊女性のライフストーリーとその解釈-「不妊」という十字架を背負って-. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, **54**, 152-165.
- 田中将司 (2018). 日本におけるレズビアン, ゲイ, バイセクシュアル当事者のセクシュアルアイデンティティに関する心理学研究の課題-海外研究との比較による検討-. *九州大学総合臨床心理研究*, **9**, 205-216.
- Troiden, S. S. (1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, **17**, 43-73.
- 柘植道子 (2014). セクシュアル・マイノリティ大学生を支える学生相談. 針間 克己・平田 俊明 (編). *セクシュアル・マイノリティへの心理的支援—同性愛, 性同一性障害を理解する—* (pp. 123-139). 岩崎学術出版社.
- 眞野豊 (2014). 同性愛嫌悪の内面化とクローゼットの不在との間-地方に生きるゲイのライフストーリーの考察から-. *地球社会総合科学研究創刊号*, 71-80.
- McCarn, S. R., & Fassinger, R. E. (1996). Revisioning sexual minority identity formation: A new model of lesbian identity and its implications for counseling and research. *The Counseling Psychologist*, **24**, 508-543.
- Mohr, J. J., & Fassinger, R. E. (2000). Measuring dimensions of lesbian and gay male experiences. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **33**, 66-90.
- Mohr, J. J., & Kendra, M. S. (2011). Revision and extension of a multidimensional measure of sexual minority identity: The lesbian, gay, and bisexual identity scale. *Journal of Counseling Psychology*, **58**(2), 234-245.
- 内田樹 (2009). *日本辺境論*. 新潮社.
- 梅棹忠夫 (1998). *文明の生態史観*. 中公文庫.



- Vaughan, M. D., Miles, J., Parent, M. C., Lee, H. S., Tilghman, J. D., & Prokhorets, S. P. (2014). A content analysis of LGBT-themed positive psychology articles. *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity, 1*(4), 313-324.
- Vaughan, M. D., & Rodriguez, E. M. (2014). LGBT strengths: Incorporating positive psychology into theory, research, training, and practice. *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity, 1*(4), 325-334.
- Visser, D. (2020). Empowerment in a kaleidoscope of identities: Intergroup dynamics and the empowerment process in a Gender and Sexuality Alliance. Wageningen University & Research, Mater International Development Studies: Inclusive Innovation, Communication and Development.
- 涌井幸子 (2006). 「望む性」を生きる自己の語られ方-ある性同一性障害者の場合. *質的心理学研究 5*(5), 27-47.
- Winslade, J. & Monk, G. (1999). *Narrative counseling in school*. Thousand Oaks, CA: Corwin Press Inc. 小森康永 (訳). *新しいスクール・カウンセリング: 学校におけるナラティブ・アプローチ*. 金剛出版.
- Wood, A. M., Linley, P. A., Maltby, J., Kashdan, T. B., & Hurling, R. (2011). Using personal and psychological strengths leads to increases in well-being over time: A longitudinal study and the development of the strengths use questionnaire. *Personality and Individual Differences, 50*(1), 15-19.
- Wolcott, H. F. (2001). *Writing up qualitative research*. Thousand Oaks, Calif: Sage Publications.
- やまだようこ (2000). *人生を物語る: 生成のライフストーリー*. ミネルヴァ書房.
- やまだようこ (2006). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念-ナラティブ・ターンと物語的自己-. *心理学評論, 49*(3), 436-463.
- 横木麻子 (2002). *セクシュアル・マイノリティのアイデンティティ形成に関する質的研究*. 九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻 2002 年度修士論文.
- Zubernis, L., Snyder, M., & McCoy, V. A. (2011). Counseling Lesbian and Gay College Students through the Lens of Cass's and Chickering's Developmental Models. *Journal of LGBT Issues in Counseling, 5*(2), 122-150.

資料



## 資料2 第2章の研究協力の同意書

### 性的指向に関するインタビュー・アンケートのお願い

今回行うインタビュー、アンケートは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル当事者の思いや信念に関する知見を得るために行われるものです。当事者に対する正しい理解の一助となること、心理的な支援を構想していくことを目的に、今回行うインタビューの内容を検討したいと考えております。そこで、インタビューを行う前にいくつかの点を確認させていただきたく存じます。

#### インタビュー・アンケートへのご協力に関して

インタビュー、アンケートへの参加は自由意思によるものであり、途中でインタビューの中断を行うことも可能です。また、今回のインタビューは紙面による記録、ICレコーダーによる録音を行います。その記録、録音の中断、停止を求めることもできます。

#### 個人情報について

インタビュー、アンケートで得た情報を確認するのは、この調査に関わる研究者と分析協力者のみです。分析協力者にも個人名を公開することはありません。結果を記録したものは安全な場所に保管します。また、調査で得た記録は暗証番号を設定し、インターネットにつながらないパソコンで分析を行い、調査終了後には研究者が責任を持って破棄します。

インタビュー、アンケートの結果は分析が行われた後、学会発表・論文などの形で公表されることがありますが、その際には個人名、その他個人が特定されるような情報は削除いたします。また、ご希望があれば、発表の前に発表内容をご確認、ご指摘いただくことも可能です。

以上をふまえた上で、調査にご協力いただける場合には、以下の欄にご署名いただきませうよろしく願いいたします。

研究責任者：田中将司（九州大学大学院 人間環境学府人間共生システム専攻）  
連絡先（電話）：080-1615-7408  
連絡先（メール）：exs\_s\_castles@yahoo.co.jp  
指導教員：九州大学大学院人間環境学研究院准教授 金子周平

私は本研究に対し、調査協力者として、上記条件のもとでインタビュー、アンケートを受けることを承諾します。

研究協力者署名： \_\_\_\_\_ 日付： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

発表内容のご確認をご希望される方は、以下にメールアドレスをご記入ください。

メールアドレス： \_\_\_\_\_

### 資料3 第3章～第5章の研究協力の同意書

#### **性指向に関するインタビューのお願い**

今回行うインタビューは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル当事者が自身の性指向をどのように思っているか、知見を得るために行われるものです。当事者に対する正しい理解の一助となること、心理的な支援を構想していくことを目的に、個別性を重視したインタビュー、分析を行いたいと考えております。そこで、インタビューを行う前にいくつかの点を確認させていただきたく存じます。

#### **インタビューへのご協力に関して**

インタビューへの参加は自由意思によるものであり、途中でインタビューの中断を行うことも可能です。また、今回のインタビューは紙面による記録、ICレコーダーによる録音を行います。その記録、録音の中断、停止を求めることもできます。

#### **個人情報について**

インタビューで得た情報を確認するのは、この調査に関わる研究者のみです。個人名を公開することはありません。結果を記録したものは鍵のかかる安全な場所に保管します。また、調査で得た記録は暗証番号を設定し、インターネットにつながらないパソコンで分析を行い、研究者が責任を持って破棄します。

インタビューの結果は分析が行われた後、学会発表・論文などの形で公表されることがありますが、その際には個人名、その他個人が特定されるような情報は削除いたします。また、ご希望があれば発表の前に発表内容をご確認、ご指摘いただくことも可能です。

以上をふまえた上で、調査にご協力いただける場合には、以下の欄にご署名いただきますようよろしくお願いいたします。

研究責任者：田中将司（九州大学大学院 人間環境学府人間共生システム専攻）

連絡先（メール）：[exs\\_s\\_castles@yahoo.co.jp](mailto:exs_s_castles@yahoo.co.jp)

指導教員：九州大学大学院人間環境学研究院准教授 金子周平

私は本研究に対し、調査協力者として、上記条件のもとでインタビューを受けることを承諾します。

研究協力者署名：\_\_\_\_\_ 日付：\_\_\_\_年\_\_月\_\_日

発表内容の確認をご希望される方は、以下にメールアドレスをご記入ください。

メールアドレス：\_\_\_\_\_